
ネームレス・メッセージ

ポタージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネームレス・メッセージ

【Nコード】

N8159R

【作者名】

ポタージュ

【あらすじ】

名の無い彼らの物語。此度は、閉ざされし坑道と遊撃の話。

1 特上アルビノも真っ青だとか。(前書き)

取引篇が始まります。

1・特上アルビノも真っ青だとか。

エイسنは迷っていた。今、目の前で依頼人が喰われそうになっているのに、躊躇っている。確かに肉はレアに限るが、そのチキンはレアだと食べやしねえよ、クソツタレ。

事の始まりは三日前。夜の酒場で一人カウンターで酒を煽っていたときだ。

「肉切りエイسنですか？」

エイسنはアルコールに支配された赤い顔で肩越しに振り返った。キヤメルのぼろいマントに身をくるんだ妙齡の少女。カウンターに向き直る。

「肯定ですね。では続けます。頼みたいことがあります」

少女はエイسنの横のスツールに座る。マスターが少女に目をやると、少女はミルクを注文した。沈没した豪華客船を思わせる声。アルコールに魅入っている彼は横目で少女を見た。頭一つ分ほど下に少女の頭頂部がある。鮮やかな金色。おそらく違う街から来ている。

「俺は肉はレアしか受け付けねえ。お前はどんなんだ？ チキンベイベー」

エイスの肩に軽い衝撃が走った。少女の握りこぶしが彼の脇腹に直撃していたのだ。酒場に男の情けないうめき声が響くかと思いきや、泣きを見たのは少女のほうだった。エイスはだばだばで大きい、汚れた黒のコートを着ている。見た限りではそれだけなのに、鋭い痛みがこぶしと指の骨に走る、確かな鉄の感触。

噂の、隠された牙断ちの鎧。この男は確かに肉切りエイスンと呼ばれるその人だった。少女は痛みを感じたことを表に出さないように慎重に言う。

「まさか。特上のアルビノだって真っ青よ」

「聞かせてもらおう」

エイスンが横を向くと、低い位置に彼を見上げる少女の顔があった。青く澄み渡った空を思わせる二つの瞳。白い頬に浮き立つピンクの唇。エイスンの口から即座に口笛という名のファンファーレが吹き鳴らされる。ヒュウ、これは失敬。とっくに成熟した食用チキンか。

「私の故郷の父は食材行商よ。二日後にドラゴンエッグを卸すわ。でも、うちは貧しい。ワイバーン・ドラゴンエッグなんて、とてもじゃないけど競り落とせない」

「競争相手を出し抜くことだなチキンヒーロー」

「そうよ。父が交渉した取引先が商談にのったわ。相手の利益は私。こちらの利益は上流階級からの支払われる大金。あとこれからのお得意様の確保。あなたに頼むのは取引場所への移動の護衛、それと帰りも」

エイスは黙っていた。さらっと言ってはいるが、それはずいぶん痛々しい出し抜き方だなお姫様よ。どんな状況に置かれてい

るかは知らないが、出し抜きに夢中で事故つてやがる。しかも事故らせた娘を踏み台にする父か。こりゃ確かに特上アルビノも黙ってなさそうだ。あのおぞましい鳴き声だけにな。

「本来の価格より比較的安くして売るのはよ。それでもうちにとって
は埋もれる大金だね。王家のクソツタレにはずいぶん美味しい話だから」

「美味しいのはクソか？ それとも女の体か？」

エイスンは少女の頭がわずかに震えたの見逃さなかった。そして余所見のために顔を背けたのも。だが、エイスンには関係のないことだ。空になったグラスを押し出す。気づいたマスターがボトルを拭くのをやめて赤い液体を注ぐ。

「まあいい。それで、俺に対する見返りは？」

「……先行販売はどう？ あなたの言う風に例えるなら、食用チキンの」

エイスンはそれを聞いて、マスターが無言で差し出すグラスを掴み、液体を一気に喉に流し込んだ。

かよわい少女と商業しかできない父親。その組み合わせが百組あっても、飛竜の巢に忍び込むなんて不可能だろう。ならば違うやり方で忍び込む。それも、たかが少女一人差し出すだけで可能になるってわけか。その代わり、娘はハイエナにたかれた死肉になるわけだ。俺なら、間違っても食い残しなんざごめんだ。なら、食い散らかされる前に食うのも悪くはない。こいつもそれを望んでいる。だがな、食われることを望んだチキンってのは、どうも味が悪いと相場は決まってるんだよ。

「条件がある」

「なに？ なんでも言つて」

少女はミルクに手をつけていない。何が面白いのか、湯葉の張ったミルクの表面を覗き込んでいる。

これと同じものを。エイسنはマスターに囁く。小さなかしこまりましたがエイسنに返される。きれいに並べられたグラスの軍隊の一つを取り、エイسنを真っ赤にしたアルコールを注ぐ。少女は驚いてエイسنを見た。

「まあ、飲めよ。飲めないわけでもないだろ」

「私、まだ18……」

「下準備だよ下準備。チキンは塩とみりんで味付けすんだよ。それと同じ」

少女の顔がたちまち赤くなる。意味を理解したのだ。アルコールのせいではない。少女は平静を装った顔でエイسنのほうを見る。エイسنは自分のグラスを片手に、笑いながらグラスをすすめる。おずおずと差し出した細い手にグラスが渡され、少女は一口美酒を飲む。苦味と果物独特の甘味。色から察するに、赤ブドウのワイン。しかし、何か変だ。野草の香りが混じっている。そう気付き、首を傾げながらも少女はちびちびとアルコールを飲み始めた。

なんとも爽やかな味のアルコールを飲み干すことはできなかった。

少女は暗い部屋にいた。すぐに記憶が混濁していることに気づく。わかっているのは、時間が経ったこと。小さな明かりがどこからか漏れている。自分は今、どこかに横たわっている。感覚でそう感じ、起き上がるうとすると上体が真っ直ぐになる。ついで、立ち上がるうとすると、簡単に立ち上がった。天井が近い。少女はベッドにいてことを理解し、そつと降りる。

小さな明かりは細い線状に光っている。早くも闇に目が慣れたの

か、少女はその光が窓から漏れている光だということに気づいた。柔らかいカーペットの感触を足に感じながら窓まで近づき、薄く青く光るカーテンを引くといっぱいの月明かりが降ってきた。まだあまり時間が経っていない。その証拠に、酒場に入ったとき空にちよつとだけしか顔を出していなかった月は、まだ夜空のてっぺんにある。

「起きたか。服は俺が着させたからな」

エイスンが別室から出てきた。金色の目映い光の鎧姿のエイスンは、酒場で見たときとは別人のようだった。

「風呂入ってきたんだよ。チキンを食ったんだからな。非常に美味かったよ。若々しくてみずみずしいチキン」

少女は沸騰する思いで俯く。自分から提示した報酬だったが、いざそれを本当に実行し、終えたとなると気恥ずかしいのは彼女にとつて当然だった。ただ、少女にその記憶が欠けている。それがせめてもの救いかもしれない。

エイスンは暗い部屋を横切り、ベッドに近づいた。カーテンという城壁から解放された月明かりが、先ほどまで少女が横たわっていたベッドを明るく映している。薄いタオルケットの上にあるタオルで髪の毛についた水気を払い、鎧にもついている水滴も払い落とす。月光でキラキラ光る水滴を見ながら、少女は不思議に思う。

「鎧のままお風呂に？」

真っ黒に艶めいた短髪の上でタオルを操る手を止め、だらんとした気力のない目を少女に向けるエイスン。ただそれだけで何も言わない。少女は戸惑い目線をうろうつろとさ迷わせるが、それもつかの

間、エイسنはすぐにまた手を動かし始め、濡れたタオルを放り投げる。

「さて、出発はすぐだ。足は用意するから目的地の名を教えろ」

「マハヴァイルです。一つ山越えたところの」

「説明されなくても知ってる。靴履いて外出ろ」

部屋の片隅に移動したエイسنはごそごと暗闇で蠢いている。次に月明かりに照らされたときには、彼の金色の鎧はコートにすっかり隠されていた。それはまるで、黒い雲に隠れた満月。

「依頼人よ。お前の名はなんだ」

壁掛けからコートを取ったときに、一緒に持ってきた少女の靴を片手にエイسنは声を荒げる。

「シエルです。シエル・エポーサです」

シエルが声を出し終えたときエイسنはドアを開けて窓際のシエルを見ていた。宿の廊下の明かりが眩しく、彼女の目にエイسنの姿が明瞭に映る。

「俺はエイسن」

「いや、知ってます」

靴を履き、歩き始めるエイسنの後ろに張り付くようにしてついていくシエル。こうして男の後ろについていくのは、久しぶりだった。最後の後ろ姿は幼少の頃に見た父の背中。その頃は誰かに依頼しなければならぬくらい家計が苦しいことはなかった。一体いつから、父は娘を売らなければならなくなるようになったのだろう。

泣きたくなる感情を抑え、前を向くと、不意に思い出す単純な疑問。

「あの、エイスン、あなたは本当に私を……？」

「さあって、今回の依頼はどんな味だろうな」

シエルはむつとして唇を尖らせた。そんなのは露知らず、エイスは笑っている。

夜はまだ終わらない。エイスはシエルをつれて宿を出た。

両開きの門が勢いよく開くと、大きな馬車が姿を表した。しかし、それは間違い。

シエルは目の前の光景に目を疑い、瞬きし、瞼を幾度も擦った。彼女の行動は正しい。なぜなら、それには車輪こそついてはいたものの、エイスンの言う足の役割はいなかった。まさか、手で押すわけには。そんな冗談を認めることはできない。

つまり、正確には馬車ではなく車。これでは見せかけの鉄塊。ただの鉄塊ならまだいい。これはなんとも奇妙で、滑らかな流線型で高さの低い、弾丸を思わせる。とてもじゃないが人を運ぶことに適していない危険な外観。にも関わらず、大きなコートの裾をたなびかせる背中はおおらかな菱形の口に吸い込まれていく。すぐに中から聞き慣れない怪しい音がし、暗闇の箱に明かりが灯る。言うまでもなくその奇妙な鉄塊には従来の馬車と同じように、ちゃんと室内スペースがあり、エイスンがただその火元に点火させただけ。そんなのは誰にでもわかる。ついでに理解に時間を要するのも誰にでもわかる。

唐突にエイスンが車内から顔だけ出した。

「そんなに口開けてると骨付きチキン突っ込むぞ」

歯を見せて笑うエイスン。

まさかこの乗り物ごっこも悪戯の一環ではないでしょうね。シエルは疑心暗鬼ならぬ完全なる疑心を持って、四角に光る悪魔の口に飛び込む。ところが、悪魔とは言うものの思いのほか、車内はなかなか綺麗に整頓されていた。ベルベット調の赤い座席は、本で読むきらびやかな王国の城のソファをそのまま切り抜いたように心地よい触り心地。黒い骨組みの鉄板が溶接痕を隠して連なる内壁。そして右隣に座るエイスンが握る、謎の円形の物体。円というのは主に回転する役割を持つのだが、回転だけでは永遠に進めない。

シエルに近いほうの彼の足の横には用途不明の棒状の鉄。これもエイスンの手に握られている。形は一般的なメイスに似ているが、床から生えているのでとても武具とは思えない。

「エイスン、私はこんな悪戯に付き合わされるくらいお子様に見えますか」

「悪戯かどうかは目をよおくかつぽじって確かめるんだなミス・エローサ」

シエルは反射的に拳を彼の脇腹へ叩きつけようとしていたが、昨日の過ちは今日の教訓。日にちが変わっていない今日の内の過ちを二度繰り返すつもりはなく、動き始めたかよい筋肉は意志の力を総動員して二の舞を阻止する。それと同時に、大きな衝撃がシエルに襲いかかった。予期せぬ力の奔流。そのせいで止まりかけの力は抑止力を無くし、彼女の拳は思いつきりエイスンの脇へ直進。鈍い麻痺が華奢な腕を走り抜け、声にならない声が漏れる。

残念なことに、鉄塊が動いたのだ。理が破られるというのは理不尽なことである。物に生命が宿るなど前代未聞。誰しもそう思う。訂正、彼女はそう思っていた。そのことを知らなかったことで飛び込んできた悪いニュースは、握り拳が頬と同等に真っ赤になったことだ。もちろん、頬の赤みは痛みによるものではない。

二人の足元から不気味な轟音が鳴り響く。

「ロストテクノロジー、だそうだ」

「と、とりあえず降りていいですか」

「発掘された古代文明の遺産で、世界に十とないそうだ」

無駄な願いだった。鉄塊は初動を機に、その真価を見せた。シエルの前方に広がる、正面の窓越しの世界は急激に尾を引く星と化した。横を見ると建物も道の松明もすべてが視界の中横に広がりながら置き去りにされている。

マハヴァイルから馬車に乗ってきたからわかる。これは、馬なんかとは桁違いの加速力。おそらく、トップスピードは馬を軽く越えるのだろう。彼の握る円状物質の先のダッシュボードに計りのような基盤が内臓されていて、分度器の丁度90度を示す場所で振り子はゆらゆらしていた。シエルは昔読んだ本を思い出す。これが速度を示すものだとしたら、古代人とやらは皆神のような知能を備えているという、王立書士隊の仮説論文もあながち間違いではない。

「これは譲り受けたもんなんだが、譲渡主が言うには古代にはこれが、チキンが美味しいのに比例するように、当たり前そこらを駆け巡ってたらしい」

「それは信じられないわね」

「チキンの美味さを信じられないってのか？」

「違うわよ。そこら中で転げ回ってたってことよ。いくらなんでも仮説は仮説。そんなの、狂ってる」

「どうしてだ」

「流れ星が、毎日毎晩夜空を流れてるの想像してみてください。誰も外に出られなくなるわ」

「ロマンティストだねえ。現実ではないと言いたいわけだ」

壮大なパノラマを思わせる風景が突然、両脇を木の軍が列挙する

景色に変わる。町を出たのだ。

真夜中の森は馬車では困難な道になるのだが、エイスンの操る鉄塊は一味違った。鉄塊は、前方の小さな二つの窓から自然に発光し、夜道の行く先を照らしている。車内のランプと同じ質感の、柔らかくどこまでも届きそうな光。

彼はシエルの表情を横目で盗み見た。憂いの零れそうな瞳と唇。まあ、不安になるのは当たり前か。こんな怪しい大人だもんな。

「今の町はア ril ニアってな、まあ名前くらい知ってると思うが」
エイスンの手が円乗物質をくるくる回し始める。「このア ril ニア
つてのは、古い言語で眠らない夜って意味があるんだ」

前方の景色がスライドして流れていく。いや、この乗り物が旋回しているのか。回転物質はこの鉄塊をコントロールする魔法の輪のようだ。

「昔から賑やかな町だったんですか」

「俺が物心ついたときにはもうこんなだったから、そうなんだろう」

「そうですか……」

シエルは尻すばみな言葉締めになりながら、黙った。顔にはこの数時間で見たとのことのないような疲労が出てきている。依頼に対する不安か、それとも隣の男に体を売ったことに対する辱しめの感情か。少なくとも彼女は今、女性の幸せを蔑ろにした気分だろう。

エイスンは言う。

「俺はこう見えてチキンが嫌いだ」

この告白には万人が驚かずにいられない。思わせ振りも甚だしい

見事な虚言。味と好みは別とでもいいたいのかはわからないが、わざわざ嘘をつく必要はあったのか。

「特に調理前のあの、絶望に満ちた孤独の目を見ると胸くそ悪くなる。まあ、そうなるのもわからないでもないけどよ、死を理解して受け入れざるを得ないってのは本当に痛々しいもんだ」

エイスンの顔がシエルに向けられる。鋭く細い一重瞼に挟まれた、赤色の真珠の目が彼女を貫く。

「なんでこんな会話するかわかるか。人生幸せばっかじゃないってこと」

シエルは頷いた。言われなくともわかってるのだろう。少なくとも、父から依頼の件の内容を聞かされたときから。

本当にシエルはわかっているだろうか。世の中には思いがけない幸せがあることを。

エイスンは口ごもって、何かもどかしいように口をもごもごさせる。

「まあまあ、楽しい口デオというじゃないか。うりゃうりゃ」

うりゃうりゃの発音が尻上がりだったので、その言葉の陽気な雰囲気触発されてシエルはくすりと微笑んだ。

藁にもすがったつもりが、それはなんとも雄々しい剣だったようだ。

突然、衝撃が襲う。シエルの体は激しく前方に押し出されてしまい、寸でのところで反射の手が押し止めたが、危うくダッシュボードに頭をぶつけるところだった。ぶつけていれば、なんとも間抜け

な死に様をさらすことになっていただろう。彼女はエイスンを見る。エイスは前を見て驚いた顔をしていた。それにつられて彼女も前を見る。

見てきた景色と相変わらず、夜の森は暗い。しかし今は変わったものがある。暗緑の中で、白く光る何かがいる。それは夜の森のダークカラーによく映える碧色。外観は獣のように見える。ただし、一般的なワイバーンに匹敵するほど大きく、至るところに鋭い印象の甲殻が見受けられる。

シエルはその姿を見つめている最中、エイスを止めた存在が自分を見ていることに気づいた。その瞬間全身の肌という肌が総毛立ち、体中を寒さが突き抜ける。

「こいつは驚いたな」

「な、なんでですか？」

「とにかく切り抜けなきゃ」

エイスが魔法の輪を回すと、車体が旋回し始める。そして、車体は宿を出発したときのように、唸りをあげて急激に加速した。エイスは、本来なら移動に適していない山道を選び、前方の障害を乗り切るため、大胆にも斜め横を通り抜けようとしているのだ。先ほどまで正面にいた光る存在が、横の窓の端に移動していく。

だが、淡い光が視界から消えようとしたとき、それは猛然と突進してきた。犬のように走り、車にまで届く地響きを鳴らしながらシエルの側の車体へ距離が縮まっていく。しかし、接触することはなかった。光る存在に対し斜めに進むことで、エイスは距離の調整をした。速さはこちらのほうが上。その証拠に、今も走り来る光は横で並走するのが限界のようだ。そのせいで、シエルはかつてない地響きの振動と、真横に迫る存在に心臓を跳ねらせることになった。まさに狼！ 腕が上がるたびに見える巨大な鉤爪、背中から生え渡る黄土色のエッジ。そして浮遊する燐光の螢火。それは身体自体

が発光しているわけではなく、走行する巨体にびつたりと張り付いているために、身体が光っているように見えたのだ。シエルは窓の下部に見える上げ下げされる腕から、視線を上部に移した。またしても体が跳ねる。狼そっくりの顔がシエルを睨み、だらだらと飛び散る唾液に光る牙を見せながら上下に揺れている。今尿意を催していたなら、確実に失禁していたに違いない。

シエルの体が座席に礫にされるのと同時に、ロストテクノロジーはさらに加速する。ダッシュボード内の基盤の振り子は180度の場所で小刻みに揺れている。トップスピードだ。道の起伏も相まって激しい揺れが車内を襲う。加速する前に見えていた発光する巨体の脇が見えなくなり、今は鼻先と二つの黄土色の突起部が見える程度になっている。それも少しの間のこと、淡い光の主はゆるやかに窓の景色から消えていった。

トップスピードはいまだに継続中。後方から、車体の揺れる音に紛れて咆哮が聞こえてくる。遠吠えのような、細く残る鳴き声。あれが窓一枚向こうにいたと考えると、寒気が消えない。座席から頭だけ振り向き、後方を覗くと車体後部の窓から、遠ざかる光が見える。それ自体が一つの蛍に見えるくらいに遠い。

「運がいい。諦めてくれたみたいだ」

大きく息を吐くエイスン。ようやく速度が落ちて、車体の揺れが幾分緩和される。

「今のは？」

「俺も初見だ。依頼でもあんなのは相手したことない」

車体が一瞬強く揺れたかと思うと、それから静かな走行を取り戻す。正道に戻ったようだ。道は下りに入る。そんな中、正面窓から臨む景色の中に無数の光が映る。シエルの脳裏に浮かぶ濡れた牙。

悪寒が帰ってきた。

「そんな固まらなくても、あれは町だろ。忘れたのか？」

徐々に近づく光に照らされて浮かび上がる、か細い輪郭の群れ。紛れもなく彼女の記憶が覚えている町、マハヴァイルだ。

「そうでした……すみません」

「さて、これから仲間と会うが、そこで依頼内容を詳しく頼む」「知り合いが？」

「俺の武器を管理してる。そいつとは腐れ縁みたいなやつだ」

下り坂を抜け、平地に出る。

確かにエイسنは鎧こそ常時着用しているが、めばしい武器は見当たらなかった。これではいくら牙を防ぐことができようが、反撃の爪を突き立てることはできない。先ほどの狼に似たモンスターとの邂逅で、真っ先に逃走を選択したのもそれが一因しているかもしれない。しかし、もし武器があつたとしてエイسنは太刀打ちできたかどうかは定かではない。エイسنもあの遭遇は余地しきれなかった、そう言っていた。無知は罪だが、未知は死に繋がる可能性がある。それも踏まえれば、脱却の意思は正しい。

シエルは町の小さな明かりにあの恐怖の光を連想し、首を横に振る。他に気にすべき問題は山積みだ。願わくは、あのような未知がエイسنに降りかからんことを。彼女は隣の男の澄ました横顔を見て、そう思った。

2・ロマンチックはバカだとか。

暗く静まった町。アリルニアでは酒豪達がまだこれから何軒もの屋台をはしごする時間帯。町民が寝静まっている今、マハ・ヴァイルの道に点在するランプだけが、寝ずに夜通しその役割を全うしている。

その光に照らされて浮かび上がる道は、山の上とは思えない見事なレンガ造り造りで、歩き心地のいいもの。シエルにとっては代わり映えしない風景、エイスンにとっては懐かしい場所。

二人を迎えるのは、道に沿って横続きに建つ家々。建てられた当時はまだそれほど技術が進んでいなかったのだらう。どれも壁の耐久構造に少しばかり欠点の見られる旧式の造り。

道を形成するのも家を構築するのも、材質は同じ。素材はまあまあ良質に見られる。シエルは本で読んだ知識を元に、これらは皆どろどろの状態から形成されていると、幼い頃知った。母から聞いた話では、一人の亡国騎士が拓けた台地を開発したのだという。そうだとすれば、この旧式も当時は新型。その騎士は亡き国の面影を求めながら、最新鋭の製法で最高の町を作ったと思っただにちがいない。それは正しい。その話の時代、数百年前には製鉄の技法は、少なくとも本の内容が正しければ何も発達していなかったのだから。

とにかく、旧式だらうがすごいことには変わらない。

規則正しく並んだ家の中の一つ、三角の屋根の普通住居とは一線を画す真四角の建物を前にしたとき、エイスは立ち止まる。シエルもよく目にする場所。そこはマハヴァイルの誇る刀鍛冶の工場。昼間にはそこから鳴り響く金属音も、深夜の今には成を潜めてひっ

そりしている。

シャッターの降りた搬入口の横の小さな扉。室内の無人を示した暗い窓に一抹の不安を覚えるも、黒金色に染まるドアをエイスンが叩く。

真夜中の訪問に家主が対応するかどうかは決まっている。いくら知り合いだとしてもそれは覆らないと、シエルは鷹をくくっている。しかし、無人かと思われた室内も、来客を待たせることなく明かりが灯る。窓から漏れ出す光が二人を照らし、かすかな足音が近づく。酒場にいるような男の知り合いとは、ふらふらした足取りの酒臭い中年男と相場は決まっているが、控えめに引き戸を開いて出てきたのは、赤いドレス姿の女性だった。赤褐色の長い髪が目をはくほど美しく、男を虜にする豊潤なしなやかさをもった歩み寄り。そのたびに、深く空いたドレスの胸元から覗く大きな胸が微かに揺れる。決まっている相場とやらを騒然とさせる美女。

まどろみかけて閉じられそうな黄金の瞳のまま美女が口を開く。

「あら、エイスン。早かったのね」

エイスンはその言葉に少し体を硬直させた後に、間を置いて言う。

「まあな」

シエルはそのとき、言い様のない痛みを感じていた。この場に身体を傷つけるものはない。内に秘めるものが悲痛な叫びを訴えたのだ。

原因は、おそらく宿の件。人生のバディを持つ男と情事を敢行したという意識が、彼女の純真な貞操概念を八つ裂きにしていた。もちろん、女体を餌にする依頼や父の非情な契約も忘れてはならない。しかし、それ以上に彼女を苦しめるのはエイスンに対しての悪気よりも、相手の恋愛事情に対する罪悪感。秘密を守れば住む話では

ない。これは同席の場の雰囲気に関わる問題だ。

「あんまり乗り気じゃないみたいね」

「依頼人の前だ。誤解を招く発言はよせ」

エイスンにそう言われた美女はシエルを見て、申し訳なさそうに手を合わせる。

「グレース。お前のせいだぞ」

エイスンがそう言うのは、シエルは無意識に眉尻を下げ、いかにもつらい境遇に生まれた者の表情を浮かべていたからだ。

赤褐色の髪の美女、グレースは慌てた様子でシエルの肩を掴む。

その目は泳いでいる。年齢はいくつだろうか、どこか少女のような未熟な慌て方にシエルは言葉をなくす。

「ご、ごめんね。そんなつもりはなかったのよ、ただエイスンって喋る前に考えたりする人じゃないから」

「いいからその鶏みたいな癪癪をやめろ。焼き鳥にするぞ」

「あう……」

いい歳して、私より子供みたい。シエルはようやく、絶望に似た表情から笑みを浮かべる。

彼女がそうやって一人くると感情を変化させる中、エイスンは空いたままの引き戸を通って工房へ入る。つられる形で後に続く家主とシエル。

内部はすつきりとしていた。休憩所を改装した居住空間だろうか。それにしても、刀鍛冶のための生活空間にしては十分な清潔感。グレースは毎日、汗臭い乱雑な部屋を掃除したりエイスンにこき使われていたりするのだろうか。先のやり取りからして、大いに考えう

る処遇。

「ほら、きれいにしといたわよ」

玄関から直結したリビングの奥で、断りなく椅子に座ったエイスンに向かって、そう言ったグレースが持ってきたのはステーキプレートほどの小さな箱。

シエルは、てっきり人の背丈を越える禍々しい鈍器が出るものだと思っていた。エイスンの黄金の鎧と、短い間ながら彼の人間性に接したために想像した、暴君の鉄槌を。まさに、予想外。

それゆえ、余りに小さなその出現に目を丸くする以外の術を持たない。

グレースがエイスンに箱を渡し、彼が開けて取り出したのはきりと光を跳ね返す包丁。それも、二丁だ。白みの混ざった紺色の刃は、濡れたようになめらかな刃紋が美しい。

「よし。相変わらずいい仕事だ、ありがとう」

「どういたしまして」

シエルは目を丸くして、ぼろい黒コートの長身を見た。

やけに口調が違う。それだけで、百八十度も抱く印象が変化した。この数時間で人格が入れ替わったような錯覚すら起きる。

その彼女の様子を間違えて捉えたエイスンが鼻を高々に口からマシガンを放つ。

「これは、とある辺境にいる、青色の鎌蟹つてやつの素材を使ってる。そいつの大剣みたいな鎌を使って作らせたのがこれなんだがな、これがまた、有り余る良材を凝縮した逸品！　そもそも」

シエルはその勘違いの開始から十秒程度で悟る。軌道に乗った男のロマンを。シエルが長丁場を回避すべくグレースに目を向け意識を逸らす中、かの演説王は得意気に話し、包丁を掲げて仰ぎ見る。

演説を強要される金髪の聞き手は、一瞬とは言え自分より年下だと誤解する幼さを持つ美しい彼女が　演説の言葉を借りれば

あたかも、良材を凝縮した逸品を作ったかのような発言を彼が発したことに戸惑っていた。

なによりもグレースに意識を向けざるを得なかったのはそのためである。

女性らしい体軀は確かにしなやかではある。だが、イコール強靱というわけではない。大きな胸は筋肉ではなさそうに見え、ドレスの合間から覗く長い足も、艶かしい色気しか持ち合わせていない。

ようするに、至極簡易で突発的な、一種の再確認のようなものだ。グレースがシエルを見返し、微笑みを浮かべる。

「彼が私に包丁を作らせるのは、もう数えきれないわ。素材を取るために包丁を使って、壊しちゃう。新たに得た素材で作り、また素材の調達へ。その繰り返しだから、一回でも不良品を作ればそのぶん迷惑かけることになるし、本当気が減入るわよ」

その言葉に再確認は無駄となり、それは、シエルの知識に華奢な女刀鍛冶という異例が刷り込まれた瞬間だった。

グレースの、文句という名の刃を突き付けられたエイソンは演説を中断する。眉を上げて口を引き結ぶ演説王。エイソンは使い手にしかわからない感覚云々を吐き散らすこともできたが、最高のコンディションに仕上げてくれる職人に違う価値観を押し付けることを良しと思わず、喉元で止めた。

そこで内に秘める男の性、演説王を退陣させたエイソンは二丁の

包丁を素早くコートの内側に隠した。あたかもガンマン。彼は、次にそれを出すときは、西部劇のデュエルのように取り出すつもりなのだろうか。

そんな下らないことを考える空色の瞳に、赤い視線がぶつかる。

「さて、お待ちかねの依頼内容の説明だ」

「はい。まず、ドラゴンエッグですけど、これを取引するのはただの商売ではありません。ドグマ王からの直々の命令で、言わば特務として早急に扱うことになります。それで、取引先はトリリアリースの商会で、彼らが所有してる“轟竜の卵”を父が買い取っています。これは通常通りの高額ですが、後に上流階級から莫大な報酬が入るということで、半分後払いにしてなんとか交渉成立してます」

聞き手に回った刹那的演説王は驚く　　なんだか酒場で聞いたのと変わって、やけに壮大になった商売だな。

「それから、卵と私がドグマ王の相談役へ引き渡され、報酬金が貰えます。ちなみに、もしもこの条件を飲まなければ相応の代価を払うことになる、と言われたそうです。これが、父から聞かされた条件です」

エイスの座るソファの横に立つグレースの体が揺れる。エイスンも、少女の二度目の自己犠牲の告白に憤りを覚える。

エイスは今、詳しい依頼内容を聞いて初めて、酒場で声をかけてきたこの少女は、本当に緊迫した状況に置かれていることを悟った。

「しかし、ここが故郷なら、人身売買に手を染めなくとも大丈夫なはずだが」短い間の後、思い出したように。「それに、タールドグマの方なら幾分融通が利くはずだ」

リエムドグマ。別名狂犬の都市。ア ril ニアから東のマハヴァイ
ル方面とは真逆の方、西へ山を下ると確認できる大都市。そこを治
める狂犬の縄張りでは、縄張り外との交渉は禁じられている。しか
し、忠実なる下僕には長の加護が。

一方、その性質も位置的にも対象的なのがタールドグマ。山を挟
むようにして存在する、この姉妹都市の別名は獵犬の都市。優秀な
獵犬は様々な飼い主へ渡り、実績を上げる。狂犬の縄張りでは許さ
れない外界への侵出が、幾分緩和されて許されている。

ただし、忠実で優秀な獵犬に限るのを忘れてはならない。

「この狭いドグマ領で、食材商ならなおさら優遇されるはずだ」

自分で言つて、過去にこのような依頼が来たことがないことを思
い出す。

確かに優遇されているのだ、食材商に限らず、商人は。そう、縄
張りの狭い犬にとって食料は大事なはず。

「たしかに私の生まれはここです。でも、父は今こそドグマ領の商
人ですが、生まれ故郷はトリリアリス……。商会を二つ持つて
るんです」

なるほどと頷く女刀鍛冶と通称肉切り。

「商人は結託する。だが ドグマとトリリアリスはお世辞にも
友好とは言えない。むしろ、犬猿の仲。どうやって入国検査を抜け
たかは知らんが、今まで隠してたんだな」

この機に友好を図ればいいのに、領主は一商人にわかりきってい
る掟を、わざわざ見せつけている。

提携関係を結ぶ都市は、無能でない限り多に越したことはないのに、なぜそのパイプを切り捨てることを構わない体でいるのか。もし条件を飲まなければそれこそ、本当に犬猿は噛み付き合いに発展する。

状況を整理する中、さらに不可解なのは、言わば人質を取られたトリリアリース側が、可も不可もない条件のみで取引に応じていることだ。

これはただの鶏ではない。ドグマ王にとってどのような利益があるかはわからないが、狂犬は金の卵を産む鶏だと睨んだようだった。

グレースは何も言わない。ソファアのひじ掛けに腰を下ろし、うとうとし始めている。

「知ってるか？ 人身売買に回された女ってのは、固定のクライアントにだけじゃなく、いろんなところに渡っていくんだ」

「知ってます」

「依頼主よ、お前はそれでいいのか」

「そうなる運命なら」

ヒュウと口笛を鳴らすエイスン。これは失敬。そういえばロマンティストだったな。どこまでバカなんだ。

「父の商隊と合流してボレア地方に向かう路を、あなたに護衛してほしい。そこまでで、依頼は完了になります」

彼女は気づいているだろうか。運命とか知ってるとか言い出したときから、その顔に苦痛が張り付いていることを。

「明日……正確には今日ですが、正午15時に別の件を済ませた父

が帰ってきます。なので、それまでに私の家に行かなければなりません」

気丈とした、いつもと変わらない声。そこでエイソンは手を上げて説明を止める。

もうわかったと、ひらひらと草原の蝶のように舞う手のひら。

「ん。わかった。その時間までには起こすから、少し寝ろ。疲れてるだろ」

顎をこつくりと、夢の中にいるグレースの肩を叩いて、エイソンは彼女に目配せし「いい夢の続きに案内しろ」と耳打ちする。

一度伸びをしたグレースは部屋の隅まで緩慢とした歩みで行き、別室に繋がる、磨りガラスの窓が付いたドアを開きベッドのある個室へシエルを誘導する。

ベッドサイドのランプがエキゾチックな夜を醸す、キングサイズのダブルベッドが別室の奥からお目見え。一体何を想像したのか、瞬間的に顔を赤くしたシエルは遠慮がちに手を胸の前で振り、口を開きかけたが、グレースは人差し指で牽制する。

無言で微笑む女刀鍛冶。黄金の双眸は優しさと純心を讃えている。ここで遠慮しても、新たな気遣いを生むだけ。時には遠慮せずに受け入れることも、立派な気遣い。そう判断したシエルは小さく会釈し、今なお男女の入室を待ちわびる個室に入って、ドアを閉めた。直後、ドアの上部で煌めく磨りガラスの窓が輝きを失う。

やはり。エイソンは、眠らせて正解だったと一安心する。

酒場で飲ませたチエイサーに混入させたネムリ草なんかでは、到底ではないが本来の眠りと同じ安息を得ることはできない（自分の意思で眠っている自覚がある場合を除く）。

彼は、マスターの究極とも言える順応さに感謝していた。体売るなどという無謀な娘には、記憶の欠如と言葉が有効ということを

考え付いたのは即席ではないのだろう。ア ril ニアはドグマ領の中で、唯一路上生活者がはびこる町だ。今でこそその数は減ったが、当てもなく酒場へ足を運ぶごろつきがいる現状は変わらない。

ア ril ニア最大の酒場の主人は数々の苦悩と混乱に対し、酒とともに希望を提供してきたに違いない。彼の人柄と知識の言葉は、ごろつきの減少に貢献していた。

彼女がエイسنを訪ねたとき、躊躇いなく正確に、肉切りエイسنその人を当てた。酒場を拠点とした何でも屋の噂がなければできない芸当。

エイسن自身自覚しているかはわからないが、マスターの力を頼りにしているからこそ、常に酒場で依頼を承るという情報が流れる。つまり、マスターあってこそその肉切りエイسنなのかもしれない。それゆえ、エイسنは悩んでいた。どんなに臨機応変であつたとしても、一時しのぎには変わらない。

根源にある物品と人体の交換を、なんとしてでも避けなければならなかった。自分を売るために依頼してきたのなら、護衛を完遂させなければならぬのはわかっていているつもりだった。今のエイسنは、依頼をやり遂げるためにどうやって交換を阻止しようかと、矛盾した考えが頭の中で渦巻いているだけ。

同時に、気の利かないドグマ王への憤りが募る。

行き先のない感情をため息に乗せ、ソファアの背もたれに体を預ける。黒コートの下で日の目を見ない鎧がきしりと音を立てる。

「お世話だとはわかってるんだがなあ。どうにも、女の子ってのは慎ましくないといけない気がするんだが」

「あら、それが当たり前なのよ」

ソファアの縁から、いつの間にかエイسنの隣に移動したグレイスの声には、寝起きの気だるさは感じ取れない。

一人毒づくエイスン　初めから寝たフリとは、洒落込んだチキンだな。

「だよな……自分から幸せを捨てるなんざ、絶対認めない」

自分で言っておいて、不幸の肯定を思い出す。

もしかしたら、シエルは勘違いしているのかもしれない。あの狼型のモンスターから逃走した際、エイスンが言った言葉を。

時に言葉は付け足しが足りなければ、思わぬ座礁を生む。しかし、世の中幸せばかりではなくとも、希望を捨てていいとは言っていない。

言っていないからこそ勘違いしてしまったのかも知れないが、これは思い知らせてやる必要があると思う。

3・優秀な護衛は真っ先に逃げるとか。

マハヴァイルの日中の様子はどこかスタイリッシュな、統率の取れた軍を思わせる。

ア ril ニアが喧騒の町なら、マハヴァイルは静寂の町といったところ。

チェスボードを意匠に取り込んだ町で、人々は静かに己の目的に歩いている。が、会話を交すものも当然いる。昼を少し過ぎた時間帯、ちよつとしたティーブレイクに洒落込み、その道中、有益で実の詰まっているに違いない会話を交す若者の姿はスマートにさえ見える。

エイスンも、ティーブレイクを除けばその内の一人に数えられる。彼がシエルの父を見るのは初めてではない。ドグマ商会の商人は誰もが必ず一つ取引を持っている。山を挟む二つの大都市は、その挟んだ地域だけが領土という、とても小さな国。

さらに追い討ちを掛けるように、ほぼ鎖国状態。唯一物品が流通するタールドグマから商品を仕入れ、狭い中でやりくりする。ア ril ニアで肉切りエイスンとして業を構えるエイスンに、情報はもちろん貴重な物品を持つてくる商人に知らない顔はなかった。

昨夜は明るくレンガ通りを照らしていた松明は輝きを失い、今はその道に別の輝きがある。

大通りの真ん中に鎮座した馬車は荷台が非常に大きな、一目見て配達用だとわかるもの。幾度も幾つもの国を渡り歩いたであろうそ

れは、取引先にまた商談を持ちかける気にさせる見事な金細工が施されている。度重なる襲撃を耐えた傷も少々見られるが、それもまた良いアクセントに思える馬車の一等品と呼ぶべき姿。

それを囲うように、守るように立つのは白濁色のゆったりしたローブを着た商人達。頭もターバンを巻いているため、揃いも揃って皆同じ外見の男数十名の小隊は奇妙だ。その中には薙刀を持つ武装商人さえいる。これが全員ではないとはわかるが、あまり商人の世界を知らないエイスンにさえ少ないと思わせる、数より質な小隊。できればそうであってほしいとさえ願ってしまう。

エイスンが見たいのは無駄に豪華な馬車でもなく薙刀なんかでもなく、娘を商品と勘違いしてしまったチキン。それも、労せず見つけることができた。成人男性の身長基準値を満たしているか少し越えた男達の中、シエルと同じか小さいくらいの男がいるが、その拳動不審な視線がシエルを捉えていた。のんびりと馬車に近づくと、一見不釣り合いな組み合わせのエイスン達に駆け寄ってきた。的確にシエルを向いていることが、何よりの証。

この小男が人身売買に手を染めてしまった人物か。シエルに話しかける姿を頭上から見下ろすエイスン。小柄ふくよかな体つきは、他の商人と差別化を図ったような（ポケットをたくさん縫い付けた機能的なデザイン）ローブの上から見てもわかる。

家族の挨拶と短い会話の後、小男の興味が早速エイスンに移った。

「おお、あなたが、娘が連れてきた護衛ですな？ わたしはこの子の父のヨハネス・エポーサと言う者です」

その表情からはお人好しな、なんとなしに気弱な小動物の雰囲気が出していた。シエルと同じ金髪だが、このドグマ近辺では色素が薄い髪色は遺伝的に普通とされているため、別段気にもかからない。だが、容姿に加えて薄い頭髪は見るものに惨めな印象を抱かせるのだろう。

「いかにも。肉切りつて便利屋をやつてる」

「ぜひ、今回はよろしくお願いしますぞ！ なにせ一世一代の大契約でございますから！」

「そりゃあ娘が一人なら捨てるのもこれつきりだろうが」

「エイスン！」

憤りを裸のまま小男にぶつけるエイスンに対し、シエルは大きな目をきつく細めて自らの父を庇う。明らかな痛みを訴える表情に変わった父を横目で確認し、唇を引き結び、酒場から今この時まで見せなかった強い表情を見せた。

想像していたどうしようもないくそ野郎ではなく、少なくとも表面上は娘のことで心を痛めていることに、エイスは驚いていた。

これは確かに蹂躪される側の人間だと、エイスは思う。人生を正しいとされるルートで進み、穏便な処理で成績を上げ、汚い闇に触れない側の人間。間違つても、今意識を向けている世界に足を踏み入れてはならない人間だ。

クライアントの身辺を直に見ることで、なおさら不可解になる今回の件。立派な馬車まで与えた者を、言わば脅迫までしているドグマの王の意図が見えない。娘を差し出すことを本当に拒絶していたら、どうするつもりだったのか。

替わりはいくらでもいる、か。それとも他の商人に依頼したか。だが、後者の可能性は消える。国に背いたという条件があるからこそ、シエルの父は拒絶できない。そしてシエルという極上の餌。

さすが商人というべきか。私情が滲み出た会話からすぐさま切り替わり、会話する前の頼りない表情に戻る。

「それにしても、君一人だけかい？ 今から通るのは凶暴な角竜や

砂獅子の縄張りだが」

「お父様。彼は依頼を絶対に成功させる一流の便利屋だとお聞きしています」

誰がそんな過度な期待を混ぜたんだ。グレースか。

もはやスマートな話ではない。彼が受けた依頼の中には男女の痴情のもつれを解消してほしいという依頼もあったが、それに勝るほどスマートではない。

「期待には応えますよ」

そう言ったエイズンを、薙刀を持った商人が見ていた。さも氣にくわないと言った顔。

時間が来たようだ。商人達が馬車に乗り込み、荷室に入る間も武装商人はエイズンを睨み付けていた。

その商人の視線に、エイズンは覚えがあつた。その覚えがどこから来るのか思い出せず、何が思い付くかもわからないヨハネスの後ろ姿を眺めることしかできない。

彼は便利屋を始めてから、依頼人の望む物を与えてきた。厄介事にしろなんでもない事にしろ、目に見える物もあれば、目に見えないモノも提示してきた。その中で、新たな問題を生み出すことがなかったとは思わない。むしろ、得るものがあれば失うものがあるようにプラスを与えればマイナスが返ってくることもある。

結局、ただの他人の空想と見られているとしか考えなかった。

シエルも含み、今回の商談に携わる者が乗った馬車は、マハヴァイルを発ち、山の斜面を下ってタールドグマに向かつていた。

国を出るとき、ドグマ領の民は必ずタールドグマの門から出なければならぬ。入国の際も同様。常に束縛された環境。

もしもそれ以外から出入りするようなら、山の高所から信号弾が

発射され、警告される。

ア ril ニア やマハヴァイルを懐に納めるこの山はライツ山と言い、一般的には野山と呼ばれる狩り場でもある。山に出現するモンスターは大抵ドグマ領のハンターが出動し、狩る。緑の多い実り豊かな山は招かれざる空からの客も招く。その際はギルドと連携し、緊急の際には特別に検問を除外する。しかし、ライツ山のハンターは強者だらけで滅多にハンターズギルドの力を借りることはない。

数少ないが、エイスンも行ったことがあるライツ山高所の村。信号弾を発射するその村はドグマ領内で、タールドグマと並んで規制が緩い。ドグマ国家が発足される際、村は最後まで抵抗し続けたという。そういう、強い村だった。

常に商隊が通るタールドグマへの下り道は比較的安全だった。大きく切り開いた道路には、希に餓えたモンスターが道の真ん中に立ち往生していることもあるが、そこに現れるのは本当に脆弱なそれ。整備されて自然の少なくなった地帯から、多く自然が残る高所に住処を移すからだ。

大きな荷室とさえど、保管してある商品や商人達が詰め込まれれば暑苦しいサウナも同然。大きな窓はすでにタールドグマの賑わった町並みを臨んでいる。

エイスンは昨夜グレースと交わした会話を思い出す。夜通し会話に付き合わせたのは刀鍛冶にとつて決して好ましくなかった。それでも、グレースからエイスンに話を持ちかけた。

シエルに肉切りエイスンの存在を教えたのは私だと、そう言ったそれを聞き、彼は驚いた。シエルにそれと言った反応が見られなかったからだ。

彼女が言うに、シエルとその父、及びトリリアリースの商人との商談の場にいたという。商談のあったパーティーはタールドグマの

舞踏館で、二日前。彼女はエイスンを出迎えたときと同じドレスを着てワインを立ち飲みしてただけで、別に盗み聞きしようとは思っていないかった。

しかし、絢爛なパーティー会場に相対的な人身売買の話がちらと彼女の耳に入ったとき、女性として見過ごせなかった。便利屋を教えたところで、当人に何とかしたいと言う強い思いがなければ踏み出すことはない。それを確かめるために、取り巻きが他の商談に気を取られてシエルが一人になったとき、あえて耳打ちするように道標を示した。“肉切りエイスはあなたの味方になるわ”と。世の中には、思いがけない幸せがまだあると。

仕事があるから。シエルがまだ目覚めていない朝、そう言いながらグレースが工房のシャッターを開けたとき、彼女は嘆願した。

ああは言ってるけど、運命を信じるなら不確かな情報にすがりついたりしないわ。覚えておいて。あの子は助けを求めている。あなたはわかっていてるでしょうけど、それは一度踏み外せば抜け出せないの。だから、お願い。

エイスは包丁が納められている腰を見る。過剰に大きな黒いコートはそこにあるはずのものを隠してただ黒い。

やれやれ。チキンを捌くのは得意だが、食われそうなチキンを救えつてのは、どうも苦手だ。

「今回の、大丈夫かな」

商人の一人が不安をそのまま声色に反映させて言った。今回の、ということは今まではもつとリスクの低い取引しかしてこなかったのだろう。金の上塗りの馬車の割には貧しいというのも納得できるばやき。

「なんでわざわざトリリアリースの野郎と……」

そう言ったのは別の商人。忌々しげに齒茎を見せ、隣の商人に同意を求めている。口は災いの元と言うが、彼は上司の身の上を知らないらしい。エイスンに痛いところを突かれて狼狽えていたヨハネスの表情は、驚くことに今は平静そのもの。

エイスンには、解せないことがあった。今も黙って顔を伏せる依頼主は、うちは貧しいと言った。金銭感覚が麻痺していない限り、金で塗り固められた馬車を持ってしてそのようなことは言えない。何かが食い違っている。少なくとも、グレースの話と酒場の話は違う。ヨハネスが本当に商會を二つ持っていて、ドグマとトリリアリスの商人を統括しているなら、今回の契約は意味をなさないはず。自分の持つ商品を自分で買おうとしている。こんなおかしい話はない。

確か、シエルはこれからも卵を定期的に買い取り、シエルと言うメインディッシュと共に渡すと言っていたな。

それが、一世一代の大契約。これが失敗すればもう後が無いのか、あたかもこれが最後の取引と言わんばかり。

彼女のいないところで何か状況が変わったのかもしれない。グレイス曰く、商談のあったパーティーでシエルが一人になる場面があったことを考慮すれば、考えうることだ。

突然、エイスンの腰が浮いた。あまりにも唐突で自然な出来事だったため自分の体に羽が生えたと錯覚するほど。それは彼だけではなく、積み荷も商人達も同様だった。皆一様にふわりと舞い、また定位置に腰を落ち着ける。空気がざわめく。

エイスンを思考の海から引き上げたその船の正体は、どうやら外で何かが起きたせいらしい。先程までタールドグマの町並みを映していた窓の景色はすっかり大自然の様相に変わっている。広々とし

た草原と所々に生える岩。地平線にはすでに小石と化したライツ山がぼつり。その麓にあるはずのタールドグマは、細い灰色の線のようには見えぬ。

そして、荷室にいてもよく通る馬の鳴き声と御者の叫び。種族の違つどちらにも共通するのは焦燥感たつぷりだったこと。

真つ先に動いたのはエイソンを睨み付けていた武装商人。羽織るようにして身をくるんでいたローブを脱ぎ捨て、頭を除き全身を覆う金属質の鎧を露にし、荷室から飛び出す。撃退に取りかかれる商人は彼一人のようだ。続くように、コートを脱ぎ草原に降り立つエイソンが見たのは、馬車を囲う小竜の一団。ピンクを基調にした皮に茶や白などアースカラーの紋様の鱗に包まれた、小さな肉食竜。小さな襟巻きが犬の耳に見える、鳥竜種ジャギイ。

エイソンは、広い生息域を持つジャギイがライツ山の近隣に広がるここドグマ平原にも縄張りを持っていることを知っている。

少し考えれば当然でもある。自然色ではない金一色の馬車は、否が応にも目立たざるを得ない。馬車の傷も、遠方に出向くことのないドグマ商会を考えれば、この辺りで毎回ジャギイに襲われるのは定番なのだろう。ならば、今回も今までと同じように切り抜かれるはず。

武装商人が薙刀を振るう。大きく反つた青龍刀のごとき分厚い刃が、彼の一番近くのジャギイの首をはねる。振るつた勢いを殺すことなく力の方向に薙刀を任せれば、その斜め手前にいたジャギイに刃の付け根の棍がぶち当たる。キャインと悲鳴が漏れ、太い棍はジャギイの細長い体をくの字にねじ曲げて叩き伏せる。そのまま一回転する間に、走り寄る一匹をも弾き飛ばす。

やはり、慣れている。武装商人にとっては当たり前のことではあるが、エイソンは商人の非戦闘員というイメージを力強く塗り替えた彼に感心しつつ、弾き飛ばされ起き上がるうとしてもがくジャギイの脳天に包丁を突き立てた。

平原の背の低い草を掻き分けて新たな波が馬車へと一直線に向かってくる。同時に、馬のいななきとそれに紛れる御者の悲鳴。

エイسنは馬車が止まった時点で真つ先にそちらを確認すべきだったと後悔する。武装商人もいるが、万が一でも荷室は易々と牙に引き裂かれることはあるまいと信じ、無駄に大きな荷台を回り込む。草原に切り開かれた畦道で立ち往生する馬車に立ち塞がるように、数匹のジャギイが鳴き喚いていた。よく鍛えられた軍馬二頭は激しく頭や前肢をばたつかせ意味もなく抵抗している。暴れる馬を見て慌てる御者台の商人は、ジャギイに怯えているのか馬の暴れように困っているのか、おそらく両方と言える状態。

逆手持ちで二丁包丁を構え、ジャギイの集団へ自分の存在を認識させるのと助走とを兼ね、エイسنは跳ねる。ギャアギャア喚いて歓喜するようにステップする一匹の横から青いキチン質の鋭い包丁を突き刺し、宙で踏みつけながら下敷きにして着地のクツションにする。馬車と同じ色の鎧は目を引くのに十分すぎるくらいで、鈍い音と一緒に突然倒される仲間を見て、視線を一点に集中させたピンクの蠢きは標的をエイسنに変えた。彼らは一斉に首をもたげて敵意を斉唱するが、エイسنはあや待たず即死したジャギイから得物を引き抜き、後方へのボディーブローと言った具合に左右の二匹の頭を切り裂く。同時に右足に力を込めて体を捻り、飛びかかろうとして宙にいたジャギイの腹を抉り飛ばす。

続いて正面からの突進を、尖った意匠の脚甲の爪先で頭を蹴り上げて止める。さらにもう一蹴りで草原へ倒す。

二つの腕と脚では足りず、一匹が黄金の二の腕に噛みついた。が、魔性の月を思わせる鎧には文字通り歯が立たないようだった。

彼は仕留め損ねたなど言わんばかりに肩越しにほくそ笑み、肘を顔面にぶつけて怯ませ、包丁を突き落とす。事実、首は無防備だったのだ。野生に生きる上で首を狙うのは習慣になっていないのだからか。

さらに空いている方の腕で、憤慨して壁に拳を叩きつけるように

して真横にいたジャギイの口内に包丁を食らわせる。包丁を抜けば、潰れた声と血を吐き崩れ落ちる。

頭を蹴りあげられて痙攣している最後の一匹を、二丁揃えて剥き出しの目玉に突き刺した。ここで、彼はようやく顔に血が飛び散ったのがわかった。実際にはそれ以前にいくつも付着していたが、言わば鬼神と化したエイスンがいちいち噴血にかまう余裕はなかったのは当然。

今や、眩い黄金は深紅のペンキで塗りたくった壁画のようになっている。青き鎌蟹の包丁も、皮下の血管の不気味な紫色へと変貌していた。

終始を間近で見ていた御者は馬と同じくすでに落ち着きを取り戻している。どこまで馬と一心同体なんだと、どうでもいいことをエイスンは思う。

「た、助かりました……ありがとうございます」

「また何かあったら馬みたいに叫んでくれ」

エイスンのジョークに御者は苦笑いして肩をすくめる。彼のユーモアは御者にはいまいち悪く受け取られたようだ。

取り急ぎ、気になる荷室の方へ行けば、武装商人はジャギイの死体をナイフでいじくり、使える素材を剥いでいる最中。十数匹の死体が彼の周りに散乱していたが、どれも頭を切り裂かれて身体には打撲程度の傷のみを残し、素材としてのコンディション抜群に死んでいる。

二人が飛び降りたときと変わらず開け放たれた　よくよく考えればとても危険だが　搬入口から、数名の商人がジャギイにうづくまる彼の姿を見ていた。まるで狩りと言うものを初めて見た、恐怖と軽蔑の念が渦巻いた顔。シエルとヨハネスの姿はない。

血を見れば卒倒するかもしれない存在を憂慮して　それが誰かなのは言わずもがな、荷室の大口に置いておいたコートを取り、血

まみれの黄金を覆い隠しながら武装商人に近づく。

「あんた、ハンターだな？」

剥ぎ取る手を止め、今度は睨み付けずにエイスンを見る。ただし、いくらか邪念が隠った悪意の双眸。

「だったらどうした。関係あるまい」

渋味の強い声。数ある記憶でも、彼がよく覚えていた気の利かない狂犬の下僕の声。エイスはようやく思い出す。

「なるほど……まさかイヌゴヤのハンターが紛れているとは」

「俺はただ今回の護衛に選ばただけだ。誰も最初から商人とは言っていない」

「こりゃ失敬。いやあ、俺だってあんたに睨まれるいわれはないつてもんさ」

武装商人の元々の眼差しにさらに激しい憎しみが灯る。何気ない冗談のはずだが、過剰なまでの激情は精神不安定者を彷彿とさせる。エイスの切れ長の目がさらに細められる。

「まあ……こんな無意味なやり取りしてる場合じゃないし。早く依頼人のところに戻るか。それぞれのね」

「ちっ」

さて、ようやくモヤモヤが取れた。

こいつは恐らく 商人を憎んでる。

そして、確実に、尚且つ意図的に引き起こされる陰謀がある。

ドグマ平原を抜けたのはそのすぐ後だった。

平原は薄い森林地帯へと差し掛かり、取引先のボレア領はその短い森を抜けた先にある。

こちら、人身売買くそつたれズはー、間もなくボレア領へ入ります　　と言つても、林を抜ければ暖かな町村が出迎えてくれる訳ではない。ボーダーラインを越えるだけであり、まだまだこれから長い道程が待っているのだ。

ドグマ領を出たことのない人間からしてみれば、なんとも信じがたい光景がそこにある。

商人達は、一度はボレアへ足を運んでいるようで特に驚きもしなかったが、シエルは違った。思わず声を失った彼女が言いたいことは　『本の中に来たみたい』で決まり。

かさかさと壁に砂粒がぶつかる音が、エイスンの耳元で鳴り始める。

枯れ木がまばらに散らばる、見渡す限り乾いた砂色、地平線も何もかも岩と荒野が埋め尽くす大砂漠　ボレア砂漠。決してロマンチックな風景ではない。それは百人に問えば九十は　この際残り十人は個性的な芸術家だでしょう　くそつたれと声を揃える。もっとも、エイスはシエルと酒場で会話したときロマンチックな唇から飛び出したくそつたれを聞いているが。

当然、ただの砂漠ではない。そもそも乾燥地帯に適應していない馬では柔らかな砂を蹄にとらえることはできない。

にも関わらず平然と、全くスピードを落とさずに済むのは、そこが荒野だから。荒れた野。言葉通り、かつては林と繋がった立派な大樹海だったに違いないが、今は地割れと亀裂が走る固い大地が広がるのみ。つまり、正確にはボレア砂漠という名称は正しくない。

いう訳だ。

トリリアリースは、さらに砂漠　わかつてはいるが、もはや定着してるのだから仕方ないのだ　を越えた先にある大樹海に隠されている。だが、今回行く必要はない。

御者の繰る猛々しき馬が目指すのはボレア砂漠の巨岩群の内の一つ、連なる岩山の頂きに設置された、ハンターもよく知る狩猟作戦開始位置　ベースキャンプ。

ベースキャンプという飾り文句こそあるものの、シエルは初めて狩り場へと足を踏み入れることになる。無縁だと思っていたかもしれない。

いいんだぞ。旅は道連れ、危険な仕事に付き合わせた父を憎んでも。

それがシエルにはできないことを、エイسنはこの短時間で知っていた。女の鏡であると。

今や、荷室内は極めてよろしくない空気だった。びゅおおと女性の悲鳴じみた風切りが荷室の隙間から入り込んでいるのも一因だが

毒素の雰囲気の発生源は、ハンターもとい武装商人のせいだ。ジャギイの群れに襲われてから林を抜ける間中ずっと、しつこく、蛇のようにエイسنを睨んでいる。商人にとって他人に対する悪意でも、同じ空間にあるのでは話が違ってくるのだ。

蛇に睨まれた蛙になる訳にはいかない。エイسنはいまだに砂色を映す窓を眺めるシエルをちらと盗み見、武装商人へと真っ向から視線をぶつける。

肉切りエイسنとして幾度の依頼を成し遂げた経験　名を付けるとしたら記憶を蓄積するもう一人の自分　が、彼に耳打ちする。

あの目といいドグマ王に関わっているといい　このハンター、間違いなくやらかすぞ、と。

相変わらず荒涼とした大地が続く。ボレアの風　魔性の風が甲高い悲鳴を奏で、閉鎖空間の中にするりと忍び込み沈黙した観客と化した商人の間で大合唱している。

コーラスを乱すように、武装商人が口を開いた。

「知ってるか？ モンスターは狩るだけの存在じゃない」

武装商人がぼそりと呟いた。長い蛇睨みの後のそれは、なんともハンターらしくなかった。

並んで座る商人が彼を見て、みな様に不思議を表情に表す。誰に向けての言葉かは、相変わらず睨まれているエイスンだけが理解していた。そして意味もだが　それはようやくとも言えた。

彼は　表向きは商人として忍び込んだハンターは、なんらかの方法で、取引を邪魔しようとしている。全く以て、護衛としてあるまじき行為。

しかしまだ断定的で、確定的要素がない。断定である理由としては、ジャギイの集団を打ち払ったことが挙げられる。

ドグマの平原の草は背丈が低いと言えど、いくらでも紛れようがある。あたかも救世主のふりをし、荷室を飛び出してごろんと緑の茂みへ転び込めばすぐだ。そうやって馬や護衛対象が、むざむざと餌になっていくのを黙って見過ごせばいい。

しかし、それは無理だった。エイスンの存在は彼にとって不穩因子以外の何者でもない。

肉切りエイスンの噂は、ドグマ領で知らぬ者はいないとされるほど出回っている　どこかの箱入り娘は知らなかったが　彼のその腕前もまた、同様に。

そうすると、雇われ武装商人の発言から取れる目的は絞られてくる。

彼が取る選択は、その有名な力を上回る力をぶつけること。

もつとも、それは彼一人の選択ではない。彼は安全という言葉のない街の外で、わざわざ自分から危険を犯すことを好まない人種である。そのため、大きな権力からの期待と命令を原動力とする以外に自らのタブーを破ることはできなかった。

概ねエイ孙の考えは当たっていたが、完全には気づけていなかった。そして、概ねとはいえ把握していたにも関わらず、事が起きるまで静観する姿勢が過ちとなる。

だが、思い込みで行動することなど誰ができよう。少なくとも、エイ孙にはできなかった。

馬車が止まった。今度は、荒々しい待遇なんかではなくちゃんとした、目的が明らかかな停止。シエルは窓を覗いていたからわかった。吹き荒ぶ砂風も弱まった岩陰。並んで放置された青と赤、二つの箱が岩壁に隣接して置かれている。そして、彼女が昔父の傍らで何気なく読んだハンター向け雑誌の挿し絵にあつた、濁った薄黄色の幕。巨竜の牙が地面から生えてその形を支える、ドーム状のテント。もはやハンターでなくとも全世界に知られる、通称ベースキャンプ。

やや高めの盛り上がった断層の上に設置されているのは、少しでもモンスターの中から遠ざけるためだろうか。

地下の岩が時の流れで地表へ突出し、岩陰に隠れるようにして確立されたベースキャンプには、比較的モンスターの襲撃はない。ハンターズギルドが調べあげ、決定した穴場。ハンターが拠点とし準備をする一時の安息の地には、その意図が反映されているのは確かだ。

狭苦しく重い密室から解き放たれたのは全員同じで、停止と共にぞろぞろと乾いた土に足を下ろす。伸びをする者もいれば少女の手を取りエスコートする薄い頭の者もいる。

そんな折、もう一つの馬車がベースキャンプに通ずる坂道を緩や

かに登ってきた。彼らが通ってきた荒野側ではなく、ベースキャン
プを境にして北と南に別れるボレアの北の顔、もう一つの砂漠方面
から。

これまた立派な装飾。ドグマの馬車と違うのは、下品な煌めきで
はなく上品な優美さを持つ純白の荷台だったこと。それに合わせた
ような毛並みの良い白馬もまた、両国の品性の違いが伺える。

今このとき、ボレア砂漠のベースキャンプに目的を持ってやって
くるのは、トリリアリースの商団以外の何者でもない。他の目的を
持つ集団だとすればそれはハンターなのだが、いかんせん北にはト
リリアリース以外に国はない。もつと北上すればまた別の国がある
のだが、こうも都合よく同じ時間帯に居合わせる可能性は限りなく
ゼロに等しい。そしてヨハネスらはトリリアリースの商会を知って
いる。つまり、もはや確認するまでもない。

白馬の来客は、黄金の馬車から少し離れたテント横で止まった。

御者が停止の鞭を打ち、そのいななきさえ気高いようだ。

ヨハネスが近づき、荷台から人が出てくる。

出てきたのは一人。宵闇のような蒼黒のローブが限りなくアース
カラーの大地に映える。トリリアリースの民族衣装だ。

「本当に、これでいいのですね？」

純白の布地を当てた荷室から現れた、黒い姿のトリリアリースの
商人が第一に発した言葉は、あらゆる前置きをすつとばした一言だ
った。

しかし、狼狽える様子の無いヨハネスはすつ飛ばした前置きを知
っているようだ。

「ああ……頼むよ」

黄金の馬車の近くで文句やら不安やらを口々に呟く商人達の傍ら、

エイソンは聞き耳を立ててヨハネスの齒切れの悪い返事を聞いていた。彼は別の意味で狼狽しているとエイソンは理解する。

新たな考察の可能性を含んだ、両国の会話。自分が所属するはずの商会からの意味深な言葉。

トリリアリース側がヨハネスの決断を知っているなら、納得できる言葉でもある。だがまだ、わからない。

蒼黒の姿の商人が荷台に体を突っ込み、次に上半身を表したときその両腕には、小さな子供一人分の大きな卵を抱えていた。

「では……」

全身をフル稼働するように、慎重に卵がヨハネスの両腕へ渡された。完全に受け渡される際、見た目に比例したかよわい体が前のめりになる。相手も慌てて同じ格好になって支えようとするが、なんとか態勢を直し、安定して卵を抱き抱えるヨハネス。エイソンの位置からは背を向けていて見えないが、大丈夫という意味表示の籠った小動物の笑みを浮かべているに違いない。

取引はあっけなく終わった。と言っても、ヨハネスはまた後払い金を渡しに行くので再度ここまで来る必要がある。あとはリエムドグマへ戻り、約束の時間に密会を行えば終了。エイソンの役目もそのときにはすでに終了。

純白の馬車が来た道へ向き直り元氣よく蹄を進めると同時に、入れ替わりで人影が坂道を駆けてきた。

砂を巻き上げる馬車の横を走りベースキャンプを目指すのは二人。どちらも、明らかに砂漠の気候に合わない鉄製のステイルとジャギシリーズ。それぞれ姿に合わせたブレイズブレイドと蛮族剣を

携えて。

かなり息が荒い。ギルドの依頼で、簡単な採取クエストだろうが狩猟クエストだろうが、どちらにせよクーラードリンクを飲んでいるに違いはないのだが、額には大粒の汗が滝のように流れている。

商談が終わり、卵も商人も馬車に乗り込む途中での彼らの登場は別段珍しいものでもない。

ただ、ハンターだと思われる二人（そもそもそれ以外の人間には見えない）は、訳ありだと推測されるのに、それだけでまたベースキャンプを下ってしまった。小山に匹敵する断層を、緩やかな傾斜を使わず崖を下っていく様はまるで白昼夢だ。存在がではない、存在感がだ。さっとトレーニング中のランナーのように通りすぎてしまった。

ただし、それもあり得る。わざわざランニングコースを砂漠にしたのも汗をかくためだと考えれば、少しは頷ける。だが、危険なモンスターがうじゃうじゃいることと、砂の大地ないしは枯れた荒野に骨を晒す可能性もじゅうぶんにあるも含めばただの無謀。それは賢いとは言わない。何より、武器を背負ってランニングしていい汗かいたーとかほざくバカがどこにいるのか。つまり彼らはハンターなのだ。

彼ら二人は、来た方ではなくエイスン達に通ってきた荒野へと消えた。砂漠と荒野のモンスターの治安は全く違う。それにも関わらず、今彼らはクエストの最中に全く別の地域へと向かった。

そのの意味するところは、クエストの放棄。もしくは、討伐対象が砂漠と荒野を行き来する風来坊のような性質のモンスター。

それはエイスンにとって悪いニュース以外の何者でもない。ひいては、馬車に乗る者全員に対するニュースでもある。

これから、巻き込まれる可能性はじゅうぶんあるのだから。

エイスンは一荷台から降り、馬の前で餌をやる御者に話しかけた。

「このまま待機だ。今から発てば狩りに巻き込まれるかもしれない。待とう」

エイスンが御者に対して注意を促し、今にも出発させようとしていた彼が人参を手にオーケーサインを出したとき　それが響いた。

どこかで、角笛を吹いている。
それも、かなり近い！

勇者のメロディーを奏でるドラゴントランペッタ。原因はあの二人以外考えられない。狩猟や野蛮を好まないトリリアリスが自らを危険に招き入れる行動はしない。

シエルもさすがに不安になってきたようだ。おそらく響き渡るこの音の意味を知っているのだろう。荷室の垂れ幕から顔を出して訴える。

「エイスン、この音色は角笛ですよね。たしか飛竜の怒りを誘発する道具と」

「いや、餌こつちつて教えるようなもんだ」

なぜだ、あれだけ疲弊して一体“何”を呼び寄せようとしている？

ただならぬ気配を察知したのはシエルだけではなかった。リズムのよいそれは、馬には悪魔の来訪を告げる魔笛にしか聞こえないらしく、甲高い悲鳴をあげはじめ　そして最もエイスンが驚いたの

は 薙刀とその使い手がない。

とりあえず、下りて止めなきゃ。エイسنは御者にそのまま待機を崩さない旨を伝え、崖を下ろうとしたが 遅かった。

「ああ！ ティガレックスだ！」

荷室で窓を覗いている商人が叫ぶ。その声に、小さな窓に顔をへばりつける者や急いで荷室から出る者など、とにかく騒がしくなる。馬車から見えているなら、エイسنにも見える権利はあるが 見渡す限りの砂漠には蜃気楼が揺らめき荒野には荒れ狂う魔風と踊る枯れ木。ティガレックスの特徴的な姿をその目に捉えることができない。

そう、何度も繰り返すが 遅かったのだ。

暴力的な衝撃がベースキャンプを襲う。

砂利が空から降り、岩棚が崩れ落ちる常軌を逸した状況の中で、エイسنがようやく見ることができたのは 全方向からの強い衝撃に揺れる世界と、重力の槍を味方にしながら馬車を叩き潰しバラバラに吹き飛ばす、轟竜ティガレックス降臨の瞬間だった。

4・肉はレアに限るとか。

その原始的な風貌はキングオブワイバーンと呼ぶに相応しい。たった今足元で叩き潰した黄金の馬車を軽く上回るサイズは、人間に合わせたベースキャンプには肩が狭い。

枯渴した泥の色をした翼膜をたたみ、関節に何か挟まったようにぎこちなく翼手を動かし、空色の瞳をぐるりと回しながら舌なめずりをする轟竜。

まず最初にその竜眼に映ったのは、生物としての本能か、動くものの。

追い付くわけもなく、過ぎ去ったトリリアリースの馬車に助けを求めるようにベースキャンプ北の坂道を走る商人を真っ直ぐ見据え、黄濁色の鱗が網目状に広がる腕が土を掴む。

初速などない。あるのは速効性の超加速。まるで時計の針を高速で調節するかのように　長い針が短い針の何倍も早く一周するように　白いロープに追い付く。彼は瞬く間に、背後に迫った重圧と腐敗した吐息を感じ、走りながら絶叫していた。振り向くことさえ忘れるほどに。

これは夢だと自分に言い聞かせ、現実から逃げて非現実を脳にインプットさせる。　大丈夫。これはデジャヴなんだ。起きれば暖かなベッドの上さ。発酵した糞尿に近い腐臭も、町を凌ぐほど巨大な鉄が覆い被さってくるようなこの圧迫感も、覚醒をより心地よくするための余興なんだ！

砂だらけの剛爪が白くはためく背にかかる。

地盤が埋没し、どすと乾いた音が鳴ると同時に絶叫が途絶えた。浅く大地を抉った大腕が持ち上げられ、そこに残るのはミンチと化

した分裂体。文字通りばらばらの赤い肉片が、薄く引き延ばされた小麦粉の生地のように爪痕に張り付いている。言われなければ白いローブを着ていたことを忘れさせる変貌。

殺戮の竜は肉塊に鼻を近づけるが、寒冷地帯に住むポポはもとより、ジャギイすら肉厚と思えるほどに肉の少ない人間が気に食わなかったらしく、そっぽを向くかのように素早く首を捻る。そして命じられることもなく、ごく自然にその巨大な頭をベースキャンプへ向けた。

馬車が粉々になった際、飛び散る弾丸となった一部の破片に頭を打たれたのか御者の商人は倒れてぴくりともせず、二頭の馬のうち一頭は微弱な痙攣を起こして横倒れになっている。

丸い爬虫類の目の中で細長い縦の瞳孔が開き、同調して大顎も開かれた。涎が滴り落ち、小股で前進したかと思うと両腕を強く地面に叩きつけ、反発力がティガレックスの巨軀を浮かす。

それは力を加えられて反発したバネを思わせる跳躍力。空高くにはない。だが、翼持つ竜の低空飛行のごとき跳躍。飾りのよいな翼も、このときは風を掴み空をきるための滑空補助部位。

つまり、一瞬のうちに距離を詰めて馬へ食らいついた。鋸を並べたような両顎が締まった肉体を別つ。

そのとき、エイズンはシエルを探していた。かわいそうな商人が絶叫したおかげで 本人には申し訳ないのだが、率先して凶になつてくれている間、彼は碎けた馬車の荷室だった場所を搜索するこ

とできた。
が、そこには下敷きになつて潰れた商人がいるだけで 辛うじて体格や服装がわかる程度に血まみれの死体は、他の体と混合して何名死んだのかはわからない。しかし、少女の轢死体とその父の姿はなかった。ヨハネスには白いローブという、他の商人との共通点があつたが、少なくとも小柄で頭髮の薄い死体はなかった（おそ

らく薄れゆく髪に対して最初で最後の敬意を払う出来事)。

ぐしゃりと北の坂道で鈍い音がして絶叫が止んだ頃、辿り着くべくして考え付いたのは衝撃でどこかへ撥ね飛ばされた可能性。

高所に設営された狭いベースキャンプならば、衝撃の波で崖から身を投げ出され下方の砂地へ落下した可能性がある。北の砂漠はきめ細かい柔砂で構成されている。崖から突き落とされた者がそちらに運良く落ちていればいいのだが、荒野側へ落下していれば、落下のエネルギーと相まって固い大地は鋼鉄の拷問器具になる。つまり、助かる見込みはない。

しかし、唯一生存が考慮される砂漠へ向かうには、ティガレックスという生ける防壁が立ち塞がる。牢獄より堅牢な壁であり凶悪な殺戮兵器。

今、考え耽るこのときすら暴力の塊がエイスンへ向かって直行しようとしているかもしれないのだ。

彼の選択肢は、嫌がおうにも荒野へ向かうことに絞られる。

あのランニングハンターのように崖を下るしかない。それは決定事項。却下するならば、青と黄のストライプに身を差し出すことになる。荒野側にも上り下りするための坂はあるが、その道はベースキャンプから丸見え。ひいては、超反射生物の格好の的。

迷うことなく崖縁に立ち下方を覗き込めば、思いの外高所ではないことが判明した。とは言え、五十メートルは軽く超えている。

それはエイスンにとって最悪の報せでもある。見渡しのいいベースキャンプから見られただけで、この荒廃した荒野にいたことがまるわかりだ。そうなれば犠牲になった商人の二の舞になってしまう。それでも、ベースキャンプに居座るよりかは、少しでも時間を稼げるなら崖を降りるほうがいい。

切り立つ崖は所々に足場となりうる出っ張りがいくつもある。エ

イスンは上半身を地面に張り付け、ゆつくりと中空に向かって後退しながら足だけを崖に放り出す。続いて腰ごと足を曲げ、指先で足場となりうる岩を探る。

ちようどいい位置の岩がすぐに見つかった。火急的速やかに、安全を確認するために爪先に力を込めて岩を叩く。だが、そのまま力を留めることはできず、岩は脆く崩れ落ちる。
ぐずぐずしている暇はない。今にも。

突如としてエイソンの体が宙に浮いた。足場を探すことに気をとられすぎて、何が起きたかわからない。身体中に痛みが走る。

眼前には未発達な翼を広げながら両腕で垂直に地面を掴み、大口を開けるティガレックス。その巨軀を支えなければならぬほどの攻撃を行おうとしているようだ。それは轟竜に確認されている行動の中で、名に由来するほど特徴的な生態行動。

ただ、一つ違う。未然形ではなく進行形なのだ。

存在を誇張するような咆哮の幕がティガレックスを中心に巻き起こり、吹き荒ぶ風塵がはじかれて舞い上がっている。空気が震えるほどの轟音、体が物理的ダメージを訴えるほどの圧力。事実、エイソンの鼓膜は音の刃にたたき割られた。たった今までエイソンが這いつくばっていた崖が亀裂を伴いバラバラに落下した。

くそっ、やられた。バインドボイスとは。いや、それよりこんなヘマをしちまうとは。

太陽を吸収して更なる輝きを放つ黄金の鎧では狙ってくださいと言っようなもの。それは言うまでもなくわかつている。

砂色の世界がぐるぐると回り始め、後頭部付近が痛み始めていた。

次に起きることが脳裏に過る。こうなるとは夢にも思わなかったが、鋼鉄のベッドと化す大地に身を委ねることは避けなければなら

ない。しかし、痛みに蹂躪された体では判断が鈍っていた。

何をするまでもなく、受け身すらままならないままエイソンは背中から荒野に叩き付けられた。落下の衝撃と土からの反発力に肺が押し潰され、無意識に開かれた口から空気がすべて排出される。同時に、反射的に後頭部へ腕が回され保護しようとするが超過衝撃に変わりはなく、碗甲を通して後頭部を打ち付けてしまい、意識が飛びかけた。

人間の生態的行動により、辛うじて気絶することはなかったが、彼の体はダメージの許容をとくに超えていた。ただ不幸中の幸い、黄金の女王竜殻の鎧が誇る類を見ない強度や耐衝性、内壁部に特注搭載されたゴム質吸衝皮により骨折を免れた。

「げほっ、ぐぞ……しぐじった」

ぼやける視界、遠い日に帰るような億劫な気分。弱々しい呼吸が自分のではない吐息に感じられる。

エイソンはまず、己の武器を探した。落下に乗じて反撃の術をなくせば、殺す殺せないに関係なく手負いの彼はそこで人生を終える。まずは右の一丁を。コートの内側に手を伸ばし、腰をまさぐる。探そうにも頭の代わってダメージを請け負った腕では思うように力が入らず、細かく震えてしまう。しかしそんな弱音を吐く余裕はなく、意志の強さで動かした。

なめし革に指が当たった。それは鎌蟹の包丁を納める鞘。刃止めのベルトが外れていないことを確かめ、まずは第一段階の安心。次に手探りで柄にたどり着き、握る。

その瞬間、常に滞在する鈍痛とは別に、ずきりと腕全体に鋭い痛みが走った。どうも、骨にひびが入っているようだ。ゴム質吸衝皮が保護する胴体に比べて衝撃を逃がしにくい腕は、使い物にならなくなっていた。

言うならば、今のエイソンは太陽に照らされる大地。日光に晒さ

れている間は痛みが訪れ、落陽と共に鎮静し始める。

そして、ようやく落陽し始めてきた具合。事は壮大ではなく、取り戻しようがある。

足の感覚がはつきり伝わってきた。いつも、ごく日常的に行う足への動作命令も滞りなく、腹に力を込めて連携すれば上体を起こすことができた。

恐るべき事態が、エイスの体に起こった。負傷者にとって比較的刺激しい動作をいきなりしたのが不味かった。

背骨付近に痛烈な痛みが走った。それはこの数分で感じたすべての痛みをはるかに上回る。

「ぐああ……！ う、ぐっ」

悲鳴をあげかけて、はっと呑み込む。今でこそ無防備な状態からあぐらをかけるようになるまで回復に至れたが、見上げただけの上方には、もう負傷者にはどうすることもできない支配者がいるのだ。迂闊に自分の居場所を知らせてはならない。

あぐらをくずし、足を交差させながら立ち上がり、見上げるエイスン。脊髄を損傷していたなら、できない。恐るべきはとりあえず回避した。

よし、なんとか歩けそうだ。

まずは、自分の身を隠すことが先決。

エイスンが身を以てしてわかったことが二つ。一つは誰も崖から落ちていないこと。これに裏付けされるもう一つは、鎧を着けている彼すらこの惨状、到底落下者が生きているとは思えない。

つまり、理解不能。北と南に別れる砂漠で、荒野はベースキャンプすら飲み込んでいる。だから、崖から落下しても砂の地に行くことはない。

見当たらなかった生存者は死の大地に落ちるはずなのに、誰もい

ない。最後の瞬間を阿鼻叫喚の形相で迎えるであろう落下死体すらも。

ボレアの荒砂地帯で、彼が見落としていたのはテント横の小さな吹き抜け。岩棚にトンネル状に空いたそれは、岩山へ続く道。その岩山地帯はベースキャンプと同じように、砂漠と荒野にボーダーラインを引くかのように存在し、両地帯を行き交う中継地ともなっている。

ドグマから割かし近いボレア領にエイズンは何度も訪れている。だが、様々なイレギュラーに気を取られ、正常な判断を鈍らせた。いわば記憶の本棚にイレギュラーという魔本が挟まれ、知り尽くした場所の記憶がすっぽりと抜け落ちたということ。

無理もない。ベースキャンプが襲撃される際、ヨハネスとその娘は偶然にも吹き抜けを潜るように吹き飛ばされ、その直後に崩れた岩棚が、通行を禁止させるべくトンネルを塞ぎ止めたのだ。目視と知識で情報を更新する人間には、いくら他人から言われようとさらにパニックになっていれば、そこに道があったとは思えないだろう。

そして、二頭の馬の内一頭は、騒ぎに乗じて逃走者に奪われたこともわからなかった。

一方、晴れ渡る空を臨む岩山地帯にて。

実際は、吹き飛ばされた訳ではなかった。体型と印象から想像もつかない素早い判断で娘を抱き抱え、衝撃さえ利用し、明らかな意思を持って岩のトンネルへ転がり込んだヨハネスは、ティガレックスから一刻も早く離れるために無我夢中だった。

知り尽くした地理を焦燥感により忘却し、ただ闇雲に走った先で辿り着いたのは、小さな池と水分を獲得したヤシの木が点々とある岩の間の平地。普段は様々な種族が稀少な水源に群がるのだが、運

良く今は静まり返っている。

ヨハネスは水辺に腰を下ろし、抱えていた娘を座らせた。

シエルの精神状態がよろしくない。肉体的恐怖に加え、これから身売ることも相まって少女には現状を受け入れがたいのは当然。肩を震わしながら、視線をあちこちへさ迷わせている。

父として、娘を守らなければ。小さな肩に手を差し伸べようとして、ものすごい速さで払われる。鬼気迫る状況下、取り繕う余裕はなく彼女の本心が露見されようとしていた。

肩に合わせて震える唇が開かれる。

「どうして、どうしてお父様は私を売ったのですか？ 私など、いない存在なのですか？」

涙ぐむ娘。エイスンに皮肉を飛ばされて父を庇ったときの、強い意志がみなぎる表情。

普段から感情をあらげる姿を見せない娘の思わぬ力強さに、ヨハネスはたじろぐ。

彼には、好んで娘を売り飛ばすという気持ちは微塵もない。表面上はそうしている。 “だが、今言うわけにはいかない。” 心配させる訳にはいかない。

「耐えてくれ。もうすぐ終わるから、ちゃんとシエルを愛してるから、今は耐えて」

彼は嘘を吐いていた。それは娘を護る方法だと信じて疑わない犠牲の手段。エイスンの読み通り、商品の知らない間で事は進んでいたのだ。

だが、忘れてはならないのはここが大自然の真っ只中であり、い

つ何が出てきてもおかしくないこと。

私情に耽り、完全に油断しきっていた二人だが、シエルは気づいた。池の水面に気泡が弾けていた。極度の緊張と疲労による見間違いかと思い、彼女は一度目を瞑り　落ち着け、落ち着けシエル・エポーサ　自らに呪文をかけるように息を整えてもう一度水面を見る。

今度は気泡はなかった。代わりに、水面に黒い真珠のような突起物が現れていた。水を薄く纏うように静かに水面を破り、紅色の固そうな甲殻に包まれた蟹が上陸する。

彼女がそれを蟹だと解つたのは、複数の足を忙しく動かす姿やかくばった甲殻のためだけではない。小さくも、威嚇と敵意を示すのにはじゅうぶんな鋏を、万歳のポーズで掲げて、まさに蟹ですと誇示しているからだ。

それが、今まさにヨハネスの背に接近している。躊躇うことはない。

「お父様後ろ！」

声に導かれ振り向けば、まだ蟹は水から出たばかりで、ヨハネスとは数メートル距離がある。だが、この水辺は安全地帯ではない。そのことがわかっただけでも収穫はあったようなもの。

幸い蟹はヤオザミ。大型のダイミヨウならば二人に命はなかったが、まだ悪意を持っているかどうか疑惑の域に留まるヤオザミを置いて二人は駆けた。無闇に手を出さないこともヤオザミに対して有効だった。触れぬ神に祟りなし。縄張りを守ろうとする姿勢はどの生き物にも共通している。素直に退却すれば、それがティガレックスのような超好戦的生物でない限り逆鱗に触れることはない。

岩の間に敷き詰められた砂をさくさく踏み固めながら道を通り抜ける頃、目立つ赤い甲殻は見えなくなっていた。

両脇の岩山が開けて、程無く見えてきたのは谷のような空間。左手には先ほどの水辺よりはるかに生命を感じさせる川。太陽が傾き始めている澄んだ空が二人を包容する。

ボレア砂漠の調査記録を読んでいたからこそシエルはベースキャンプを知ることができた。そして、当然その他の注意点も。

「地底湖への道……」

川が下流に流れ込む先には、岩の屋根が玄関となる地下空洞の入り口。

調査記録には、多くのハンターが釣り餌を持ってその暗闇に入ることが多いと記されていた。そして巨大な竜を釣り上げることもあると。

今は、そのような出来事に遭遇することはない。確かめるように頭の中で繰り返しながら、シエルが呆然と地底湖への入り口を眺めている間、ヨハネスは思い出したように川へ向かい、腕を形作った両掌で流水を掬い飲む。

気分はそうでなくとも、短時間で極端な状況変化を経験した肉体は水分を欲していたのか、一度と飲み始めると止まらない。

「お父様ー。水辺は危険ですよ」

ざばあつと水柱が立ち上る。否、それは水飛沫を撒き散らかす水中の魚王。調査記録には地底湖にいと記されていたのに。それは全くお門違いな責任転嫁だが、現に今巨大なヒレに変態を遂げた翼を広げ、煌めくエメラルドの鱗を太陽に晒す姿は翠水竜ガノトトス。

足の付け根から上を水上へ露にし、鰻のような長い頭をもたげる

そのポーズは 調査記録を読んでそれが正しいなら 高圧水流のブレスの予兆。

足が石になったとさえ思えるくらいにシエルは硬直し、ヨハネスは突然騒がしくなり自らを覆う影を見上げる。

刹那、大地が割られた。レーザーのごときブレスが通る痕から、掻き出された土砂が勢い良く吹き上がる。地面に向かって打ち出した水流を、徐々に頭を上げながら飛距離を伸ばして岩壁にまでぶつける。

間を置いてどごと重い音。微かな霧雨がかかる程度の被害しか被らなかったシエルが背後を見れば、ちょうど重心となる場所を削られたのか、大きな岩棚が崩れ落ちる風景が目に入る。

頭を垂直にまで上げると、そのときには大地を抉る水流は止まり、ガノトトスはそのまま水中へと巨駆を隠す。

いまだシエルの胸は高鳴っているが、父はどうなっただろうか。

「シエル、ここから離れよう！」

間一髪軌道から避けていたようだ。水浸しの重くなったロープを激しくはためかせてシエルへ駆け寄る中年。

汗だか川の水だかわからないほどずぶ濡れの彼の背後から、またしても水柱。言うまでもなくその魚寄りの間抜けな顔は大口を開け、パール之眼を二人へ向けている。

「む、おりやつ」

唐突にふくよかな腕からガノトトスへ向けて小さな玉が放られる。同時にいつそう四肢の振り子を速く駆動させ シエルを抱き締めようにして砂利の原っぱへダイブする。

投げた主の非力さからか柔らかく放物線を描いた投擲物は、かち

りと軽快音が鳴ると同時に、景色を全き白に塗りつぶす強烈無比な閃光を放った。

小さな太陽の出現といえるそれは、非常に小さなガノトスの目にすら焼きつく痛みが走るほど。

岩棚すら貫通させる水流が出るべき口から掠れた悲鳴をあげ、川の水を渇水させる勢いで暴れながら水中へ退却するガノトス。

多機能なポケットの多いロープが役に立った。波紋立てる水辺を尻目にそそくさとその場を離れようとする二人だが、どれほど悪運が強いのか、はたまたティガレックスから逃げおおせた時点で運は尽きたのか、つくづく不幸な父娘の元へ、新たな異端者の来訪を告げる足音が近づいていた。

弱まることのない風が吹く荒野で、エイسنはいつまで経ってもティガレックスが崖から姿を見せないことを不審がっていた。

あの咆哮は明らかにエイسنに向けた悪意。標的だと決めた相手に対する牽制でもある轟き。好戦的の代名詞であるティガレックスが、獲物の死を見届けずに立ち去ることは天地がひっくり返っても考えられない。

だが天地はひっくり返っていないし、現にあの大きな牙をちらつかせる竜の頭は一向に現れない。

これは好機。歩けるならば、ぜひ歩く。

彼の目的はあくまでもシエルの護衛のみ。死ぬかもしれない綱は渡らない。しかし、もしもティガレックスがシエルを見て、胃袋に収めるべきだと考えを変えていたなら、何がなんでも止めなければならない。それが使命。

彼が歩を進め始めた方向は北の砂漠。先ほどわかったことを踏まえれば、逃げ延びているに違いないと思っただけの行動だ。

風がなくなり、入れ替わりで熱気がエイスンの顔に張り付く。足元の感触が固いものから、沈むくらい柔らかくなるまでに変わっている。すでに荒野の硬質感はなくなり、ゆらめく砂丘へと変わっていた。振り向けばベースキャンプへ向かう坂道が見える。そして、似つかわしくない音色が微かに。

聞き間違うはずがない。それはティガレックスを召還した悪夢の音色。人工的に風穴を空けた竜角から奏でられしメロディー。

この期に及んで俺を始末するつもりか？ クソツタレランナー。

遙か右手、百メートルほど先の岩山から、馬のいななき。同時に、響き渡るメロディーも鮮明になり近づく。崖から落ちてまでして確認した、エイスンの優先事項がそこにいた。

どうやって出し抜いたのか、黄金の馬車を率いる二頭の馬の内一頭に跨がる武装商人。その後ろにはヨハネスとシエルも。定員ギリギリ。

武装商人は馬銜から伸びる手綱を片手で操り、角笛を吹いている。だが、その道具の意図を、ヨハネスは知らなくともシエルは知っているはず。ランナーが去ったあとに聞いた角笛に対して、唯一反応した彼女がそれを証明している。

なのに、シエルは止めない。わざわざ餌の居場所を知らせるものだと教えてやったのに。

まさかグルだったのか？ 取引の不透明な部分は、このために生まれた綻びなのか？

ただしそれは取り越し苦労。馬が砂に足を取られながらエイスンに迫ると、二人の状況がわかった。

涙目になりながらも父娘は沈黙したまま。口を長方形の布が蓋をしていた。おそらくネンチャク草を織り込んだもの。そして後ろ手

に縄で縛られている。ご丁寧にも二人を縛る縄は武装商人の腰に繋が
り、振り落とされないように鎧に足が固定されている。

武装商人がエイスンに気づく。

「肉切りい！ お前も道連れになれ！」

背筋が冷えた。クーラードリンクを飲んでいないことを考えれば
ありがたいことだが、まったくありがたくない。

奴め、最初から商会長を抹消するつもりだったようだ。だからこ
そモンスターは狩るだけじゃない、か。それで今度はモンスターに
食われようってか。クソツタレ、なんてハンターに向いてないんだ。

砂があまりにもきめ細かいせいで、足をとられた馬は横転してし
まう。何もできず、馬から離れることすらできない父娘はただ熱砂
に這いつくばるのみ。

そこでお呼びでない主役が遅れて登場（正確には角笛に呼ばれた
のだが）。ベースキャンプを襲い、隊に混乱をもたらしたの同一
個体であろう。ティガレックスが岩山から砂の海へダイブしてき
た。状況が状況だけにエイスンには目もくれず、血で赤く輝く牙
が並ぶ顎を召還主へ向けている。

馬を乗り捨てた武装商人は、死を望んだはずの彼は、薙刀を構え
た。その顔には憔悴や不安をいっしょくたにした 通称、恐怖を
張り付けている。

覚悟もないのにこんな真似を。つくづくハンターに向いてない。

ティガレックスは、エイスンを重症に至らしめた極大の咆哮を放
つ。砂が球状に弾け飛び塵気楼すら掻き消す。蹂躪の開幕。

「う、おおおお！」

青龍刀を模した薙刀の切っ先を反撃の勲章に、一直線にティガレックスへ突進する武装商人。それに呼応して短く鼓舞するように吠え、走り出す絶対強者。

世界中の恐怖を凝縮したような圧迫感。びりびりと軋むような風、あるうことか彼の足が止まる。弱い心が生んだ、取り返せない瞬間。砂色の悪魔は突進の勢いを生かしながら剛爪を叩きつけた。薙刀が碎かれ、彼の体はぎゅるぎゅる回転して何秒か宙を舞い、砂に落ちた。

とつさに体を捻ったか。確か金属の　インゴットメイルを着ていただろうか、死んではいないと思うがどうだろう。

だが、そんな心配よりも危惧すべき事態が。

ティガレックスは今なお疾走し続け、横転した馬へ向かっている。そっちはダメだ。

確かに肉はレアに限るが、そのチキンはレアだと食べやしねえよ、クソツタレ。

ブレーキを無くした特急列車が永遠に走り続けるように、もはやティガレックスを止める術はない。そうとわかりながらも、足を止めるわけには。だが、上半身不随と化したエイスンになにができよう。再起不能とまではいかないだろうが、少なくとも今は役に立たない。

太陽が陰った。夕刻の落陽開始により、ちょうど砂丘の頂点に座した太陽が何かに遮られた。視界を埋め尽くす雑光が不意に消えたことが、紛れなく状況の変化を示唆している。

だがそれも、夢のように一瞬の出来事で、彼の目に再び輝く砂の世界に戻る。少しでも眩しさから切り離されたのはよくなかった。そのせいで目は、慣れていたはずの眩光の耐性をなくしてしまい否応にも瞼を細めなければならなくなってしまう。

限定された視界の中でよく見れば、陽を隠したそれは人の形をしている。だが、動きは獣に近かった。ティガレックスに立ち向かうように跳ねる姿はまるで夜蔭を這う野獣。ただし、死の砂漠には獣が好んで紛れるための草木はない。にも関わらず、その素早い動きは砂漠すら山野と思わせるほど滑らか。

真つ黒な人の輪郭がティガレックスの眼前に立ち塞がり、同様に絶対強者も立ち止まった。小蠅が増えた。そう思っているに違いはない。

あのランニングハンターを彷彿とさせる登場。二人であることも先のランナーと類似していた。新たな邪魔者の出現にティガレックスは苛立っているようで、標的をその二人に変えたいらしい。本来なら餌の優先が先だが、ティガレックスはわかつていた。砂漠に生きる中でたびたび目にし、時には葬ってきた、人工的で自然に不溶な姿をしたハンターを。しつこく現れる小蠅。

どれほど強靱な喉をしているのか、挨拶代わりに咆哮を轟かせる。

よくわからない気持ちが沸き上がり　どうにかなるのかもしれないという希望が沸き立ち、居ても立つてもいられなくなり、エイスは感覚が麻痺してきた腕をぶらりと垂らしたまま彼らの領域に小走りで近づこうとした。

焦点が合い、黒く塗り潰されていた輪郭の色がはつきりとわかった。

道中打ち払ったジャギイを思い出す、濁ったピンクの鎧。憎き召還のとんずらハンターの一人もジャギイ素材を重きに置いた鎧を着ていたが、それとは細かい箇所で造りが違っていた。目に見える部分で特に違いがわかるのは、装飾がカラフルなところ。その意匠は上級加工技師のみ施行を許される、優良素材を扱って造られし“Sランク”装備。

ドグマのハンターのほとんどはドグマ平原によく見られるジャギ

イの素材を、加工屋へものを頼む態度でない乱暴な言葉と共に突き出す。横柄なごろつきと差して変わらないそれに加工屋はうんざりして、今となっては注意することもない。愛すべきドグマの日常風景。

そして、ドグマ領で上位個体の素材を持ち帰ったことがあるのは、Sランク装備のジャギイメールをお揃いにする人物とえば、今のところエイスンに思い当たるのは二人しかいなかった。

ティガレックスに異変が起きている。空色の瞳が、落陽に染まる今の太陽のように赤みを帯びていき、それに伴い黄と青のストライプ柄の甲殻が若干盛り上がっている。筋肉の膨張。さらに、その肌を這うように広がる深紅の分岐線。どくどくと脈打つ様はティガレックス自体が心臓になったとさえ思える。

目障りな小動物に対する竜の逆鱗が解き放たれたのだ。基本、怒りを無から産み出すことはない。そして滅多なことが起きない限り、同様に。大概のモンスターは無駄なエネルギーを使うことを無意味と知っているからだ。

それでも、このティガレックスに関しては些細なことで怒りを造り出すことができる、酒気を帯びた人間に似た思考回路を持っていた。

お揃いのメールを着こなす二人は左右別々に展開して進行を別ち、その内一人は歩みを緩め、背に腕を回し、細長い物体を構えた。エイスンの思い当たりは確信へ変わった。なんで、こんなところに。全く理解できない。一国の王が、狂犬と呼ばれしハンターがそこにいる。

細長い物体の正体。鎧と同様に、狗竜の血肉を刃となした骨断刀が物語っていた。それは長い間狗竜の一団を率いたリーダーの牙と爪の分身とも形容できる骨刀。鋭利な意匠から影断カゲタテとも呼ばれる逸

品。

ならば、もう一人も知っている人間だ。同じ装備を纏うのは狂犬と狩りを共にする猟犬主。

男性用の威厳溢れる造りに対し、女性用の誇り高きロングスカート。彼らは性別を除けば全く同じだった。肩口から背に掛けた武器も、同様に。

骨断刀を構えて待機する男性とは別に、未だティガレックスへ走り寄る女性用ジャギース装備のハンター。彼女が女性だとわかるのは、ただ女性用装備を着ているからではない。丸い毛玉がアクセントのベレー帽のようなキャップからは、風に身を委ね流れるような、黒金色の長髪がたゆたっている。そして、遠目からでもわかる妖艶な唇と顔のライン。エイズンは無意識にグレースと比べて両手に花という語句を連想した。

つまり、女性ハンターは、真っ正面からぶつかる絶対強者の眼前でローリングする。退化した翼を含めると異様にリーチが広い絶望の豪腕が空を切る。深紅の瞳がぎよりと小脇を転がる女性を睨み付ける。間を置かず首をぐいと曲げ、大口で咬み千切ろうとして小さくうずくまる姿へ巨頭を近づけるが、嘲笑うような後転に避けられ凶悪な牙は熱気を食む。

小気味よい摩擦音。跪ずいたような姿勢で見上げる女性の目は鋭く、微笑を讃えていた。肩口から伸びる柄を両手で引き出し、抜刀の勢いで轟竜の頭へ振り下ろし一閃。

血流が過活動しているからか、尖ったエッジ状の耳辺りに刻まれた切り傷から噴血。思わぬ痛手に強者に似つかわしくない悲鳴をあげ、後ずさる。

女性ハンターは一撃加えただけでころりと横へローリングし、立ち姿へ。

一撃離脱。自分がかよい存在だと理解しているがために扱う戦法。真の強者と言うべき、狩りに対する見事な姿勢。

ティガレックスも黙っていない。尾に螺旋を、体躯に力を加え、一気に解放する。弾けた反発力が一定方向へ力を注ぎ、エッジ状の甲殻のスマートな巨軀を回転させる。たなびく尾が周囲に突風を引き起こす。

ひらりと、軽い綿を思わせる動きで範囲外へステップする女性ハインター。長髪が微風に揺れる。轟竜の暴力的な回転とは違ってバレーナのごとき優雅な回転。

まるで、知り尽くしている。そうしか思えないほど彼女の動きは無駄がなかった。回転力が失われて緩やかに態勢を整えるティガレックスに対し、振り回すような回転の勢いを乗せた骨刀が、これみよがしと斬りつけた。回転を利用する攻撃にすら、両者には差がある。

またも頭部を傷つけられ、激情は慟哭へ。唐突に豪腕が砂へと突き立てられる。翼膜を扇状に開き、尾がピンと張る。

咆哮さえすればすべてがひれ伏すとも思っているように　事実、これまではそうだったのだろう　ティガレックスは頭を高くもたげ息を吸い始めた。

彼女にとってそれすら手のひらで泳ぐ魚。つまり、想定内。

骨刀を水平に宙へ横たわらせ、切っ先と双眸を駆使し狙いを定める。轟竜の無尽蔵の肺が空気を満タンに溜め、仰け反るほどに体が硬直する瞬間。赤く染まった瞳に向けて渾身の刃が突き立てられた。龍眉の脛に宿るガラスの宝石を叩き割り、狗竜の牙の刃が頭蓋骨を食い破る感触が彼女の腕に伝わってきた。

堰を切ったような音の混沌が彼女を飲み込む。あからさまな悲鳴だが、咆哮に変わらない。鼓膜以前に、脳へのダメージが懸念される近距離で、彼女の脳が砕けその激痛で絶叫して悶え死ぬ姿が予想されるが、そうはならなかった。

キャップから耳に宛がわれた、ダックスフントを思わせる聴覚保護器が　垂れ耳を模した耳当て　完全にシャットアウトしていた。もちろん特注品であり、不必要な雑音をその場その場で閉ざすのは、設計上の困難から製品として完成することすら滅多にない。優遇されし達人が持つ予約特権。

ただしティガレックスの咆哮は筋肉質すら引き裂く大音波。肉体へのダメージがあることに変わりはない。びりびりと小刻みに震える女性ハンター。音波にやられたのか、膝から力を無くし、がくりと砂地に膝を落とす。

乱暴に、無差別に暴徒化するティガレックスに引き裂かれる！　遠巻きに傍観するエイسنはできうる限り最速で女性ハンターを助けようとしたが、振り子作用のない走りは歩みと同義だった。しかし、ティガレックスの様子がおかしい。　左目を潰され、脳にまで傷を負ったんだ。平静なわけではないが、やけにおとなしい。

その理由は女性ハンターの刀にあった。確かに彼女の握る狗竜の太刀は骨刀だ。ただしその中でも、特に非道とされる　生ぬるい偽善者の言い分だ　身体麻痺能力を有する骨縛刀が彼女の愛刀。カゲスイ影縫と称されるその太刀は影断と酷似しており、一見では区別不能である。

唯一簡単に見分けられる方法があるのだが、それは影断の鞘の色がジャギイのピンクに対し、影縫は異境の同種の蒼白だということ。そしてもう一つはその身をもって麻痺毒に縛られること。後者は大きな声で推奨しない。

本来なら身体全体　それも飛竜の巨軀へ毒が回るのは　自然治癒力も含めれば、そうそう早く麻痺することはない。が、脳付近へ直接神経毒が付加されたのが効いたようだった。

つまり、ティガレックスは後者の方法に蹂躪された。

見計らったように彼女の背後から片割れが飛び出した。天高く振り上げた影断を、跳躍が頂点に達すると同時に振り下ろす。ティガレックスは身体を自由を奪われ、支配者が気にすることはないとされるはずの身の危険すら悟っているのに、男性のイメージに違わぬ力強い追い打ちは無事だったほうの右目を無情に叩き斬った。

鱗がはじけとび、その衝撃で影縫に貫かれた眼球から血潮が吹き出す。もはや、今見逃したとしても長く生きられないだろう。

「シルベット、いけるか？」

「もちろんや」

ひざまずくシルベットを、男性ハンターの手がエスコート。まだ衝撃は残っているはずだが、彼女はすくりと立ち上がる。かよわいは訂正。さすがはハンター！

今一度、確かめるように二人は並び立ち、屈服されし暴竜の両脇へ立つ。華奢な腕が構える縫う刃は切っ先を水平に、逞しい手が握る断つ刃は空高く。彼らの見据える先にはそれぞれ貫かれた眼と切り裂かれた眼。口から血を流し始める轟竜の呼吸は荒い。生まれてから数えるほどこしか対面したことのない恐怖を感じているのだろう。

もはやアイコンタクトすらなかった。

獣。そう、まだその存在がはつきりわからなかったときのように、あの黒い残像のように瞬間的に加速する二人は、今や自身に迫る刃を見ることの叶わない竜の脳天へ刃を叩き込む。

力に任せて無理やり甲殻を裂く影断と、眼と眼を繋ぐように突き貫く影縫。

細胞の壊死により固くなり始める脳の肉腫に阻まれた両者の太刀が醸す交錯はさながら、歪んだ墓標のようだった。

5・生肉さえあればじゅうぶんだとか。

迷っていたかと言われたら、ノーとは返せない。依頼を受けたならば答えるのが彼のモラルだ。だが、腕の一本や二本の負傷にかこつけて、放棄しようとしたのも事実だ。

便利屋にとって依頼主は宝。自らを犠牲にして護衛することは当たり前でもある。姫君に忠君するナイトではないことはわかっている。それでも都合のいい救援に甘えたのは恥ずべき愚行。

まだまだ青い。一人前の便利屋だと自分では思っていたが、いい機会だ。己に渴を入れるいい機会、自惚れている間は半人前。いつか、こんなことを気にするようになるくらいの器になってやる。

エイスンが二人の前に立つ頃には、凱旋されしティガレックスの骸は砂にうずくまっていた。悠久の時と砂風が、肉と皮をとばし竜骨へ変えていく様が浮かぶ。

ジャギィSメールの男性は、リエムドグマの国王。本来ならティガレックスは暴力の象徴、接触する者は限られ、もし相まみえたとしても簡単に狩ることは難しい。第一、眼球を狙って一撃決殺を狙うなど上位ハンターすら　懐へ入ることは死を望むことに等しいティガレックスならばなおさら、困難極まりない。

そんな化け物を簡単に駆逐する彼は、その武力で抗う人々を支配した。

かつてリエムドグマは無名の村だった。ライツ山は古くからその名を受けて存在していたが、その頃はタールドグマの原型すら無く、

アリルニアさえなかった。

狂犬はもともと、レイン・ドグマ・アグノイヤという名で、ある大国のハンターズギルドに勤めていた。うら若き日。ハンターズギルドの原型となるその小さな連合で、才能の片鱗を発揮していた。

だが、先は見えていた。ハンターを使って、その有能なシステムを拡げて世界を手に取りうとしてるのは（誇大妄想）。

ある時、妄想は確信へ。その大国の近隣の農村にイヤンクックが現れ、被害を被っていると、助けを要請する依頼がギルドへ届いた。それは誰も知るはずのないことだった。

見たのだ。その頃からモンスターの個体差に上位と下位の区分は設けられていて、いつになったら上位に上がれるのか、そんな些細なことを上層部へ尋ねようとした。

真っ昼間のギルドマスターの部屋。もぬけの殻。すぐに出ていればよかったのだ。

清潔でモダンな部屋の中央、筆記デスクの上で二つの紙片を見た。文字が途切れ、それぞれ右と左にぎざぎざのほつれ。一瞬で、それらは二つで一つだったものと解った。大国は、ギルドは小さな願いを捨てた。見捨てた。些細な　言い換えれば取るに足らない要請だが、当時はまだ有能なハンターが、四方へ回せるほど動員できるハンターが少なかったために起きた隠蔽。集会場のざわめきが遠い世界の出来事のように思える。

ギルドマスターはその日から、以前から招待を受け、視察を迷っていた別国への出張に赴いていた。

天秤に掛けた。恐らく、別国も猶予をあまり与えなかったのだろう。仕方ないとはいえ、それが上に立つ者がすることか。そして、ビジネスを優先した。　足元の小石を、蹴りやがった！

彼は穏やかでもあった。来るべき時が、思いの外早く来たとさえ

思った。彼には両親と妹がいたが、何も告げず街の囲いを潜る。

早く出ていればよかったのだ。あの部屋で見たのはただのゴミだと、いや、何も見ていないと言い聞かせればよかったのだ。

大国から出て一週間、レインは助けを求めていた農村のイアンクツクを無償で狩ることにした。ギルドでは他に力のあるハンターを募っていたため、自ら孤独を選んだ彼はたった一人で怪鳥へ刃を向けることに。隣に誰もいない狩り。ハンターの登竜門とされ、比較的脆弱で、ザコだと笑われる飛竜はそこにいない。大きな嘴も吐き出す火炎も、知らない森も、すべてが恐ろしかった。ガンナーが狙撃する岩場へ隠れようとしても隠れきるまで引き付けてくれる仲間はいない。獲物に狙い定める鷹のようにぐんぐん迫る桃色の竜に、初めて死を感じた。

それは新鮮で、楽しくもあつた。イアンクツクはよく動き回つた。彼はしなる尾を避け、はばたく翼の強風を受けて尻餅をついた。今までの怠惰が研ぎ澄まされる感覚を感じていた。登竜門とは、こういう意味だったのか。多数で畏と閃光玉を四六時中使い回し、もがくだけの命を奪うのと、はるかに違う感覚。彼は狩りを知つた。

焦げ臭いスティールメール。イアンクツクのずたぼろの嘴を担いで農村に帰れば、それはもう拍手喝采だった。幾度か見たことのあつる、脅威が去つた後の人々の安堵の面々。それはギルドのクエストと大差ない。違つたのは、義務的な喜びではなく達成感のある充足。

帰るつもりもなく、かといって行く宛もないので、いい手当てをしてくれる村人に甘えて寛いでいた晴天の午後。今にも倒れそうな娘が村に来たと、彼の世話になつてゐる家へ慌ただしい報せが舞い込んだ。

彼は客人を招く決まりのある一家に居着いていたため、娘が担ぎ込まれる瞬間に立ち会つた。

妹が、まるで手入れをしていないような汚れた髪で、ぼろぼろになった着物姿で運ばれてきた。

レイにい……？ ママとパパが……。

予想だにしない顛末。自らが迷惑を掛けまいと、正しいと信じた結果。

世は、必ず人間を幸せにするとは限らない。

のちに、レインは妹のシルベット・ドグマ・アグノイヤと共にライツ山へ身を隠す。

いつしか世を正そう。妹だけは渡さない。遅すぎる決心だが、無駄にはしない。

それから、レインの正義は人にもモンスターにも、等しく裁きを下した。怪しい気配を醸す者がいれば、不義を行っていないくとも無差別に斬った。大国から目をつけられることも構わず いや、そちらが目的かも知れない。すでにギルドナイツという偽りの勧善懲悪は機能している。挑戦状を叩きつけた。

どこで道を誤ったのか、彼はモンスターと同じ化け物にしか見られなかった。すべてを等しく敵と見なすその様から、山野の狂犬と呼ばれるようになるが、それはまた時が経ってからの出来事。

そのレインが、エイスの目の前にいる。

「なぜここに？」

「アナライザーのお導き、とでも言おうかな」

エイスの問いに、影断の血を払いながらレインが言う。

アナライザー。それはグレースを旧くから知る者のみ発言を許される禁忌。当然エイソンは口にしない。自分にも同じような禁忌がある。暗黙の了解。

「グレース嬢はすごいな。全部お見通しだ。わたしの考えもベツケン君の考えも、全部」

エイソンに同意を促すようにそう言い、鞘へ刀を納めて砂に伏すインゴットメールを一瞥。

自らが統括する組織の組員の名を覚えている。武装商人はやはりレインの差し金。ただ、レインは武装商人の考えと自分の考えは別だと言っている。

商業に力を入れるレインが、替わりがいたとしてもまさかその軸である商会長を消そうとは思わないだろう。ともすれば、ベツケン は独断で行動したということになる。差し金ではないはず。

どこか煮えきらないまま、エイソンはヨハネス父娘の拘束を解くために馬へ駆け寄る。

暑さにやられたのか馬は熱砂に横たわったまま、目を閉じぐったりとし、父娘もまた同様だった。

使い道が正しければこの上なく便利なネンチャク草は、今は厄介な拘束具。幸い、尋常でない汗が接着面に伝って幾分取り外しやすくなっていた。

きつく結ばれた縄を、痛みに震える手で包丁を慎重に沿わせて断ち切る。鐙に固定された足も自由にしたり、縄が綻ぶと同時に、エイソンの胸へ抱き付くシエル。

「怖い、怖いの！」

これはこれは、大分参ってるようだ。だが、ちょっと強いな、傷ついた体と骨に響く。

クーラードリンクを飲んでいない少女に、この砂漠も、これからの悪夢も堪えるのだろう。

「エイスン、私はどうなるのですか……？」

見かねたシルベットがどこか呆れた様子で、ヨハネスの縄を剥ぎ取りナイフで切り裂き解放する。

もともと頼りないが、疲弊を張り付けた顔はもはや病人のように青ざめている。

「だとよ、お・と・う・さ・ま。娘さん踏み台にして金稼ぐ気分はどうだ？」

「わ、わたしは望んでこんなこと」

どこまでも小動物を絵に書いたような態度。不謹慎だが、身体中を這う痛みも相まってエイスはあらんかぎりの憤怒を込めて叫ぶ。

「それがチキンだってんだよ！ 家族を捨ててまで自分を守りたいのか！」

「娘を想わない父がどこにいるのですか！」

これにはエイスンとシエルを含み、レインとシルベットさえも驚いた。これほど大声を出すヨハネスが、かつていただろうか。いや、いなかっただろう。おそらく、自分の殻を破ったのは 心からの本音を吐いたのは今のが初めてなのだろう。そこには、小柄で蹂躪される側の中年男はいなかった。

「隠していたが……わたしは商会長を降りる」

疲労からか告白の緊張からか、ヨハネスの呼吸は荒い。エイ孙の懷で、シエルは小さく声を漏らす。そんなの聞いてない。エイ孙さえそう思った。

「トリリアリスには、わたしの財産の半分を慰謝料として渡しました……。卵を買うのも、せめて最後だからとお願いして譲ってもらいました。ドグマ王様はご存知ですが、娘の面倒を見てもらうのを条件に残りの財産と、その卵を　でも、卵はもう」

そうだ。ティガレックスの襲撃は商人だけでなく卵も潰した。いや、肝心なのは、まさかヨハネスがそこまで大胆なアクションを起こしていたことだ。

故郷から勘当され、あまつさえ今暮らしている国からも身を退き、そうして娘を護ろうとしたのか。これがグレースの言っていた、取引の変更されたかもしれない点、か。何も告げず、ひた隠しにして穏便に済ませようってか。やはり今沈みかけている世界に足を踏み入れてはいけなかったな。

これで、いいのですね？　蒼黒のローブ姿の商人の意味深な呟きが、今理解できた。

これは、レインも知っているのか。気づかれぬよう横目に盗み見るが、狂犬は相変わらぬ表情だった。それは狂う犬の微笑み。掴めぬ心中。

「そっぴやその子、シエル。傷物だから」

エイ孙は、とっさにそう言っていた。

まずい、まずいな、ちょっと混乱してきた。まさか、まさかとは思うが犬っころの野郎、ヨハネスを締め出すだけでなく、手を

出さないと約束したシエルを……。約束を破るつもりか？ こいつなら、やりかねない！

「だからな、依頼料として俺が先に食ったってこと。残念だったな、初物じゃなくて」

促される訳でもなく口から流れる言葉は、自分自身の口から出ていると思えない、意外なもの。だが、自然と口から出たのは、ある意味正攻法でもあった。こいつならわかつているはずだ。俺が依頼を受けたなら、それに関わる者に手を出さない決まりになっていることを。すべての優先権は俺に委ねると、建国の際、交わしたことを。だが それすらとぼけて知らん顔しそうだ。ちくしょう、手を退け！

「ごめんなさい、お父様……でも、どうせ身売るなら」

「あーあ。なんか萎えちゃった」

シエルを遮るレイン。あからさまに不服そうだ。ピンと張った糸のような緊張が走る。

ヨハネスは狼狽えながら、レインへ弱々しく歩み寄る。

「ドグマ王様……？」

「取引は不成立ってことでしゅーりょー」

明後日の方向へ思いを馳せるレインの後ろでシルベットがため息。続いてあちゃーと呟く。

「卵は関係ないと、卵は商会長退任のカモフラージュと言ったのはあなたです！」

「ん。ああ、なんのことだっけ」

「そんな！ 話が違います！」

紅に変わる空。ヨハネスの心の色も、緊急を示す赤に染まっていた。

こうなれば王の特権とやらを振り回し、何を言い出すかわからない。例えば、商会長を辞退させた挙句飛竜の餌にするとか、シエルには手を出さない約束が彼の予定通り死ぬまで籠の鳥とか。

わざとらしく手を叩き名案を思い付いたときのように目を輝かせるレイン。

「そっぴゃあ、ここに二人来なかったか？ スティールとジャギイのハンター。あれ、イヌゴヤのハンターでな。実を言うと俺が向かわせた。しばらく前からこの砂漠でちょうどティガレックスの目撃情報があつてな。せつかく目の敵にしてる奴さんの商隊が来るなら面倒事といっしょに消しちゃえばいいってな。角笛持たせて砂漠に張り付けさせたんだが こっちのも失敗。表向きの取引に変更しようにも卵がなかったらどうしようもないわな」

狂う犬の饒舌なこと。先ほどの力強い父も、こうなれば形無しだ。ヨハネスでなくとも慌てずにはいられない。逆によくここまでやってきたなと誉めてやれるくらいだ。幼い赤子が初めて二本の足で立つのと似ている。

「本当に、本当に申し訳ありません……。許してもらえとは思っておりませんが、私は煮るなり焼くなり何でもしてもいいです！ですが、どうか娘だけは！」

「なーんかその嬢ちゃんにはいっぱい食わされたし、この件は取り消しだなあ。代わりに、今まで以上に俺の国に尽くせよ？」

それはお前もだろうが とエイズンは一人毒づいて、耳を疑う。今、なんて。前半はいい。後半、なんて言った？

「やれやれ、ホンマに気まぐれやなあ。あんたら運がいいで。レイニーがこんなんゆうの、天文学的確率やで」

「父の強さに感服だね。あいや、その嬢ちゃんの乳の強さとも言うかね」

にやりと悪質で不愉快な笑みの先、シエルは一瞬固まったかと思えばみるみる顔を真っ赤に染め、からかわれる種となった大きな胸を隠すべく、胸元で腕を交差させる。

いつの間にか、凍るような緊張が緩んでいる。そして、美しき夕陽。ハンターのみ見ることができる、最上の炎。

「貧乳ゆうたん誰や」

場に似つかわしくない、シルベットの小言。首を傾げるヨハネス、ベッケンを担ぐエイスン。そして、狼狽するレイン。青ざめた顔。ヨハネスの弱気が癌のように転移したのかと錯覚してしまう。

それにしても、この理不尽はデジャヴを感じるが……。

「今貧乳ゆうたの誰やねんコラア！」

「おい、誰も言つてな　ぶっ」

容姿以外に、彼らが兄妹である一面が垣間見えた。ブツ飛んでいるのだ。だが、それは長所でもなければ短所でもないのだろう。

彼らが狂犬と呼ばれる所以、破天荒で堂々とすることを常とする性分。

それは、ありし日のサリーか　。

レインの頬が赤く腫れてから、イヌゴヤ所有の馬車の迎えが。長居しすぎた。ヨハネス父娘が砂漠の熱砂に苦しめられることは、も

う二度とないだろう。

闇に包まれしタールドグマ。静かな街並みの中枢、城を模した屋敷の前の広場で、彼らは安息を味わっていた。すべてを知っていないが傍観に徹した。いや、じゅうぶん貢献した、グレースもいた。ベースキャンプは公式ギルドが設営の利権を持っているためそこには手出しせず、放置されていた御者とその馬、そして轢き潰された商人十数名を、イヌゴヤのハンターを総動員させて回収させた。まるで、この国には動員する者はいると、必ず見捨てないとも言うように。

ヨハネスとベツケンは一タールドグマの門を潜ると同時に医療所へ飛ばされた。本来ならエイスンも即刻治療を受け、ベッドに磔にされるべきだが、それはグレースの手一つで止められた。アナライザーの特権。代わりに、彼女はじろじろとエイスンを舐め回すように見つめ、首元に注射を一射し。

グレース曰く、秘薬だそう。事前に貯蓄していたのだろう。年に数回しか出回らない劇薬は活性成分が骨の再生を促進し、高濃度の栄養分が細胞レベルでの治癒力を高めた。おかげで、ものの数分でエイスンの体は痛みを追い出した。

見透すグレースは、彼が秘薬が必要になるほどダメージを受けることすら、見透していたのか。それは本人のみぞ知る。

松明の灯る屋敷の玄関。シエルはシルベットとなにやら揉めているようだ。しきりに、シエルからグレースへと視線を変えるシルベット。そして最後は自分の足元を見るように頂垂れる。やはり、気になるのだろうか。

「なあなあ。何食ったらそないおっきなるん？」

「は、はあ……」

「うふふ、恋人にあれやこれやしてもらいなさい」

返答に困惑するロマンチスト。いかがわしい提案を推すグレースに、シルベットは鼻を大きくして興味津々に聞き入っている。とりとめのない会話でなにより。

「にしても、一体どういう風の吹き回しだ？」

「思い出したんだよ。あの父娘は昔の俺そっくりだ。んで、俺はその時のクソギルドになってた」

女性の会話を交わす美女から少し離れた広場の中央、平らな円形の庭石に腰かける便利屋と国王。

「俺はなあ、アサシン。理想の国を作ったんだ。調和した国を。誰も見捨てられない、環に収まった平和を」

「おい。アサシンは禁句だ。慎め」

「でもなあ、あるとき言われたんだよ。レイにいのやってるのは暴力だよ。理由も聞かずにただ怪しいだけで斬り殺して、村を丸め込めて、何も平和じゃないってな」

聞いてないな、こりゃ。だが、エイソンは怒る気になれなかった。

「今回だつてな、ティガレックスを利用してトリリアリースに喧嘩仕掛けようとしたのは、不本意だったんだ。あいつがな、エポーサの家系は忌むべき魔女の血筋だって言うから」

「待て、あいつってのは、まさか」

「クリミナルクリア。咎負いサリーだよ」

急に立ち上がった。暗闇の中、レインには彼の表情はうつすらとしか見えない。その端正な顔がひきつっているとは、深紅の目が陰

しく細められているとは、わからない。

「ずいぶん前の話だ。ちょうどお前さんがドグマ領に来るちょっと前だ。マハヴァイルの魔剣士エポーサを処刑すべきだと。そう言われた。まあ、いくらあの咎負いの言うことでもさすがに信じれなくてな。今日まで悩み続けたんだが　結局俺は負け犬だ。危うく堕ちるところだった」

「そうか。でも俺はお前を信用してる訳じゃないからな」

「くくつ、安心しろよ俺はあんな下品な女タイプじゃねーからよ」
「どうだか」

「なににせよ、これで借りは大分減ったな、アサシン」

一時とは言え、自分に関わった女性をけなされるのはエイスンに不快な感情をもたらしたが　どこまでも読めないやつだ。深追いしないことにした。

少なくとも、嘘はついていない。それは、レイン自身がよく気を付けている。あの大国のようにはないと。

アフターも程無くして解散し、各々が帰るべき家に帰る。シルベツトはそのまま屋敷へ、なぜかレインの手を引きどこか楽しげに。グレースの助言ならぬ呪文に、触発されたのかもしれない。察したのか、レインはできうる限り足に力を込めて抵抗したが、猟犬の前には狂犬はただの仔犬だった。

マハヴァイルの妖艶な街道。ヨハネスの豪邸の前にて、グレースは門へと消える。なんでも、急にワインが飲みたくなったのだからそこは他所の家だぞ。下手な気の利かせ方。

「依頼人よ、大分やわらかくなったな」
「え？」

「じゃじゃ馬みたいな物言いだったが、ずいぶん落ち着いたな」

エイスンを見上げるシエル。黄金の鎧が松明の炎を映してゆらゆら輝く。

同様に、空色の瞳も燃えている。風が彼女の金色の髪を撫でる。

「あなたが、私の初めての人でよかった！ 世の中の幸せは、たくさんあるんですね！」

「身売るつてのは、それも俺のようなロデオボーイに先行販売とくれば翌朝には腰と女の子が痛むんだよ。んで、痛むか？」

どこか諭すような口調。ティガレックスから逃げたり閃光玉から父が身を呈して目を守ってくれたときに、確かに腰を打ち付けたりはしたが、言われて気づいた。たしかに“そういう”痛みはない。

稲妻に打たれたように、気づく。

そういえば宿屋でエイスンの鎧を初めて見たとき、なぜか水滴がついてたけど、普通あんなの着て入浴しないよね。

優しい人。こんな人がいるなんて思わなかった。いえ、昔から私の傍にいた。お父様は変わらず私を愛してくれてる。ただ、私が忘れてただけ。

「そういえば条件を言ってなかったな ほら、依頼は引き受けたが先行販売を引き受けるとは言ってないし」

「ええっ！ そんな、どうすれば……あ、お金ですか」

「かわいく、美しく、そんでもって幸せになること。それが条件」

遮られてまで聞かされた言葉にぽかんと呆けるシエル。しかし、何か思い出したように顔を俯き、胸の前でもじもじと両手をすり合わせ、はにかむ。

「あの、その。だったら今度は、ちゃんと、食べてくれませんか…
…?」

「チキンは嫌いだって言っただろ」

赤みを帯びた頬で彼を見上げるシエルは、つっぱねるような物言いにびくりと体を震わせ、悲しげに目を伏せる。はしたないと思われたかな。でも、そんな簡単に言っただけでもないんです…。

そんなシエルを見かねて、エイズンは星空を見上げた。特に何も思い付かない綺麗な夜空。黄金に光る碗甲に包まれた腕が、顎に手を当てる。

「そうだな、強いて言うなら」「不意にシエルに顔を向け、微笑む。「生肉さえありゃあ、じゅうぶんだね」

かなわないな。

シエルの小さな可愛い唇が開きかけ。

「依頼を受けたからには、きっちり報酬を受け取ることも仕事ですよっ?」

その声に、二人同時に振り向けば、門から突然グレースが姿を表す。酔っ払っていないだろうが、そうとも言えない。

時間にして数秒、微笑むグレースの意図を読み取ったエイズンはシエルに向き直り、その華奢で白い肩を掴む。

「よっし！ んじゃ行くぞシエル。チキンにやちときつかもしれんぞ?」

「ま、まだ心の準備が……」

酔っているのはエイスのほう。言い分を変えるのは、彼らしくない。だが、それでもいい。彼女はそう思ったが、エイスは肩から手をどけると宵闇の街道を走り去っていった。

本日、いやこの数日間何度目か、呆然とするシエル。

どこかから地鳴りが轟く。シエルの背筋に冷たいものが走った。窓から覗く濡れた牙が、忘れていた感覚を呼び起こすあの響きが、静寂を切り裂く。

松明に照らされて滑るように街道を走るのは、あのロストテクノロジー。こんな夜更けに、近所迷惑だとは思わないのか。

軽快な音と共に、シエルの前で悪夢へ誘う扉が停止した。しかし天界への階段とも思える。ロマンチストはドキドキしながら手を伸ばすが、彼女が乗り込む前に唸りをあげる。体験したからわかる、発進の前兆。そして、あやまたずロストテクノロジーは動き出した。グレースは相変わらず微笑んでいる。エイスのことを理解しているのだ。同じね、エイスン。女心がわからない人。でも、確証はないけれど、そんなあなただから便利屋を続けられるのかも。同じね、こうやって柔らかく拒絶されたのも。それは嫌な拒絶ではない。シエルは今それを身に染みて感じていた。

「ずるいですよ……。でも、ありがとう」

小さくなりゆく光。車体後部の左右の小窓が数回点滅して光った。あばよとも言っように。

願わくは、彼とまた会えますように。

シエルは目を閉じ、微笑みながら、そう思った。

* ライナーノーツ

A business chapter,
Cut off flesh & amp; Insight sm
ith.

character's

「生肉さえありゃあ、じゅうぶんだね」

《肉切りエイスン》

性別：男

年齢：不詳

容姿：ミディアムショート黒髪。

切れ長の目。充血したような白眼に真紅の瞳。

白肌。そこそこ筋肉質で長身。

ダボダボの黒コートの下には黄金の女王竜の鎧が隠されている。

詳細：コードネームしか判明していない便利屋。

ドグマ領内では有名。

ロストテクノロジーの自動高速移動機を所有している。

「そうなる運命なら」

《シエル・エポーサ》

性別：女

年齢：十八歳

容姿：鮮やかな金髪。毛先の色が濃く、若干癖がある。

大きい目に空色の瞳。

低身長だがスレンダー体型。大きい胸が若干コンプレックスらしい。

普段着はロングスカートとキャミソール。

詳細：食材商の娘。

気丈なロマンチスト。

マハヴァイルにて人身売買を強要されるところでエイスン存在を知り、助力を乞う。

「あら、それが当たり前なのよ」

《見透しグレース》

性別：女

年齢：不詳

容姿：胸まで到達する赤褐色の長髪。珍しい黄金色の瞳。ドレスが映えるグラマラスボディ。足長の長身。

詳細：コードネームしか判明していない刀鍛冶。シエルにエイスンの存在を教えた張本人。エイスンとは腐れ縁のようだが……。

「娘を想わない父がどこにいるのですか！」

《ヨハネス・エポーサ》

性別：男

年齢：四十八歳

容姿：小柄でふくよかな体型。

金髪だが、数年前から頭髪が寂しくなり始めた。

昔は風にたゆたう長髪で、貴族風の美男だったらしい（要検証）。

詳細：食材商。

二つの国の商會を束ねていたが、国際事情の緊迫により商會長の座を追われることに。

「知ってるか？ モンスターは狩るだけの存在じゃない」

《クリストファー・ベッケン》

性別：男

年齢：三十歳

容姿：長身でそこそこの筋肉質。

短い茶髪。いつも睨んでいるような細い目が印象的。
インゴット一式装備、鬼薙刀が狩猟具。

詳細：ドグマ狩猟連盟（通称イヌゴヤ）の専属ハンター。
武装商人として取引に参加。

執拗なまでに商業に力を入れるドグマ政治に反感を持っている。

「あーあ。なんか萎えちゃった」

《レイン・ドグマ・アグノイヤ》

性別：男

年齢：三十歳

容姿：暗い金髪。全体的に短いが、襟足は結べるほど長い。
よく鍛えられた肉体。

普段からジャギース装備で過ごしている。

詳細：リエムドグマの国王であり、イヌゴヤを統括する狂犬と呼ばれるハンター。

目的のためなら簡単に命を切り捨てる。

「貧乳ゆうつたん誰や」

《シルベット・ドグマ・アグノイヤ》

性別：女

年齢：二十六歳

容姿：暗い金髪のロングストレート。

長身でボデリラインが美しいが、母性の象徴の発達が芳しくないのが悩みだとか。

普段の姿はホットパンツにショート丈のワイシャツ。

兄とお揃いのジャギース装備。

詳細：タールドグマの女王であり、レインの妹。

怒りっぽい。

非常にしたたかな政治力を持ち、若いながらもイヌゴヤ（＝兄）や商売を滞りなく仕切っている。

please

*【野山】Raid mount・ライツ・・・model・溪流（MHP3）&森丘（MH）

ドグマ領内の数ある山の中でも、特に大きな山。

美しい森林と荒々しい山野が特徴。標高約3,100メートル（イヌゴヤ調べ）。

山頂付近に位置する村はライツと呼ばれており、腕の立つハンターが数名在住している。

村には双雷獣の伝承が伝わるが、最近、伝承に登場しない蛍火の狼の目撃情報が相次いでいる。

＊【眠らない町】All night・ア rilニア

ライツ山の中腹のなだらかな丘陵地を切り拓いてできた町。

姉妹都市の中間に位置するため、物品と情報を往来させるパイプラインの役割をしている。

町の中心にある大きな酒場はあらゆる職種の人間が集まり、町のシンボルとなっている。

人情溢れる町。

＊【魔法使いの町】Mahar wairo・マハヴァイル

ライツ山の下腹部の森林を切り拓いてできた町。

かつて平原に巢食う悪竜を剣と魔法で追い払い、町を創った魔剣士の伝説が残る。

信憑性に欠けるため、伝承はあまり知られていないが、一部の家庭ではお伽噺として枕元で語られている。

小さな工房があり、狩人や王国騎士のための武器の製造も承っている。

今も魔剣士の血筋が引き継がれている家系があると言われているが……。

＊【狂犬の都市】Rain dog・リエムドグマ

王国。

狂犬と呼ばれる、今なお現役のハンターが王位につく武装国家。国家の発足から日が浅く、山付近の町を半ば強引に統合した。領土は小さいが、商品流通に領内のみを使い綿密な連携をとる。

それ以外の国の領土からの干渉を拒んでいる。
領土はア ril ニア、マハヴァイル、ライツ、タールドグマ。

*【猟犬の都市】Soludog・タールドグマ
リエムドグマの最重要提携都市。

山を挟んだ一帯の地域は二都市の領土。

ドグマ領で唯一他国の干渉を許している都市。
また、私設のハンターズギルドが設置されているため、ドグマ領最大の活気を誇る。

二都市共に敵対国が多く、国際連合の正式ハンターズギルドすら敵に回す。

ただし、緊急時にはなりふり構わずに協力し合うことがある。

*【平原】Dog plain・ドグマ平原

タールドグマの近隣に広がる、広大な草原。

至るところに材質不明のオブジェがある。古代の住居の一部だとか、世界の学者間で様々な説が飛び交っている。

オブジェの群の中にはそれらが山のように連なる一際大きなものがあり、そこには飛竜の巣がある。

過去数回、ロストテクノロジーが発掘された。

*【荒砂地帯】Fusty plain・ボレア砂漠・・・model, 砂漠(MH2) & amp; 旧砂漠(MH)

昔は緑の続く豊かな国だったとされるが、今は見る影もなく枯れ

た大地と砂が広がる地帯。

オアシスすら渴れきっているため、生息する生物は限られている。既にボレアという国は滅び、荒んだ土地をわざわざ買うことも敬遠されているため、正確には領土権は宙ぶらりんの状態。

一帯の人々にとっては古くから馴染みが深い呼び名のため、呼称に変化はない。

荒野と砂漠で生息モンスターが異なる。

n e x t s t o r y . . .

A i n i t i a t i o n c h a p t e r ,

D i v i d e t h e s e a .

c o m i n g s o o n .

1・放浪霧中（前書き）

ここより儀礼篇です。

1・放浪霧中

「おい、いい加減帰らないか」

彼は言った。それもそうだった。霧深き地。視界を白で埋め尽くす湿地。吸う息が口腔に張り付くような不快感。

彼はパートナーと一緒にクエストの受諾書にサインし、沼地の暗殺者なるモンスターを狩るためにバルト渓谷へ来ていた。

極限に視界の悪い地での対人戦を想定した演習中、それが忍び込んだらしい。暗殺者とはナルガクルガの意であり、発注者の演習部隊指揮官の証言により明らかとなっている。

紅く光る残像に注意せよ、とのことだ。しかしそれも難しい。ただただ白き世界には色などありはしない。濃い深緑の木々すら霞む世界。正直甘く見ていた。バルトの湿地帯、別名陰陽霧中。

「もう少しだ。せつかなんだからお前も見たいだろ？」

彼を先導する赤い鎧の男が言う。火の精霊を模した赤き甲獣の鎧は幸い、全てを濃霧が呑み込む地で後ろ姿を見失わない目印となった。赤は比較的目につきやすい。ハンターメールをがしやがしや鳴らしながら歩く彼は少し安心する。

つまりもうひとつ赤色が現れたときが口火を切る瞬間だということ。絶望的にアウェイなわけではない。

ラングロトラなる牙獣は乾燥地にのみ見られる。赤い鎧の男とそのパートナーは湿地帯に来る事自体初めてだった。なにせ有数の死

地である。ハンターにはこの上なく不快で、致命的なほど視界が悪い。

このバルト溪谷は、リエムドグマの大陸から海を隔てた、程遠い熱帯の大陸にある。熱帯とはいえ、じめじめした湿気というよりうすら寒い湿気である。留まらず常に流れる、砕かれた雨の冷たい霧は砂漠の夜にも匹敵する冷気を放つ。それでいて、実感しにくい湿気により生物の果実や魚類は瞬く間に腐る。

実地で食料を手に入れようとは考えないほうがいい。少なくとも、知識に長けたハンター以外は。

それは相反する性質の融合、じめじめするはずの湿気が保存に適しているはずの低温であるために起こる死の環境。これまでにバルト溪谷に立ち入った者が、例として　ケルビを見たことはない。ただの一度も、一匹さえも。

そこは静寂の土地であり人の領域ではない。

溶岩に浸かるだけで死亡する、究極の地獄である火山を渡り歩いてきた彼らにすら、同等の危険度と思わしめる人ならざる者が棲まう谷。

「でも、本当にいるのかな。妖精なんて」

「黒き神だとか幻獣がいるくらいだ、ティンカーベルの一匹や二匹いてもおかしくないだろ」

パートナーのジョークに、後続する彼は肩をすくめる。もっとも、本当に言葉の通りだから答えに詰まってしまふ。

目的から逸れつつある彼ら。否、紅く光るティンカーベルを探そう。ありもしない空想を頭に巡らすことで平常心を保とうとしている。

平常心を保つことがいかに重要で難しいことであるか、霧の溪谷

に迷い込んだ者にしかわからない。まだ霧に入り込んでから半日も立っていない午後、状況は一向に変わらない。自らの足元すら霞む白き世界。歩いている感覚は、自分の足なのに自分の意思で動いていることが確実に言い切れないと錯覚していてよくわからない。時折吹く冷たい気流だけが唯一向かい風になってくれる。確かな前進を感じさせてくれる。

このサイレントワールドには、目印となるような目立つ物は霧とこういったずらつ子に隠されている。歩く内、何度木にぶつかりそうになったことか。平行感覚も良好とは言い難い。

普通なら何か物体が近くに迫ると独特の重みを感じるものだ。閉塞していく道、崖淵に立ち見下ろすことときに感じる身の軽さの真逆。

ここでは物質が放つ存在感すら薄まっている。霧は濃いのに薄まるものがあるとは変な話。地図は役に立たない。もはや、危険という意味ではどこでも一緒である。薄まった存在感という衣を纏った暗殺者に出くわす前に、飢えて生き絶え、終焉を迎えることもあり得る。

湿地帯に踏み込んでから、気配という気配が感じられなかった。ただ一つ、居場所の掴めぬ遠くから木霊する梟の緩慢な声が正気を保たせてくれる。

ホウホウ……。ホウホウ。

いつの間にかその声の間隔が十秒程度と知った。これはよろしくない兆候だ。張り巡らせるべき注意を景色から逸らしている。仮に赤い光が現れたとして、この逃避症状の起こっている内は柔軟な対応ができないことが多い。

歩みが織り成す、水をゆるく跳ねる音が相変わらず不規則に、二人の間に鎮座している。

ハンターメイルの足甲は泥水で溢れていた。彼は気づいていないが、確実に体温は下がり体力もそれに伴い急激に消耗していた。す

なわち、クエストの成功率が著しく下がっていることを意味している。

バルトの湿地帯で恐れられるのは環境であることは言うまでもない。とにかく不快なのだ。抜群のコンディションでないとき 例えば風邪をこじらせているときに何か集中する行為をしようとする、間違いなく普段の半分以上の結果に終わる。

それを強制的に強いられる場所こそが、呼吸すら億劫にさせる深い霧のバルト。よくこんな場所で演習を、気が知れないぜ。悪態ばかりが思い浮かぶ、蝕まれつつある平常心。

ふと、赤いラングロメールの男が立ち止まった。

パートナーはとっさに腰のオデッセイに手をかけていた。急ターンして戻ってきた警戒心。白の中にもう一つの赤が混じっていないかを、眼球のみ高速で動かし確かめ、梟の声を意識しないように耳をそばだてる。

ホウホウ。

「……何か聞こえないか？ 水が弾けるような、雨みたいな」

赤いラングロメールと同じ素材の蛇腹のハンマーを構えていた彼は、そう呟くと武器をおろす。

異変と呼ぶにはあまりにも極小で些細。だが、二人は歓喜に震えた。やっとこの変化のない平行線から抜け出せる、抜け出すきっかけになる。

自然と早足になった。雨音のする方へと、本能のままに突き進む。

些細な変化を口にして、それに向かって希望を見出だしてから、あれほど閉鎖されていた状況ははつきりと変化していた。平坦だった道は下りに入り、濃い霧は目に見えてその呪縛の白を森の濃緑へ

変え始める。そこにあつたはずで今まで見えなかった針葉樹の群れが姿を表し始めていた。頭上すれすれで生い茂る黒い葉に、よく今まで気付かなかったものだ、呆れすらした。

ぬかるんだ泥が腰のあたりまではねていたが、二人は気にしない。それもそう。さらさらした小雨が降り始めている今、洗い流してくれると信じているから。霧は雨から生まれた副産物。絶え間ない降雨のリズムがあるからこそバルト溪谷は湿地帯と化している。

霧の発生源に近づくほど副産物が薄まるとは皮肉な話だが、二人はそんなことを考える余裕もなかった。とにかく変化が恋しい。

針葉樹の群衆が道を譲るべくして拓けた。

そこには湖があつた。長い年月、降り続けた雨が窪地に溜まり、今もぽつぽつと水面に波紋を打ち出している。

対岸は今なお健在する霧で見えなかった。だが、その分岸边の様子が目につく。

睡蓮の花が見事に咲き誇っている。桃色の花弁が岸边いっぱい。ジョークのつもりだったのに、ティンカーベルとやらがいてもおかしくない幻想的な雰囲気、二人は肩を竦める。

幻想といえはこの湖がそうかもしれない。そもそも霧に包まれたバルト溪谷に立ち入ること事態が夢へと向かうことも形容できるならば、夢の中で見たことはしょせんは夢。空虚で空っぽな意味のない湖。

柔らかな雨が降りしきる盆地。左右にそびえる、壁のごとき山肌には針葉樹は生えていない。地滑りが削ぎ落とした木々は無惨にも湖面から顔を出している。もはや溪谷とは言えないなんとも悲惨な光景。

その墮落の谷に、二人は信じがたい存在を見た。

睡蓮の花々に抱かれるように、人間の上半身が水面から突出して

いる。誓いのヴェールを思わせるレースの垂れ幕が頭全体を覆っている。まるで花嫁のよう。景色に溶け込む暗緑色の長髪は後頭部で一束ねにされ、どれほど長いのか、湖へ沈んでいる。

もう見たくもない白色の悪夢の空間を思わせる、水に濡れて透明度が増した白の絹衣の後ろ姿。両腕を水平に掲げ、広い袖口が湖面すれすれで揺れている。

オデッセイにかけた手を、思わずぶらりと無気力に垂らし、彼は一目見て、まるで儀式のようだと思った。万人に問い質しても一致した答えが帰ってきそうだ。何より場の雰囲気にあてられるはずだ。

しばらく二人は黙って湖畔に立ち尽くしていた。まさかこんな辺境に人がいるとは思わなかったのだ。

赤い鎧の男は声を掛けるべきか悩んでいた。それは紳士的な感情ではない。

水に濡れた後ろ姿は薄い衣のせいで素肌が透けて見え、衣服を着ていないのと同義だった。眩しいほどに白い背中と張りのある尻が目を釘付けにした。

こんなところにいるくらいだ、期待してんのか？

美しい容姿と辺境であることが災いし、やましい考えが沸き起こり精霊を模した赤いマスクの下で笑みを浮かべる。

「赤色と鈍色の殿方。悪いことは言いませんから早々に立ち去って下さい」

二人は咄嗟に後ずさった。泥が滑る感覚が足の裏に張り付く。いまだ後ろ姿が水面から生えているだけで、一体どうやって容姿を把握したのか。ますます恐ろしさが募る。

水平に掲げていた腕をおろし、ゆっくりと振り向いた。

ヴェールが鼻辺りまで垂れているせいで顔の半分以上は見えなか

ったが、ぷつくりとした桃色の唇から、牙が覗いている。妖艶に微笑み、並びの良い歯をちらつかせて二人をヴェール越しから見つめていた。

真正面からの立ち姿は、とても美しかった。透けた衣は白くたわわな乳房を露にし、秘部さえも布越しにうつすらと見える。

固唾を飲み、ラングロメールの男は覚束ない足取りで岸边に近づいた。おい、何かおかしいぞ！妖艶な美しさに気を保つことで精一杯のパートナーが制止させようと声を上げるが、彼はハンマーを手から離し、まるで聞こえていないようだ。

「ああ。わたくしは止めたのに」

凄まじい水飛沫が湖の中心付近から上がった次の瞬間、ラングロメールの男の首が飛んだ。パートナーは見た。凝縮された高圧の水のレーザーが横薙ぎに宙を裂いたのだ。

巨大な翼を広げ、冠を頂く竜が水面上に上半身を出している。紛れもなくガノトスだった。だが、なんだあれは。

「角！？水竜にあんなのある訳が」

ハンターメールの胸部に風穴が空いた。

白い袖口がはためき、暗緑色の髪がふわりと浮かんで彼女の真横の睡蓮が弾け散った。

口を開けたまま、貫かれた鎧に走る亀裂により割れた鉄板が飛び散り、彼はぬかるんだ泥に倒れる。

ヴェールを被る女性が岸边に向かって歩き出すと同時に、ガノトスは湖を揺るがしながら水中へ身を翻した。

「ああ。また犠牲者が」

ヴェールを持ち上げ、翠緑の瞳で赤い精霊の生首を見つめる。
彼女の翠緑の瞳に宿る、竜が持つはずの縦長の瞳孔は憂いに濡れている。

相変わらず霧の濃い平地にて。

どこでも昼夜問わず迷宮のバルトで、そこにも迷える子羊がいた。
この辺りでは不定期で神出鬼没な雨はまだ現われておらず、普段と
なんら変わらない。

ただその容姿は羊毛の白ではなく深紅の血の色をしている。滑らか
でなおかつ肌触りは吸い付くような稀白竜亜種を具現させた意匠
が全身を包み、ぬかるみを踏みしめる足取りすら軽快そのものだ。

「さて、木も少ない。道幅は……狭くなりつつありますね」

誰がどう見ても白い世界で、彼は見えていた。

視力がとりわけ良い訳ではない。彼は輪郭を見ていた。

物体の全体像ではなく、物と物の境界線に生じる微々たる色の変
化で、そこに何かあるのかを想像する。目線を横にスライドさせる
中で、色が変化した瞬間そこからは限りなく別の存在があるという
こと。

当然、白い景色に白い別物体があればその理論は崩れるのだが、
かといってそれを警戒してばかりは話にならない。沼地ならば、泥
と焦茶色の木、鈍色の大気の識別ができればじゅうぶん。

彼の言った通り道幅は狭くなり始めていた。見えなくとも、彼に
は物体が放つ独特の重みがわかる。それは木などではない、土が持
つ母なる存在感。

左右で、土が高くなり始める感覚。否、道が下りへと傾いている。
高い位置を漂う気体の一つである霧が、歩を進める内に薄まってい

く。

真上から見れば谷のようでもあり溝のようでもあるその道は“霧への道”と呼ばれている。

霧が薄まっっていくのに霧へ向かうと呼称されるのは、そこにミストと呼ばれている町があるからだ。彼は深紅の上掛けの胸元から地図を手についた。地図上では細い道は数ヶ所記されているが、下りのマークが付いた図は一つ。今彼はそこにいる。

左右の壁が開けたとき、そこに集落が現れた。

地図では楕円状に大きく開けた空間で描かれているが、いざ人間の目で見てみれば立ち込める霧が面積を取り、その空間を小さく見せていた。

道中の不明瞭な視界も、ここではいくぶん緩和されてはつきりが見えた。宙を埋める霧は淡いクリーム色だった。彼の立つ両脇に、黄色く光る鈴蘭の型をしたランプが立っている。

これは集落の至るところに設置されているのだろう。

光は水に反射する。きめ細かい水蒸気と言うべき霧は、小さな光でも拡散し本来の小さな明かり以上の明るさをもたらしていた。

まず初見で見渡してわかったのは、この緩い大地に立つ家は皆歪な形をしていたこと。湾曲した側壁に打ち付けられたウッドデッキはきちんと地面に平行になっていたが、建物自体は、太くなって表面が木板なだけの木を彷彿させた。

少し目線を上げれば輪郭がかるうじて見える、村の奥にあると推測される水車は垂直な造りだが、回転に耐えるためか斜めの添え木が幾本も支えていた。音もなく緩やかに回転する様は不気味である。

彼が初めて来たこの町に抱いたのは、寂しさに他ならない。

一応、廃村ではないことは入り口付近で確認できた数ある住居の

中でも、真新しさの際立つものが見られたことでわかった。だが、今世界で流れている時間は昼間。本来なら太陽が輝き人々が活発に活動する時。子供一人も、家畜の鳴き声すらないとは。霧は陰鬱なる幻想の代物だと言われるが、霧に隠されることがあってもまさか拐われるというわけではあるまい。

この谷は地学的に言えば地表より下に位置するためまだ湿気の少ないほうで、歩いたとき足の裏が滑るあのどろどろのぬかるみの感触は、ここでは土の本来の固さを少しだけ取り戻していた。

住居は、楕円状の谷の両側壁に沿うようにして建てられていた。中央の通りはがらんとて整備されていない大通りである。もちろん、整備する気がないわけではないだろう。いくら整備しようが永遠に立ち込める湿気に、踏み固めた道が一晩の内に元のぬかるみに変えられてしまうのだろう。

足が少し沈む程度の道をしばらく歩いてちょうど谷の底の中心にきた辺り、彼は何か巨大な存在感を感じ取った。

右を見ても左を見ても、薄い白に包まれた歪な家がぼつりぼつりあるだけで特筆すべき何かが有る訳ではない。

彼は道を外れて住居の一つに近づく。

遠巻きからでは霞んでいた細部は、あまりに痛々しい。霧がもたらす通常の倍以上の湿気が、木材を傷めていた。カビや菌類、昼夜の微妙な水分の増減からの縮小による裂傷。住居に懸念される致命的な弱点がすべて凝縮されていた。

窓にはカーテンが引かれている。中から灯る明かりはない。

昼間だから無駄な燃料を使うことを敬遠すべきなのは当たり前だが、この地に至っては太陽が遮られているから、昼に燃料を使い積極的に活動しなければエネルギーの採算が取れないはずだが。

まるで人の気配が感じられない。

「すでに移った後か……？」

彼はランプの明かりのことを踏まえ、それはないと自決する。ただこの住居は人が住めないと判断されただけだろう。

だが、確かに感じたのだ。

天を衝くような、大きな存在感を。

しばらく呆然としていた矢先、風が流れ始めた。霧が一つに集まるように、大通りを吹き抜けていく。住居の間に漂っていた霧も大通りの大流に引き寄せられるように繋がっていく。

霧を追うために視線をさ迷わせる内、彼はどこか自分が取り残された感覚を味わう。

谷が本来の色を取り戻しつつあった。所々に綿飴ほどの微量の霧がふわふわ漂ってはいるが、はるかに明瞭さを取り戻して現れた谷の全貌に、彼は度肝を抜かれた。

「ほう。これはなんと」

歪な住居の屋根にあたる部分から、これまた歪な形の柱が延びていた。

その柱は武骨でしなやかな表皮を持ち、劣悪な環境を生き抜く強度を有する枝である。

人間を二人並べてもその姿を隠すほどの太さの枝が、点在する家々の屋根から天へ向かって延び続け、蜘蛛の巣のように一つに集約されていた。

谷に架かる架け橋と言うべき、大木が天に浮いていた。谷を吹き抜ける掃風は風の通り道として頻繁に起こるが、大木の浮く位置は地表に広がる森と同位置の高さにあるため、いまだに霧が深い。

歪んだ住居は、大木の根を大黒柱の芯柱にしたためにそうなっていたのだ。そうすることでこの楕円形の谷を水没させずに人の域に止まらせていた。

大木に関わらず、木が根付いた地は土壌がしつかりする。湿地帯でも、ある程度住居の建築が期待できる。

大木の幹にあたる部分には、根に宛がった家々とは比べ物にならないほど大きく美しい邸が一つ、洋式の振り子時計のような長方形の形で張り付いている。

邸も去ることながら、神話に登場するユグドラシエルを思わせる素晴らしい大木は、生命の神秘とも言うべき旧き生き物である。

彼は秒を越えて数分間見続けた。自然を生かし、傷つけずに連鎖反応を起こして美しさを増したその調和に感銘を受けさえする。

絵画でこんな絵があつたなと思い返し、彼はその懐旧の余韻に浸る。

だが、そのせいで谷の変化に気づくのに遅れてしまっていた。人の気配である。動物とは違う息遣いや二足歩行の重みが彼の背に寄ってきている。やけにゆっくりしたりリズムであり、弱々しくもある。

彼の背にはくすんだ棕色をした竜骨のスラッシュアックス、ダイダロスが無言の圧力を放っている。

気配との距離はわからないが、今も近づいてきているのは確かだった。深紅のフルフルメールのシオルダーマントによく映えるダ

イダロスを片手で肩越しに引き抜き、即座に変形機構を解放し、刃の型で構えて背後に振り返った。

同時に、気配の主はひどく驚きながら立ち止まる。絹の衣服を纏う老翁が両手をあげる。

「お待ちを。この町の住人でございます。あんた、このような地に、如何なる目的を？」

ただの町先案内人。彼は刃に繋がる変形機構の起動キーをオフにし、同時に刃の形を作る機構の圧力が抜ける。ダイダロスは二つの刃に別れ、それぞれが対になる両刃になりながら、柄の真上に収まった。

彼は老翁の姿を観察し、いつでも距離を取れるよう下半身に力を適度に加えながら、ダイダロスを元の背中に吊るす。

「いえ。わたしはただの旅人です。霧深いバルトに人が住んでいると聞いたものですから」

「左様か。ならば、今すぐに立ち去りなされ。ここにはあんたの想像通り、ただ人が住んでおるだけ」

皮肉を交えた突き放す言葉。老翁の目を見れば、それは眉をきつく寄せた不快なる怒りの面であり、まだ言葉は柔らかく弱いものと察する。

「そうですね……しかし、行きは追々。手荷物は持たず、帰りの英気を養うためここで世話になろうと考えましたが、それでは仕方ないですね」

老翁の横を通りすぎ、彼は細い上り坂へ向かい歩き出す。
いわば門の役割を成すランプの間に来たとき、老翁が彼を呼び止

めた。

マイペースなのか腰がもうダメなのか、やけにゆったりした足取りの老翁。

「ここは複雑な地ですからな。あんたの言うことも汲んで最高一週間は過ごすことを許しましょう。その代わりあの大木には間違っても近づかぬよう願う」

彼はその旨を了解し、頷く。

おそらくだが、村長と思わしき老翁は何か不都合を隠している。

来た者全てに等しく拒絶を示すのかもしれないが、この過疎具合は見過ごせるファクターではない。なにより、わざわざ禁止事項であの目立つものに近づくなと言った。宙に浮かび、辿り着くには根を這い上げなければならない不落の城に、誰が近づける。

老翁が、世話になる住居を用意すると案内役を買った。

だが、時が来たようである。この地に棲む者しかわからぬ白き闇の訪れ。徐々に霧が濃くなり始める。

老翁は、自分は目が悪いから霧が濃くなると何も見えなくなると言い、深紅の来訪者は案内人の権限を添えた言付けだけ聞かされた。世話になる家を教わり、それで老翁は早々に霧に消えていった。

彼が向かったのは、人の生活感を感じなかったあの苔に蝕まれた住居だった。今なお暗き窓を手の甲で叩いても動きを感じられない。

窓の付いた木の扉が唐突に開いた。全くと言っていいほど予兆がなかったため、彼は開く扉に体をぶつけそうになる。半分ほど開いた扉の隙間から若い女性が顔を出した。

「どなたです」

「老翁に世話になる場を教えていただき、あなた様の家と言付けをもらいました旅人ですが　この家は歴史が深いのですね」

「ええ、古くから私の家は旅人をもてなす決まりにありますので。粗末ですがどうぞ」

「滅相もない。失礼いたします」

いくらか気配を読むことに長けた私でも人がいたのがわからなかったのは面白いが、それよりも彼女は変だ。やけに慣れているというか、適応しすぎている。

このミストの町は、あまりにも辺境にある。地図にはこの楕円の谷が載っているだけでその他には町を示す記号は一切ないのだ。

旅人が来ること自体稀であるはずですが、少しカマをかけたのが幸いでした。

わたしは老翁に町の入り口付近の真新しい住居を教えられましたのに、古くから？　いえいえ、本当に歴史が深いのなら真っ先にあなたの家を教えるはずですよ。長く生きた老翁ならばなおさらね。

敷居のないフラットな玄関を通ると、暗かった室内が不意に明るくなった。

見ると、女性は部屋の中央の吊り下げランプに雷光虫を閉じ込め、明かりの代わりにしていた。

もしかしたら外にあるあの鈴蘭のランプも同様かもしれない。光の色がこの部屋のは青っぽいのに対し、外のものが黄色系の色なのはランプ自体の染色が違うからなのかもしれない。

「旅人の方、お連れ様はいませんか？」

「いえ、一人です」

「そうですか。では、旅人と呼ぶ訳にもいきませんので、お名前を」

「ローグといます」

女性はキッチンとおぼしき流し台の前で、早速おもてなしを用意し初めている。

「あの海割りローグですか？」

「大層な異名ですよ」

「いえ、素敵なお名前です」

ローグは窓の近くに座り込む。

「食事の後でよいですから、町を案内してくれませんか？」

バルトとは、かつて本当に実在した国だという。

この深い幻想の世界もかつては一般的で典型的な、ただの森の内の一つだったと。

しかし、急な話だが、ある時静かなバルトへ一人の魔女が来たと
いう。

ここが重要で、彼女は魔女のそれとわかる容姿ではなく、ただのどこにでもいるような女性だったよう。

優しさ溢れる王が国を治めているからか、ただの旅人の女性に大した印象も抱かず、それが国を貶めることになるとも知らず、ごく普通に、いつもの旅人に接するように迎え入れました。

そこからはもうトントン拍子、瞬く間という表現が似合うのでしょう。

一夜の内に、バルトの美しい城は変異の呪文によりその姿を荒廃の朽城へ変えたのです。

「とても本当の話とは思えませんね」

「この言い伝えには続きがありますのよ」

ローグは、夜の霧闇の中をランプで照らす女性に後続して歩いていた。

女性が話しているのはバルト王国崩壊譚。

彼女が作ってくれた料理は美味だった。湿気に富んだ地を考慮して、主にキノコの類いをもてなした。猛牛バターや黒胡椒をふんだんに使用したソーテー。

ローグはお返しにとばかりに宗教について女性に説いた。それは即興などではない。

こつという辺境にある町、独特な彼ら。これは何か特別な存在にすがつていなければ、わざわざ苦しい環境に身を置きはしない。もしくは過去に世間との軋轢があつたのかもしれない。

彼女は宗教を信じると言い、ローグの話を聞き入った。彼は今までに旅してきた地の様々な信仰の形を話したただだが、彼女はそれをえらく気に入る、また、彼を気に入ったようだった。

そのせいか、彼女はこの町に伝わる言い伝えを語り始めたのだ。彼も、その話に興味が沸いた。彼女はそれがこの町の宗教の一部だと気づかずに、勝手に自白したのだ。

彼は宗教を信仰する者から真実を盗みやすいと経験から学んでいた。いわば信仰とは教徒の存在意義である。彼らの存在意義を知ることが、この町の霧に包まれた全貌を解き明かす大きな鍵となる。今のうちに知りたい情報を知っておくことはローグにとって、ミストの不信感を突き詰めるのにつけてついてもある。

谷を回る内、明かりがついてない住居が大半だった。女性が続きを語り始める。

王国には王と姫がいました。

このバルトの森のウルシの葉のような濃い緑の美しい艶のある長い髪の毛、この霧にも似た白い肌に、谷にも似た深い慈悲の心を併せ持つ、全てにおいて美しい姫です。

王は勇敢なる意思と屈強な体を誇る浅黒い肌、天翔る翼が宿る竜の瞳を持っていました。全てにおいて逞しい王です。

しかし、変異の呪文は残酷にもその容姿と真逆の性質へ変えられるよう設定されていたのです。

王は、鳥の翼と蛙の後ろ足の醜い異形魚の化け物へと変えられ、宮殿を守る数多の騎士達はこの深い霧になり、今も嘆きの白色で姫と王を見守ることしかできないそうです。

そして姫は、あの樹にされたと言われています。

様々な形の彼らに共通していたのは、言葉を奪われたということです。

姫だけは真逆にはならなかったようですね。

ローグが相槌をうつと、女性は「深い慈愛の心が成した奇跡なのでしょう」とロマン溢れる見解を示し、闇に包まれて見ることに叶わない、天のユグドラシエルの方を仰ぎ見る。

続きをお願いします。ローグの願いに、彼女は大通りを歩きながら答える。

その中でも逸早く魔女の本性に気づいていた騎士長も、すでに遅すぎました。しかし、彼はもの言わぬ虚ろの駒へなりながらもただ一人意思を残していたようです。

ですがその予想外なる結果も魔女の余興でした。

魔女は国の玉座に座り、優越感に酔いしれました。ただの異常者だったのです。

魔女と異常者。この二つはいつでも、セットでついてくるお得な

詰め合わせ商品のようです。

そして、バルトでただ二人意思を持つ魔女と騎士長が残る不気味な城で、魔女は退屈しのぎを思い付きました。　　ほら、彼女は異常者ですから。そのような状況もただの日常の一頁に過ぎなかったのですよ。

魔女は騎士に対する辱しめか、チェスの駒となった騎士長をチェスボードに置きました。キング、クイーン、ナイト、ビショップ、ルーク、ポーン。それらが揃った娯楽遊戯へ放られたのでした。

実際、それは騎士長に途徹もない劣情を与えました。

戦いを行わず、個々の自由を尊重する王を敬い愛しさえていた彼は、ただ守られるだけの名ばかりの王が鎮座するチェスボードに置かれ、ただ命じられるために存在する駒にされたのは、それはもう想像に難くありませんね。

「チェスボードに置かれた騎士長はどうなったのです？」

「ナイトは、魔を踏み越える聖なる蹄の駒」

魔女は気づかなかったのです。それが自身を駆逐せし復讐の駒になることに。

魔女が退屈しのぎに仕掛けた遊戯も、一月も彼女を満足させることはできませんでした。

チェスを除いて無人と化したゴーストバベルにて。皮肉にもナイトと化した騎士長はチェスボードより、外界へと飛び出しました。ええ、彼はただのナイトではありませんから。

半刻も経たず、小さな駒から鋼鉄の騎馬へと権化した彼は、やがてその蹄で魔女を肅清するのです。

ローグは、谷の入り口である緩やかな傾斜の溝道の前にいる。

門の役割を成すランプの光が弱まっている。おそらく、雷光虫の灯火は消えかけようとしているようだ。

ローグに背を向けていた女性は振り返り、立ち止まった。彼女の線の細いシルエツトが淡く霧にぼやけている。

思いの外、あっさりと魔女は潰されました。すでに魔法にかかった者に、新たな魔法は通じなかった。そうならば魔女といえどただの異常者。

人の意志が奥底に眠っていたためか、魔女とはいえ人を殺めたことで激しい悔恨に襲われた彼は、走りました。魔法とは世を掻き乱す呪文。彼の中の人としてのココロは失われつつあったのです。

辿りに辿り着いた先の緑豊かな地で、薄れゆく人間に恐怖しながら彼は亡き国に想いを馳せ、故郷を模した国を作ろうとしたのです。しかし、ナイトの姿のままでは、ましてや獣へと変わりつつあるココロではできることに限界がありました。

いくら構想を練り綿密なる設計を描こうとも、しよせんナイトは駒に過ぎなかったのです。

いわば、チェスボードは駒にとつての戦場でもあり王国でした。きらびやかで美しい宮殿を天に向けて建てようとも、意識とは別の領域で、完全なる洗脳を受けたのです。つまり、いくら再建を望もうともチェスにとつての王国を人間に合わせたサイズの巨大なチェスボードを、緑を切り開きながら作ることはできませんでした。

生まれた一つのチェスボード。それが彼の最後の力の全てでした。

彼は、自分の生み出した王国の想像を絶するほど陳腐で浅はかなる姿に絶望しながら、砕け散ったのです。現在も、そのチェスボードはどこかに存在すると言われています。

「王はどうなったのでしょうか」

まだ話を終わらせたくなかったローグは、本心から問う。
女性は来た道を戻り始めるとともに、再度口を開いた。

その常ならざる異形の姿に、大粒の涙を流しながらこの谷を
さ迷ったと言われています。

辿り着いた先はかつて王が婚礼をあげた窪地でした。花々に抱か
れた円形の段地は、魔女の妖術により腐敗していました。残ってい
たのは、姫が産まれた際に急逝した妃の墓標ただ一つ。

花を供えようと腐敗した地には、しゃがれた茶色の花だったモ
ノが散らばっているばかりです。

墓標へと、妃へと手を伸ばそうとも羽毛が生え渡る翼でははばた
くことしかできません。

姿こそ異形ですが完全なる悪魔の心に堕ちていなかった王は、亡
くなった妃に想いを馳せ、尚且つこの異形を晒すことに屈辱し悲観
するという矛盾した感情を抱きながら、涙を流し続けたそうです。

その涙は主を映した鏡だったのです。

暗い闇の雫は太陽が照らそうと消えることはなく、窪地を侵し続
けました。

それはかつての姿が振り撒いていた慈愛の光を欠片も残さない、
蝕まれつつある心の象徴でした。

やがて涙は窪地に満杯に溜まり、いつしかその巨大なる水溜まり
は王の光と闇を具現化した様にちなんで、陰陽湖沼と呼ばれるよう
になったのです。

「素晴らしき悲劇の物語ですね」

大通りの中央、話し終えるのと重なって丁度大木の真下辺りに来たとき、ローグは思わず心にもないことを言ってしまった。

言い伝えは、限りなく妄想に近い、とても宗教とは言い難いものだった。それ故に彼は思考を乱していた。

ローグは、彼らが旅人を拒むのは魔女の訪れを危惧しているからかと思ったが、“だとすれば、彼らはどこから来た”のか。

言い伝えでは、バルトに縁のある者はもう残っていないはず。“だとすれば、彼らはどこでその伝説を知った”？

妄想？ 違う。老翁も含め、彼女は意図的に話しているようにも見た。

まるで、この町に“魔法”をかけようものなら魔女は制裁されると言っているようなもの。

これは妄想だと理解した者にしかわからないことだ。

「さて、続きは明日にしましょう」

彼女は自宅へと歩を進め、さつさと扉を開けて入っていつてしまった。夜は更け、午前へ変わろうとしていた。

月がない夜は、空すら見えない夜はローグの生きた間で初めてだった。

何事もなくこのバルト領を抜け出せるといいですが、難しくそうですね。

そうして、興味本意からミストに訪れた彼の一日目は終わった。

2・鳥姫籠中

かつてない怠惰感が全身を支配しているのを感じ、ローグは目覚めた。

その理由は上体を起こしたときにはつきりわかった。朝だと、わからなかったのだ。

覚醒の本当の意味は暗闇を耐えてからの陽光を浴びることにある。日差しを浴びていない体では、心地よいはずである朝の訪れが理解できなかったのだ。

相変わらずカーテンが引かれた部屋。うつすらと白い薄光が窓から降っていると言えどランプの代わりになるわけでもなく、都市部だったなら夜と判断されるくらい暗かった。

この町に住む者は皆、朝起きてまた夜に帰るような億劫な気分を毎日味わっているのだろう。大陸の中枢部では考えられないことだ。私腹を肥やす悪徳貴族なんかがここに来れば、焼き払ってしまえと叫び狂いそうなくらいに。

それでも長いこと居ついているのか、すでにそれは気にするまでもない事項になっていて、時間の概念やどうしようもない自然の気候は大して重要ではないのだろう。

女性はお自分の名をシャーリーだと言った。昨夜ローグが案内されたのは二階の空き部屋だった。

二階があること自体驚くべきことだった。霧のせいで住居の正確

な大きさが目測できなかったためである。

妄想話の後の余韻から覚め遣らぬまま、リビングから小さな渡り廊下に出たら、そこに見えたのは家を屋根から貫く巨大な根がまさに大黒柱となっている様だった。

そこは極小さな中庭のようでもあり、住居にはまるで似つかわしくない異質な空間でもあった。

根は、滑らかであり無駄な凹凸のない一本の木のよう。それこそ極小庭園に飾る風情あるウルシの木と言われたら信じてしまいそうだ。

彼女は特に根について何も言わなかった。

侵食された外観とは異なり、案内された空き部屋は思いの外小綺麗ではあったが、湿気がすさまじく、まとわりつくような空気が入った瞬間に体に重く付着する。

空き部屋は、倉庫を急遽掃除しただけに過ぎなかったが、つい最近も来客のために使われたようで埃もなく生活感があった。小さなテーブルがあり、その上にはインクと汚れた紙、くしゃくしゃに丸められた紙屑がいくつか。これだけで、以前の客は作家だったと決まったようなものだ。

シャーリーは紙屑だけ取り、不都合なことがあれば遠慮なくお申しをとだけ言つて彼を部屋に残し去った。

ローグはまず部屋の構成を確認した。筆記用簡易デスクにクロージェット。透明度の高いカーテンに守られた窓に本棚。肝心の本はなし。

なんとも味気ないシンプルな間取り。

次に、彼は痕を探した。倉庫だったならば、いくらか家具やら箱やら、何かしら置いていた際に残る痕があるはずだ。幸いにも湿気が多いこの地ならば、小さな箱を一日置いていただけでもそこには湿気を侵入させなかったためにできる四角い痕ができるはずだ。

それはなかった。

以前の来客がどれだけ長い間滞在していて、そしてつい最近旅立ったとしても、この手付かずのままを維持しておいたのは一体どういった次第なのか。

シャーリーがただ単にめんどくさがりなのかも知れないが、これも頭に留めておこう。

そうして彼は、バルト崩壊憚を頭で張り巡らせながら、藁の織物を重ねた質素な簡易ベッドで眠りについたのだった。

なるほど、この不愉快な環境は来客に町の不自然さを忘れさせるためにあるようだ。そのおかげでローグは昨夜の出来事を忘れかけていた。

バルトは崩壊、王は異形に姫は樹に。

魔女は踏まれ死に絶え、騎士は散る。

霧は根隠し姫隠す。

女性はシャーリー隠し事、と。

階段を下り、渡り廊下の木にぎよつとしてまた一つ思い出し、彼はリビングに向かった。

朝食はボンゴレパスタ。この辺境で麺類が出てくるのはなんとも場違いである。しかも、貝は淡水に棲むのではなく紛れもなく大海原の塩水に揉まれた大粒の貝だ。

ここにも行商が来るのだろうか。

空き部屋のテーブルとは違うものの、同じくらい小さなテーブルでパスタを頬張り彼はシャーリーを見る。

フォークでくると少しのパスタを巻き付ける彼女は、なかなか美しかった。肩にかかる程度の黒い髪は彼の好みの女性像であり、絹一枚のワンピースのような服もこれまた理想の清楚な女性といった具合だった。

ホワイトソースが滴る麺の束を口に運び、うつすらルージュが引かれた唇へ吸い込まれる。ちゅるりと可愛い音が弾けて麺は消え、ソースの粒が唇がこぼれた。印象から生まれた要素に相反した、どこかエロティックな所作。彼は女性の食事は官能的だということを聞いたことがあった。

視線に気づき目をローグと合わせながらも、シャーリーは再びフォークでパスタを巻き付ける。

「そういう世話も必要でしたら受け付けますよ」

ローグは緩く微笑む。

「わたしの現在の欲は食欲のみです」

「食後のデザートは別なのでは？」

「いえ、今のわたしは生ける屍ですから」

少し残念そうに眉を下げ、シャーリーは残りのパスタを皿から消した。

殻が残った皿。彼の皿も、すぐに同様になった。

その後、彼女は昨日の続きといいローグを連れ出した。

外は相変わらず深い霧。もしかしたら昨日より濃いかもしれない。それこそが蝕まれつつある平常心の兆し。

少し歩いたところでシャーリーは立ちどまった。クリーム色の霧。今日もどこかの雷光虫がせつせとランプの中で輝いている。鈴蘭の形をしているにしろ、陶器か硝子であるその偽りの花から蜜は吸い出せない。短い命をただ輝くだけで終える。

「ここは聖姫の霊樹の下にございます」

シャーリーがそう言うものの、やはり先日より霧は濃く輪郭すら見えない。

クリーム色であることも一因になっている。透明度が薄まり、もはや物質と化しているではないか。

「城はどうなったか、知りたくありませんか？」

シャーリーに近い。彼女の顔が霧に隠されないほどに鮮明に見えることがその証拠だ。

選択肢は一つですね。知りたいです、と彼は言った。彼女は始めた。

姫は樹になったとき寝室にいました。透明なレースの垂れ幕が取り囲む豪華なベッドにいたのですよ。

変化は一瞬だった。だから、自分がその柔らかな羽毛の掛け布団を貫き根を張ったとは、髪の毛が逆立ったような枝の数々がレースを引き裂いたことは、わからなかったのです。

少し経ってから、自分が歩けていないことに気づきました。手を動かせていないことも、首を捻って後ろを見ることも、口を開き歌を囀ることも叶わなくなっていたのです。

当然、樹に目はありませんし口もありません。もし顔のある樹が存在するならば、そんなもの怪談に出てくる魔の森の生ける怪樹に他なりません。

でも、姫は心があつたのです。心の目があつたのです。信じたくないでしょう。しかし姫は見えていたの。壁を越えて霧散する兵やおぞましい怪物へ変化する父の嘆き、そして最も信頼を寄せていた騎士長がチェスの駒に変わり、魔女の手に取られたことも。

姫は騎士長に恋心を抱いていました。父に似て浅黒い引き締まっ

た筋肉、残虐と力強さを併せ持つ竜の宿る眼。鮮やかな剣捌きに優しい心。

それが魔女に弄ばれ、あまつさえチェスボードに放り込まれるなど、見ていられるようなことはありません。ほら、騎士長のことは昨夜話しましたよね？　そういうことです。

それでも姫は、仕えるべき王から離された騎士長に憐れみの情を向けることしかできないのです。

いつのまにか窓から風が吹き込みました。それはちょうど、この谷に吹く、霧を巻き込むあの大流に似ています。

姫は祈りました。ただ、祈りました。何を祈ったのかはわかりません。どれほどの時間が経ったかわかりません。でも、祈りは通じたのです。

姫は葉をつけました。とても濃い緑の、そう、姫の髪のようなウルシの葉のような緑です。

姫は根を伸ばしました。石畳をひっぺがえす強力な根です。

姫は大きくなりました。天井を破り、二階三階とを突き抜け王の間、ひいては魔女に侵略されし玉座に辿り着きました。

でも、魔女はいませんでした。祈りが通じたとされたのは、ちょうど魔女が来て一月頃。すでに魔女はおもちゃに飽きて別のおもちゃを探しに行ったのですよ。

当然、騎士長も追って出たばかりで、もぬけの殻です。

姫は途方もない孤独に襲われました。それはもう身を焼くほどです。樹ですから、焼かれたらおしまいなんですけどね。

とにかく、絶望に苛まれ、茂っていた葉も艶やかな樹皮も瞬く間に枯れて老いたのです。

そして姫は、唯一外界を知るための心の眼すら閉ざし、今の物言わぬ霊樹になったのです。

シャーリーがため息を吐くと、霧がふわっと持ち上がった。軽いわたあめのような霧。否、霧は流れている。深紅のメイルに風が当たる。

「あの邸はなんなのでしょう」

昨夜のようにローグは問う。この魔法めいた雰囲気を壊したくないから、自然と出た質問でもある。

「邸？ そんなものではありません」

ローグは虚を突かれたように目を丸くした。事実そうなのだ。幸いにも谷の底を吹き抜ける風が今のタイミングで吹いているおかげで、あの張りついた邸を見ることができそうだった。

霧が薄くなり、シャーリーは真上を見上げた。

確かに、邸はあった。古時計のような趣のあるあれ。あの辺りは霧がまだ燻っているとは言え、見えないはずはない。

シャーリーは言う。

「あれは姫の一部ですよ。姫の処女帯。アイアンメイデンというやつです」

なるほど、これは重症ですね。

こういう人間がいる町には、強力な指導者もとい教祖がいますね。あの老翁ではないとは思いますが、どうでしょう。やはり調査を早めるべきかもしれません。

その後もシャーリーは町を案内するという名目で、家々を見て回った。その間、ローグの質問には丁寧な答えていた。

以前の来客は？

数年前です。

他の住人は？

今はまだ見ていませんね。

あの邸は？

そんなものではありません。

いくら質問しようと、彼が決定的な何かを得ることは叶わなかった。

ただ適当に谷を回るだけで、時間は浪費されていく。相変わらず、近づいても明かりのない住居がほとんどだ。老翁に教わった、本来世話になるはずだった真新しい住居にすら、生活感が感じられない。それどころか、すでにウッドデッキの木板にはカビが生まれ始めていた。

手入れされていない証。いや、もはや彼は、この町は常人の意識を越えた範疇に存在するのかもしれないと思い始める。少なくとも、自分は常人だと、この町を見れば言い切れるほどおかしい。

シャーリーは昨夜より早く散策を切り上げた。二十分ほど歩いただろうか。すでに泥を踏みしめる感覚は気にならない。懸念すべきは、時間の感覚が曖昧になりつつあること。

ローグは、危機を感じ始める。己の常識が崩れていく音が、近い。

そうして、彼がこの町に来てからの二日目は終わろうとしていた。

ローグはカーテンを開け、窓越しから霧を見ていた。水に薄めた紺色の絵の具を垂らしたようなぼやけ気味の霧。空に向かって伸び

る太い根の数々は、淡く発光しているように月光を乱反射させた水蒸気を纏っている。

晴れているからか、今夜の空気は澄んでいるらしく、物質と化して視界を阻んでいた霧は今はずいぶんと透明度を持っていた。

窓から見れる景色には住居が一つ。やはり灯りはない。少し目線をずらせば、谷に降り立って一度しか見なかった水車の羽がゆっくり動いている様が、掠れてはいるものの久しぶりに見ることができた。

彼は食事の後、インナー姿になり眠るつもりだったが、何か思うところがあるらしく脱いだばかりのフルフルZメールを着込み始めた。

赤い悪魔の皮が身を包み込むと同時に、素材特有の滑らかな生地ของヒダヒダが彼の肌に吸い付く。髪の毛一本もないまっさらな坊主頭を深紅のフードヘルムが包み込み、眉毛のあたりで縁が落ち着く。

彼は興味本意で訪れたと自らに口実として頭に刷り込んでいるが、実際はもつと具体的な目的を持っていた。

彼は知り合いから、地図に載らない霧のような町に、とある女性が隠されていると聞いていた。その女性は大変重要な機密を知っていて、それを狙っている者がいるという。

彼は機密については教わっていない。知り合いがどれだけの情報を持っていようが、とにかく彼は知らないのだ。

情報源である知り合いは、ミストのことを知っていた。

確かにバルト領は何かを隠すにはうってつけの場だ。ローグはそれを身を以て痛感している。ただでさえ入り組んだ広大な幽谷深山に絶えない濃霧、そして現地に棲まう様々なモンスター。ギルドは飛行船を飛ばし、上空から不確かな目測だけで地形を計り、つい最

近になってからやつと地図を作ることが忙殺される都市中枢の彼等のできる精一杯だ。

しかし、ローグが探し当てたように、数々の山を越え場数を踏んだ輩は大勢いる。知られざるが概知になるのも 年単位の話だが時間の問題だ。

そこで彼が帯びた命は、その女性を尋ね、あえて連れ出し別の場所へ移すことだった。

北へ向かえ。それが使命だった。バルト領を北上し数々の峠を越え、はるか地平線まで行けばそこにはモンスターすら恐れる国があるという。

ドグマはもちろんボレアなど数多くの地を旅した彼がまだ足を踏み入れたこともなく、なおかついつか必ずと奮起すらしていたその雪国はリフェウスと呼ばれる城塞都市だ。

彼は、ただ連れて行けと命令された。それでよかった。ローグにとって旅の延長に過ぎない。これまでも、距離など気にしたことはない。彼が重んじていたのは道程の中で見つける様々な事象と、行く先々で出会う人との体験。

今回の旅は、彼にとって非常に重要な経験になるものだった。

暗闇とじめじめした湿気が渦巻く渡り廊下の二階で、ローグが借りている部屋の扉がゆっくり開く。

彼が階段から顔を出してリビングを見れば、磨りガラス越しのそこは暗い。シャーリーがどこで眠っているかはわからない。だが、二階に来ていないことだけは確かだった。

彼の足は今やサイレンサー付のライトボウガンなど比にならないほどに消音力を授かっていた。

洞窟を這い回る赤いフルフルが持つ気配を絶つ力がそのまま反映された足甲は、傷んだ木板の階段を下る内軋みの悲鳴一つさえあげさせない。

渡り廊下にある、中庭の屋根はなかった。根の周りに半径一メートルくらい、丸い形に切り取られている屋根の隙間がある。

彼は、樹皮に手を当てた。根なのに、より養分を吸収するための枝分かれした側根はなく悠久のときを霧に揉まれた肌はすべすべした感触でしっとり濡れている。軽く指で押すと、弾力豊かに跳ね返る。そのまま爪を立ててみれば、人の肌のように食い込んだ。好条件だ。

ローグは足甲の爪先に鉤を取り付けた。ランポスの前肢の鉤爪。釣り針のように湾曲した爪は岩壁を登るときにも最高の食い込み力を発揮してくれる。

彼は蜘蛛の巣のように集約された根を利用し、大樹へ侵入しようと試みたのだ。

半径一メートルの隙間は、なんなく通ることができた。境界を越えた瞬間、夜の冷たい霧が彼の周囲を取り巻き、装着と呼んでもおかしくないほどに纏わりついた。剥ぎ取りナイフを杭にして根を這い上がる姿はイモリのようにひっそりのっそりとしている。

赤い姿のその行動は、ミストが賑わった町ならば確実に治安局に通報されるレベルである。

根は最初はやや傾いている程度だったが、シャーリーの家が遠くなるにつれて谷の中心へ導かれるように曲がっていく。

根が思いの外頑丈でしなやかなおかげで、彼は物音らしい音も立てず滞りなく登っていく。

次第に高度が上がっていき、谷の両岸が見渡せる位置までになった。改めて、高い。そして谷は深く、ミストが見つからないのも頷けた。谷の上から見れば普段より薄い霧のときですら、家々は見えない。

見上げれば、大樹の幹は目前だった。根が収束し一つの姫に形作られる場所。処女帯と呼ばれる邸は本当に古時計と呼ぶべき荘厳な

佇まいである。驚くべきは、構成自体は暖炉に近いレンガ造り。そして、その上部には時計が嵌まっている。西洋の時計塔が、まさに木に張り付いている。

まだ全体象がはつきりしていない内から決めつけるのも癪だが正面と呼ぶべき面には、入り口らしき物は見当たらない。かといって窓すらない。遠目から見ても、まるきり暖炉だ。ただ、暖炉には薪をくべる大穴がある。そう、機密を持った人物がいるとすれば、くべられることを自ら望んで暖炉へ飛び込むための大穴がどこにあるはずだ。

ローグは幹まで登り詰め、邸の横側へ回り込んだ。レンガの節々に根が張り付き、隙間にしか行く道がないのか細かな菌類がレンガを侵食していた。またも彼は驚く。この邸には、樹に張り付くための固定材がない。あるのは生命を持つ大樹が、無機質なる人工のレンガに樹皮を食い込ませているだけ。それも、まるで拒否反応もささくれもなく、悔しいほどにぴったりと収まっている。

彼は想像した。これは、打ち込んだからなのかもしれない。古時計に似せたこの邸を、幹に長方形の形に掘りを入れ、ハンマーが何かで嵌め込んだのかもしれない、と。だからこそあんなにもぴたりと嵌まっている。

そんな可能性を考えるなど頭がおかしくなったとしか思えない。仮にこの邸を“古時計”と認識できて、この“姫”を装飾品の値を叩き出すほどのベルトだと仮定できて、“ハンマー”でかんかん打ち付けることができたなら、それはただの処女帯ではない。

この邸の四隅を力強く叩く、邸を腕時計と思えるほど巨大なハンマーがあるなど。

彼は幹に張り付いていることも忘れて頭を振った。これは人が作ったもの。巨人なんてお伽噺の中でだけ存在すればいい。

これが霧の悪夢か。自覚症状がないぶん、あまりに進行力が

強い。

彼は一切の妄想を追い出し　無理な話だ　邸の側壁に沿いながら、再び幹を垂直に這い上がる。

大樹は葉を付けていなかった。それどころか、見上げて見る限りまともな枝すらない。下からではわからなかった、切り株を長く伸ばしたような老いを感じさせる形状。

側壁が途切れ、邸の屋上へ到達し、立つ。

今まで、この邸を作った人物以外は見ることは不可能な構造が広がる。

絵画のようなステンドグラスが屋上全体を埋め尽くしていた。ロ―グはその額縁にあたる部分に立っている。

ユグドラシエルの下に広がる世界とその聖樹を這い回るラタスクの鼠。それが切り絵のように継ぎ接ぎで、様々な色で溶接されて描かれている。

さしずめ、ラタスクはわたしか。まったく以てお似合いの図を見てそう思わざるを得なかった。

彼は縁を歩き回る内、階段を見つけた。そこはステンドグラスを侵食するように大きくスペースを取っている。

この絵画を鑑賞するために作られた階段。これが正面玄関ではないだろうと思いたい。

彼は警戒することもなく、階段を下り始める。

大きな空間。屋上を除けば邸の最上階であるその部屋は、バルト崩壊憚の姫の部屋の模範と言って差し支えない。巨大な円柱の形をした部屋。圧倒的な白に塗りたくられた、虚無なる霧を具現した部屋だ。

レースの垂れ幕が囲う、心地よい眠りを誘うこと請け合いのベッ

ドが下方に見える。壁に沿うように続く環状階段を彼はひたひたとフルフルのように下る。部屋にはきちんと扉がある。クローゼットも、テーブルも。

ごく普通な部屋だ。窓がないことを除けば。

ローグは階段の最後の段を踏みつけ、絨毯のひいてある床へ降り立つ。屋上へ続く螺旋の階段が思いの外高い位置にあつて、彼は退場する際の膝にかかる負担に気苦労する。

ベッドで女性が眠っていた。ローグの位置には背を向けているため顔は見えないが、一言で言えば濃い緑。そう……ウルシだ。お似合いの色。長い緑の髪が乱れて羽毛の布団に乗っている。

知り合い曰く、その人物は大樹の邸に住む姫だと言った。あつけなく当たりを引いた。

バルト崩壊譚では王と騎士長は　そう、竜人とされているようなものだ。それ故に、彼は驚かずにはいらなかった。

体を横にして眠る女性の耳が、まるで　イレギュラーのようにエルフの尖った耳をしている。

彼が訪れた町には、やはり竜人がいることもあつた。背が極端に低いことを除けば、今目の前で眠る女性と特徴が一致している。

優しい呼吸が劣情を誘う中、彼がベッドに近づくために動きだそうとしたときだ。

女性はむくりと起き上がった。一糸纏わぬ上半身がまるでベッドから生えている様は、それだけで美しかった。

ローグは無意識かつ反射的に唾を呑み込んでいた。今も背を向ける彼女の身体は薄く光を纏うように白く、柔らかな肌の感触が視覚を通して彼の神経を掻き乱す。

彼は比較的色欲に縁がなく、また、性格上自ら積極的に求めない。

故に坊主なのだが、そのすべてが消失　いや、掌握されるほど彼女の姿は美しい。そう、運命の人に巡り会ったと自覚したときに溢れるアドレナリンに惚けるような　無条件に感動してしまうような、人智を越えた存在感が本能的に唾を呑み込ませたのだ。

喉がせり動く固い音が聞こえたらしく、彼女はローグへ体ごと捻って顔を向ける。前面もやはり白く、彼の目に露になった乳房は授乳時期ではない極美の張りを保っている。理性は崩れはしなかったものの　あまりに妖しく、時間の問題。

無関心を象る唇の上、鼻を通り越し印象深いのは眼である。

そう思うローグを見透かすように、湖のような翠緑の瞳が彼を捉えた。開いていたアーモンド型の瞳孔が瞬間的にきゅっと細く閉まる。同時に、視線を送られた側は確信した。

この女性こそ、ギルドが欲しがっている機密情報を知る人物
ミザリー・ティア・ルドリユース・コーウェンであると。

「殿方。悪いことはありませんから早々に立ち去って下さい」

小さな口が開くと、牙とも形容できる鋭い犬歯がちらちらと見え隠れした。

崩壊憚の中で王は竜人。ならばその血を引く姫もそうであることはわかる。だが、こうも言い伝えに忠実な存在がいていいのだろうか。　やはり伝承は枕元で語り継がれる程度の不確かなものに過ぎない。姫は物言わぬ大樹にならず、魔女など存在しないのだ。

ローグは時間にして数秒、考え込むために黙っていた。当然彼女の忠告にも従わない。

機密情報を連れ出すために、彼女をどうやって説得するかわからずにいるのだ。こんなことは今までに一度もなかった。　黒き神を現世に降りた肅罪だと言い張る老人に、力を恐れることは立派で

すと姿勢を誉めたり、大事なのはいかに神と力を引き離して物を考えるか、神が力を持っていたなら決して誇示したりせず破壊を招く事態を引き起こしたりはしないなど導いたりしてきた。

彼女にはそれらの一切が通じないことを　あの瞳が、アーモンド型の眼を八割埋め尽くす竜の瞳が睨んだだけで、いわば彼は悟ってしまった。

初対面の人にいきなり説法を説くこと自体が厚かましいこと。だが、仮に彼女と会話し思想を引き出せたとしても、彼女が秘めているであろう巨大な意志の塊を懲り解すことは不可能だと、眼と眼が語り合っただけでわかってしまった。

「わたしはローグという旅人です。あなたに危害を加えるために侵入した訳ではありません」

「はい」

「立派な御屋敷ですね。家内は？」

「いいえ」

「一人で？」

「立ち去って下さい」

彼女はこれらの些細な問答の間、掛け布団を体に押し当て裸体をグラビアに緩和させただけで、まったくと言ってよいほど身動きしなかった。

石。まるでストーンヘンジ。強固で堅牢な環状列石のように調和し崩しがたい佇まい。それは誰かに作られたものではなく、彼女自身が築いた結界。元々人間の内側の門は開きにくい構造だが、彼女の場合より崩しがたい城壁になっているようだ。

だが、これで引くようなローグではなかった。

「そういう訳にはいきません。あなたの所有物を知るまでは」

彼女の、二等辺三角形を思わせる尖った耳がぴくりと震えた。

なんとも分かりやすい動揺だ。表情こそ変わりないが、彼女は自分を保つ上でまさか耳に変化が現れているとは思えないのだろう。

ローグは続ける。

「咎負いサリーからあなたを連れ出すように命じられました。あなたの知る機密は、こんな所に捨て置けばいずれ奪われるとのお考えからです」

ミザリーは質問を無視した。壁に吊り下がった蓮の形をしたランプが淡く光っている。

「あなたは彼女の人形なのですか」

声色一つ変えずに彼女はそう言い放った。彼はそれを気に入らなかった。彼女と違い明らかな不服を提示すべく、わざと険しい表情を作りさえる。

そう、まだ悪意を剥き出しにされたほうがよっぽどムキになれる。しかし彼女はまるで無関心で無感情な、哀れむべきと判断したことがローグにとって何よりの屈辱だった。しかし言葉通りでもあると、言いなりで踊っていると内心はわかっていた。そんな自分を自虐さえる。

「あなたこそこんな檻の中で、長い長い生涯を終えるつもりで？」
「籠の中の鳥が哭いているのなら、きつとあの空へ放してあげます」

構わないで。そう言われた気がした。私は鳴き声一つあげない小鳥だから、まだ羽ばたくべきではないと。それが今だからこそこうして死地へ飛び込んで来たのに。

ローグは頼みの伝である、サリーという人物とはもう何年もあっていない。正確には旅立つ時期は彼に委ねられているに過ぎず、リアルタイムな指示ではないということ。

それでも彼は今決断した。この地へ出向く決心を固めた。

ローグはバルト領へ赴く途中、不穏な噂を耳にしていた。

ハンターズギルドを創造した都市マナギルドが、討伐目的ではない異質なクエストを発注しているとのことだ。具体的には、驚異となるモンスターがメインターゲットである。ただ、クライアントの居住地が偏っている。まるで粗探しのようなのだ。ここ数年から、大概のハンターは目的地に到着してもクエストに記されたモンスターと邂逅しないケースが増えてきた。もっとも、別の飛竜が現れ半ば迎え撃つ形でなんとか収集がついている。

毒を吐く竜が村を荒らしているからと銘をうっていても、いざ索敵してみればたまたま空を横切ったりオレウスがいきなり火炎を撒き散らしてきたなど、仮に無事討伐を完了したとしても、ハンターにとって情報が命取りであり成否を分けるファクターだ。目に余る食い違いはさすがに許しがたい。

そしてその“粗”はミザリーだけではないようなのだ。

バルト領をはじめ、ドグマを含むボレア大陸や雪国リフェウス、遠方のココットにユクモなどは特にクエストが重複しているという。ただ、リフェウスやドグマに至っては完全にギルドを切り離している。彼女を匿うのにつけての国である。

マナギルドが何を探っているのかローグはわからないが、とりあえず人類の敵はモンスターだけではないということは周知の事実であり、近年それは表舞台に上がった問題になりつつある。

「もはや個人の問題ではないのです」

なおも彼女は無言を貫く。ベッドから降り、布団をはね除け彼に傷一つない陶器のような背中を晒しながら、全裸のままクローゼットへ歩み寄った。シルクのドレスを着ると妖艶な娼婦の雰囲気は消え去り、高貴な貴婦人へ様変わりした。クローゼットの内鏡を見つめ、髪止めのゴムをくわえながら腰で揺れる長い後ろ髪を束ねている。

「この平穩から、また喧騒の渦へ飛び込むなんて嫌です」

髪を束ね終え、ローグへ向き直る。眉間に皺を寄せ、嫌悪を示している。過去に何かあったのだろう。人間のマイナス面をすでに目の当たりにしているようだ。

だが、彼に好機が訪れていた。難攻不落とされていたミザリーの心は、いくらかでも解しようがあることがわかったからだ。こうなれば彼の得意の説法は火を吹く。

「自由になりたいなら、まずは我慢すること」

ローグは白い壁に歩み寄り、螺旋階段の初段に足を掛けた。

「自由になるために我慢するものではありません。のびのびと羽ばたける自由にも、相応の代価があることを忘れないで下さい」

ささやかな助言。空へ放たれた鳥は飛竜の翼に撃ち落とされる。だが、それでも蒼空を舞うことは素晴らしい。

ミザリーが外界へ再出したならば、行く先々で困難が待ち受けることは避けられないだろう。何の因果か、美しい容姿故に暴漢や賊に狙われるかもしれない。すでに経験済みだからこそ、無闇にうろつき回ることの恐ろしさを、自ら災厄の種を貰いに行くことを愚か

しいと彼女は悟っているのかもしれない。

それでも、自由とはそうことだ。壁にぶつかればそれを打ち崩し乗り越えること。それが人生であり、かよい小鳥には不可能な、なんとも素晴らしい人間の財産なのだ。

ミザリーは穏やかな表情だ。ただ、若干そわそわしている。視線を落ち着きなくさ迷わせていることがその証拠だ。ついでに、手も握ったり胸元にやったり色んな場所に行ったり来たりだ。これは時間に追われている者が無意識に発動させる拒絶行動。

「イオが来てしまいます。お帰り下さい」

どうやら、彼を帰したかったのは本当だったようだ。

イオ、この名にローグは覚えがあつたがなにぶん彼はさまざまな人に出会い会話する身だ。おそらく古い名。埃を被ったという可愛なものじゃなく、海底に沈んだ禁忌のごとき思い出せない。

彼は会釈をし、階段を駆け足で上る。慌てていようがいまいがフルフルズグリーブはヒタヒタと薄気味悪い水音を微かにあげるだけで、黙ったままの静けさで彼を天井へ導いていく。

程無くして夜の霧が彼を出迎えた。それだけで会話した後の高揚した気持ちが一気に低落する。

まだ一時間も経っていない。しかしシャーリーに断りなく抜け出したのは事実だ。

そして、老翁の言い付けも破ってしまった。老翁もシャーリーも、ミザリーが匿われていて、重要な機密を持っていると知っているのだろう。だから、この町に来る者を拒絶する。一週間の滞在権は今にして思えば非常に致命的な油断だ。ローグがギルドの手先だったならば今頃どうなっていただろうか。

変わらずに美しいステンドグラスを尻目に彼は幹に鉤を引つ掛け、降り始めた。

一方、教徒が去った姫の空間で、ミザリーの部屋の扉が開く。

銀色に輝く長い髪、そして浅黒い褐色の顔には黄金の竜眼を鋭く携える男。白く、まだ羽化したての蛹を思わせる滑らかな鎧を着た男は彼女へ近寄った。

敵意はなく、むしろ信賴する人物のようで、彼女もまた男に歩み寄る。

「イオ。 咎負いサリーの使い、海割りローグがつい先程お見えに」

「彼は何と」

「時が、来たようです」

イオは顎に手を当てる。顔と同じように褐色の肌。滑らかな意匠に反して、アーム部の装甲は鎧らしい金属音を鳴らす。

「少々厄介なことに、貴女は町民に見られている。彼らが簡単に信仰の対象を逃すとは考え難い」

「ときに、イオ。わたくしは自由になるべきと考えますか？」

彼は驚いた。それを包み隠さず顔に出したのは、彼にしては大変めずらしいことだった。

ミザリーは知られざる土地で命を枯らすことを受け入れていた。幼い頃より隠蔽されてきた存在感。大人達は、ある国王と貧民それも竜人の間に生まれた少女を突き放すように異境へ追いやったのだ。当時は竜人との交流は疎遠だったために起きた差別だ（今も異種族という先入観は拭えていない）。

心ない仕打ちは閉ざされた性格を造り出す引き金となった。

それが、ミザリーは外界に興味を持っている？ 決断はまだにしろ、変化の渦中にいることだけは確かだ。

イオは天井のステンドグラスを見上げる。ラタスクの鼠がいささか頼もしく嘲笑している。這い回られている世界樹も満更ではないよう。

「飛ぶべき翼があるなら羽ばたくべきです」

つまるところ、イオは賛成のようだった。

「結果として地に墮ちようと、空を知った記憶が貴女を輝かせる」

イオはミザリーの足元にひざまずき、彼女の白い手を取って手の甲に口付けする。いっぱしのナイトらしい行動。 実際、彼はバルト崩壊譚の騎士長に酷似している。美男と美女であることも一因だがまさにお似合いの図であり、そうならば口説くことも許されるという訳だ。都合のいい話。

彼が手の甲から手首へ唇を沿わせるように動くと、さすがにミザリーは止めた。大胆ながら、貞操観念はしっかりしているらしい。イオは立ち上がり、就寝の挨拶の代わりとして習慣付いた 頬へのキスをし、扉へ向かった。

開き通しの扉を潜るところでイオは止まった。

「……不服なものでしたら、試しましょう」

「試すとは？」

イオの提案に、ミザリーはベッドに腰掛けながら怪訝な表情を浮かべる。

「ミストの民は間違いなく私達の旅立ちを阻止しようとしています。そ

れを、彼がいかにして突破するのか」

ただの町民ではない熱狂的な教徒の彼らがローグを退ければ今まで通り留まる。ローグが説得できれば新たな旅立ちをする。短純なことですよ。

「ええ、そうしましょう……お休みなさい」

「お休み」

去り際の最後にイオはにこりと微笑み、ミザリーを残して扉は閉まった。

彼はとんでもないハズレくじを引いたのかもしれない。

シャーリー・ティンプセンという狂信者はミストの来訪者をことごとく泥の大地に還してきた、特に注意すべき殺人者だからだ。

3・幻影憤怒

ローグは中庭に降り立ち、未だ静寂を保つリビングを見据えた。一連の行動を起こす前とそっくりそのままの状態。まるで世界は止まっただけで自分しか干渉を許されていないような、時の魔女にでもなった気分。つまり、彼は気づかれていない自信があった。

素早く足甲の鉤を外し、例のごとく軋みを鳴らさずに階段を上って借り部屋に入る。ひとまずミッションをクリア。いや、本来果たすべきミッションは現時点で保留。

部屋は月明かりがよりはっきりと窓から射し、青白い明かりに満たされていた。霧が満ちていたときにはあり得ない、久々に舞うことを許された埃は化粧のパウダーを散らしたかのようなうだ。

ローグは窓の外を見ながら赤いローブを脱ぐ。ポーチベルトを外し、筆記用デスクに置く。彼は藁の敷物に横になった。

顔にちょうど月光が降りかかった。固い木板の感触を背中に感じながら体を少し動かし、寝たま窓が見えるようにする。

晴天の夜空だ。ほんのさっきまでまだ霧が漂っていたのに嘘のように星が見えた。

窓越しで、さらには寝転がっている状態から見える狭い夜空の端には黒雲が渦巻いていた。煙のように蠢き、恐ろしく早く空を侵食する雲。

一雨来るのだろうか。そして、また谷は霧に隠される。たしか、ユクモと呼ばれる東洋の国には嵐をもたらす龍がいたらしい。実際には、荒れ狂う竜巻と大雨の様が水の神である龍に酷似しているためにそう伝わったのだろう。その“龍”が通り過ぎた跡には、薙ぎ倒された木とひっくり返された地盤、かき混ぜられた泥の大地が残るとされている。

だが、何十年も前の話だ。いまさら西国のバルト大陸には現れやしない。仮に龍が訪れたとしても、ここでは霧になるだけだ。全てが無かったことに、幻に還るだけだ。

そんなことを思っている内に彼はうとうとし始めていた。妄想の風呂敷を広げてしまっていたこともそのせいかもしれない。

窓の向こうでは、すでに黒雲が四角いガラスの向こう側の半分を埋め尽くそうとしていた。相まってだんだん白く曇り始める。結露ではなく、文字通り景色が白に染まりつつある。

また明日の朝には、いつもの朝霧が谷をさ迷っている。夜の内から気分が億劫になりながら 無駄な妄想が睡眠時間を削っている ついには眠りに就いた。

翌朝、シャーリーは用事があるからといい朝食を共にした後に出てしまった。彼女はぼろきれのような灰白色のマントを纏い、首から下の一切の肌を隠していた。

ローグは聞き逃さなかった。鉄の擦れる いや、それほどの代物ではなく何か固い物体が擦れる硬質な音。 ついでに鎖帷子の連なった微弱なハーモニーも、心臓の鼓動に合わせるかのように途切れ途切れに。

マントは体に沿うようにフレア状の形状を保っている。目立った膨らみがあまりなく、恐らくは片手剣の類いの武器を腰に下げているだろう。

朝食にはケルビの股肉が入っていたことから、たぶん食料の確保は定期的に行っているのだと推測できる。一切の草食獣を見ないこの地のどこで彼女は暗躍しているのだろう いや、どうでもいい。

そして、彼は願ってもいないチャンスが到来したことを悟った。無感動な世界で特にすることが決まっている訳ではないが、シャーリー以外の住人に会うことだって許される訳だし、わざわざ決めなくても何でもできる。

とは言ってもあまり深入りすることはできない　あまり面倒な言い訳は不快感を招く。滞在する間はなるべく穏便に、事を起こしたくない。ミザリーを連れ出すことに支障をきたすようなことはないとは思いたい、彼はとにかく不安要素は無くしたかった。そのために、彼は面倒事になる可能性があろうとも、ホームステイから一時離脱することを躊躇わない。

シャーリーが霧に潜入していつてから十分ほど経った後、彼は早速散策を始めた。

気になっていたのは水車だった。谷にせせらぎの気配を感じたことがなかったため、なかなか興味があつた。そもそも、水路が引かれているとすれば降水量がとりわけ多く　壁となつて視界を遮る霧は、間違いなく定期的に間隔を空ける降雨のせいだ　堤防にするべき土も脆いものだから、確実な流れを作ったりすれば氾濫が起り谷は今頃水没し、ありふれた湖になっていたはずだ。

頭上の重い大樹のオーラを通り過ぎた頃、果たしてローグが見たのは幻だった。沼地の空虚だった。

谷の岸壁近くにあつた水車は、今は風が止んでいるせいか機能を果たしていない。

そしてもつと空虚なのは、水車は風車だったことだ。ただの泥に生えた普通の風車だった。

水を汲み上げる極短の筒状の水車翼ではなく、からから回る玩具の風車のようなプロペラ羽根である。水車だと勝手な解釈をしたほうに非があるのだが、なぜ谷の底に風車があるのか、ローグには全く理解できなかった。遠目から見ただけで水車だと判断したのはそのせいでもある。そもそもこんな地盤の緩い場所に風車があること自体間違っている。極めつけは、支柱の木は全て後付けだったこと。風車の柱は細く設計されており、元々泥に対応した造りではなかつ

た。わざわざ後付けするくらいなら泥のぬかるみを計算に入れるべきであり、なぜもつと計画を練らなかつたのだらうと疑問が浮かんだ。

そこで彼は、この集落について改めて情報の更新を図つた。言い換えれば、可能性の模索　集落に何があつたかを考えたのだ。

何があつたか、それは、もしかしたら何もなかつたのかもしれない。だが、彼女の言つた“今日は見ていませんね”。これは、もしかすると“今日も”なのではないか？

いや、そもそもシャーリーやミザリー、老翁以外に誰もいないことも考えられた。

とにかくこの地は劣悪すぎる。環境が。

一つの可能性　最初はただの谷を希望を持つて開拓し、大勢が住居を作る。その地に根差していた大樹のエナジードレインの要は優秀な大黒柱。中には住居に使われなかつた野晒しの根も多々あるが、家々の数自体は少ないとは言えない。

ぼつりぼつりではあるが、どこかの廃村の集団移住者が移り住むには　それも人目を憚つて暮らす消極的な集団にしては　じゅうぶんな数だ。

もしも、黒雲が　龍と呼ばれる超常気象だとして　かつては美しい森だつたこの地も不幸にもその災厄を一身に受け止めたために墮落したものだとするれば　希望は失望に変わり、荒れ地は用済みだという判断が下される。

風車も、本来なら発展しゆく集落の未来を見越しての設計だつたのかもしれない。まさか霧に没するとは、誰も思いもしなかつただろう。

もうここはじゅうぶん。彼は風車から離れ、大通りへ戻つた。次に調べるのは、老翁にも推奨された真新しい住居だ。

真新しいのだから何か、期待を抱かせるような何かがある気がする

る。

ローグの勝手な期待ではあるが、シャーリーの家は住むに耐えない裂傷があるくらいだ。如何にも放置されている雰囲気醸すそれよりは新築のほうの人が寄り付くに決まっているし、定住するにも申し分ないはず。

谷へ降りてくるための坂　集落の入り口付近の住居は輝きを失った鈴蘭のランプの近くにある。雷光虫は生き絶えたようだ。彼はウッドデッキに上がり、正面玄関のドアの前に立った。ドアの上部の大きめな磨りガラスの窓を叩き、呼び掛ける。返事はない。朝だと言うのに何も活動の胎動が聞こえないのが気掛かりだったが、頭の隅に追いやりながら勝手にドアを開けてしまった。それくらいやらなければ感覚が麻痺した霧の中毒者にはわからないものだろうと、ローグは大胆にも高を括っていた。

何よりも真つ先に彼の蘇芳色の瞳に飛び込んできたのは死体。それもまだ時間が経っていない状態だ。ラフなシャツと太めのスラックスはいずれも泥やら血やら内臓物やらでめちゃくちゃに汚れきっている。体格や　惨いと言えど丁寧にも五体満足だ　固めの体に最適な印象の衣服から、男性だと思われる。

湿気の凄まじいこの地では死亡推定時刻が著しく変動する。まだ時間が経っていないといえど、すでに腐りきっている。

彼は死体に十字を切りながら、血が染み付いた床を食い入るように見つめていた。出血は体の前面でも特に胸や頭、そして干ばつのひび割れのようにぱっくり別れた首からが主な流出箇所だった。

老翁の趣味は、猟奇殺人を見せつけることだったのか。だから一度拒否し、わざわざ茶番を演じてまで滞在させ、誇ろうとしたのか？　カマをかけようと思わなければ、機密の保護という使命すら忘れて都市へ戻り匿名の通報をするところだった。

激情が彼を奮い立たせた。趣向のために人間を殺める人間など、情状酌量の余地はない。ただそれだけだが、原動力に成りうるに申し分ない。

彼は片っ端から家々を物色した。余裕はなく、ノックすら忘れていた。

死体が放置されていた住居の対になる場所では 家具も何もない。二階すらない。違う。

いつか明かりが灯っていた住居 生活の痕跡が見られるが、去った証 床板が腐って抜け落ちている。違う。

シャーリーの家の陰に隠れるように立つ住居は 他より床が低いのか、はたまた浸水が視野に入ってなかった希望時代 嵐が来る前に作られたせい、浸水し泥水が浮かんでいる。違う。

風車の近くの住居。崩れていた。違う。

シャーリーの家。外観こそ廃屋同然も、生活感あり。

老翁 姿がない。

違う！ 彼女はそんなことをしないはずだ！ まさか、用事とは理解できる悲鳴を叫び続ける“草食獣”を狩ることなのか？

彼はシャーリーの家に帰ろうとした。別に家でお留守番してなさいと子供に叱りつける母親のように命令された訳ではなかったが、もはや本能だった。自分の意識とは別の領域で いい子にしないとバチが当たるぞと警鐘が鳴っているに等しい状態だった。

そんなときに思ってもないことが起きた。

老翁が、ローグの正面から向かってきていた。相変わらず緩慢とした歩みに、絹のティーシャツ姿。

ローグは自分から老翁に接近した。 もどかしい。それが本音のところ。

意外なことに、彼が話し掛ける前に老翁は発言した。

「ご機嫌はいかがですか」

「とてもいい心地ですよ。視界が悪いことを除けば、ですが」

危うく死体と一緒に寝るはめになりそうだったんですよ。あなたのせいで。とは口にせず、彼はまたもカマをかけることにした。

「心地よいはずはないが……もうじゅうぶんだろう。そろそろ故郷が恋しくなってきたのでは」

老翁の声色に寂しい響きが含まれていた。
顔こそ霞んでいるが、それだけでどこか違和感を感じざるを得なかった。

ローグは老翁を置き去りにしシャーリーの家に戻った。ある可能性が新たに生まれたのだ。

リビングには留まらず、借りた部屋に直行し彼は考える。

老翁の言い分には、拒絶もそうだが焦燥も含まれていた。むしろ大部分を占めている。

普通に会話していればそれは見落とすか気づかないが、神を崇める内に必ず衝突する自己と慈悲の狭間で思い悩む、数々の迷える子羊の願いと主張を聞いてきたローグは、理解に時間を要したとはいえ ようやく老翁の言葉の真意の欠片を掴んだ。

脳という脳をフル回転させる。 人間は危機に直面して初めて

本領を発揮する。闘いにしろ痴話喧嘩にしろ夫婦離別にしろ、全身全霊をかけて阻止するのだが　そして、逃走を促す場合の危機、集落から逃すために直面させる危機……。

彼は全てを理解した。

あの死体は、おそらく作家なのだろう。

ローグは自ら命を差し出したに等しい行動を、知らず知らずのうちに行っていたようだった。

知らなかったとはいえ、間抜けな神経を今更ながら呪う。無意識に彼は震えていた。

こうなれば、一刻も早くミザリーを連れ出し狂気の住人シャーリーから離れなくてはならない。彼女が何かの首をもぎ取って帰ってくる前にあの邸に再度訪問しなければ　。

ドアが閉まる音が微かに響いた。彼は、聞き間違いであってほしいと切に願う　シャーリーが帰ってきた。

目線が釘付けになる。沈黙を保つ扉はものを言わずとも、確かな緊張を孕んでいる。

ローグは片手でダイダロスを手に取り、デスクに置いたポーチベルトに腕を伸ばした。まだ目立った物音はない。シャーリーはリビングにとどまっている。

薬瓶やペイントボールがぎゅうぎゅう詰めになっている中をまさぐり、数秒手が動き回る。無意識の内に動揺が体に現れていたように、目的の砥石を取り出すのに余計な時間が掛かった　緊迫の狩場のシチュエーション顔負け。

ざらついた感触に光明を得て、すぐにダイダロスに宛がった。直後にリビングの戸が開く音。

全く刃零れなどしていない上に彼は几帳面でもあったため、狩りに関するものは一つ前に訪れた町ですでに抜群のコンディションにしていたが　わざわざ砥石を選んだ目的は、いかにも自然に武器を握ることにあった。

シャーリーが殺人者という決定的な確証があるわけではない。だが、八割の疑惑がある。残り二割の可能性が事実であってほしいが、やはり二割では心許ない。

「　　口オオグウウウ！」

呼ばれた本人は思わず震え上がってしまう。

凄まじい怒鳴り声が渡り廊下から響いてきた。一体何に激情しているのか、少し考えればわかった。

鉤爪の痕を見つけたに違いない。

さすがに、気付かれないとは思っていなかった。中庭の根は二階に向かう上で　ローグに用が無くてモリビングを出た際には必ず目につくよう突き当たりに配されているのだが、驚くべきは些細な変化を異変だとわかるくらいに、彼女は周囲の状況をチェックしていること。

住み慣れた空間の中で、中庭は変化が限りなく起こらない場所であり、注視すべき要素はない。都市部では庭園を趣味とする貴族も多いが　少なくともこの集落においては重要ではない。

シャーリーのような重症な妄想癖がある人間は、架空に目を背ける割には自分を取り巻く環境の変化にのみ敏感だ。即ちそれは精神不安定者によく見られる独特の兆候であり、そういった人間は現実に対して感情の変動が希薄な部分がある。

これは医学的に統計されている。明白に固定されているわけではなく例外もいるが、彼女は模範といって差し支えない。

シャーリーが作家を葬った可能性は、パーセンテージからすればもはや三桁の数字に到達しようとしていた。

階段を駆け上る間隔が早い。 落ち着け、落ち着こうよローグ。そしてシャーリー。一時の感情の暴走は思慮を欠く愚かな行為ですよ。

沈黙が破られる。比較的穏やかに開いた扉の先にシャーリーはいまだマントに身をくるむ彼女はてるてる坊主のようで、迅竜のヘルムが醸す妖しい雰囲気と相まって恐怖を感じさせた。

無言のまま立ち尽くす彼女の顔を観察する内、ローグはぎよつとして身を引いた。

興奮している筈の、感情が表れるべき目の形は冷静な形をしていた。瞳の上下の縁が瞼に隠れていて、眠りに落ちようとしている目とも取れる眼差しがそうだ。

その癖笑みを張り付けているのだから、ローグはきつと何か悪いスイッチを知らず知らずに押してしまったに違いなかった。

彼は研ぐフリをあくまで貫く。過ちなのは、彼女に声を掛けなかったこと。感づいていると、緊張していると教えているようなものだ。

突如シャーリーの瞼は大きく開かれ、妖艶な唇から絶叫が漏れた。

「姫に触ったのね！ 足から這い登って、汚らしいその手で犯したのね！」

叫びながらヘルムの下の髪を掻きむしるように両手で頭を引っ掻く。

何が言いたいのか、もはや彼女は自分の世界が相手に伝わっている前提でしか喋れないようだ。

姫とは おそらく大樹の意であり、足は根のことだと言いたいのである。シャーリーは半ば引きちぎるようにマントを脱ぎ捨て、

素早く手を振り抜いた。ローグに黒い塊が迫る。素早く砥石を盾にし顔の前にかざす。

砥石が砕け、クナイが甲高い響音を奏でて宙を舞った。投擲用ナイフではないところが彼女の素性を物語る。独自の訓練を積んでいる。ここではないどこかで。

隠していた素肌は全身真っ黒のナルガメイルでコーティングされていた。艶やかな網目のタイツが腰から胸までを覆い、袴のようなふっくらしたズボンに脹ら脛で引き絞られている。俗にいう暗殺者の服装だ。クノイチと呼ぶべきか。忍ぶ者にしてはセクシーな出で立ち。

ローグはスラッシュアックスを瞬時に剣の形態に変換する。彼の意図を読み取ったシャーリーは動き出したが、距離が詰まる前にダイダロスを槍のように突きだして窓を突き破り、二階から飛び降りた。

雨が体をうつ。重力を味方にするイメージで、着地の瞬間に腕で保護した頭から受け身を取って転がる。ダイダロスを背中に収めながらローグは着地の勢いで走り出すが、続いて黒い弾丸と化したシャーリーも飛び降りてきた。

柔らかい身のこなしで落下の硬直も衝撃も感じさせない受け身は、ローグに引けを取らない技術だ。ハンターが会得する技術に近い、街並みでの戦闘に長けたもの。間違いなく何人が殺っている。

雨は霧を沈殿させ、谷を暴いていた。

どこか隠れる場所はないかと、シャーリーに追いかけられながら大通りを走る。

小雨が降りしきる中、幾度も視線を移していくとちらりとイレギュラーが視界に入った。一度それが視界から外れた辺りで彼は異変に気付き、再度その姿を凝視する。

鉄色のたなびく髪を見て、ローグは呻きなくなった。ミザリーだ。あろうことかこんな危険極まりない状況で念願の彼女と出会うなど、神はやはりいいのだと認識させられる。

だが、シャーリーの動きが鈍くなった。ローグがスピードを緩め歩き始めるのに合わせるように彼女もそうした。

そういえば、シャーリーは熱狂的なバルト信者だった。それが今まさに伝説の生き写しであるミザリーを目にしたのだ。驚くのは無理もない。狂気の矛先を変えることはなおさらあり得ない。

ミザリーの背後に迫ると、彼女はローグに気づいた。濡れてそばみ始めた衣服や髪。大樹からどうやって降りたのかは知らないが、外に出てから時間はあまり経っていないようだ。

「……ローグ。わたくしはこれから儀礼へと参ります。あなたも来られますか？」

ローグは振り向くも、シャーリーの姿はなかった。あるのは屋根から雨水を排する家と艶やかに水気を帯びる根ばかり。

混乱しているからか、彼は首を縦に振るしかなかった。

不謹慎ながら、信仰の対象そのもの　ここにおける神の傍にいれば危害はないと踏んだのだ。それでもローグは危険を感じている。彼はオカルトを嫌悪しているわけではないが、狂気に取り付かれた女性というのが大の苦手だった。

女性とは神秘的な生き物であり、生物学における雌とは彼にとつて第二の神の具現であるとさえ定義していた。

しかしシャーリーは殺人まで犯している（勝手な仮定）ので神秘的な象徴の風上にも置けない。いや、だからこそ彼女は魅力的であり恐ろしい。

ミザリーは、ローグが初めて谷に來た坂道ではない、もうひとつの溝道を上つていく。閉塞的な入り口を下流からの登り口とすればいわば上流へさらに登る道で、左右の谷が途切れても溝道は平行になることなく登り調子のままだ。

幾匹もの細やかな蛇のような水流が坂を這つて降りていく。ローグがちらりと背後を覗くと、数多の木々の間で黒い迅竜のヘルムがその内の一つに隠れたのを見た。

迅竜の獣じみた耳を模した飾りが隠れきらず幹から飛び出ていて、まるで幼児のかくれんぼのようで微笑ましい。

しばらくそれを繰り返す内　いずれも飾りは隠れきっていないことからやはり彼女は精神に未熟な部分があるようだ　登り坂が平坦になつた。

「儀礼とは言いましたけれど、特に怪しい行為をするわけではありません。それと直接立ち会わなくと結構です」

ミザリーは続ける。

「水浴びのようなものですが、“あそこ”は危険ですので、あなたはこの辺りで待っていてください」

“あそこ”とは？　ローグは問う。ミザリーは立ち止まり、振り向く。

「陰陽と呼ばれる大きな湖沼です。あなたを死なせたくありません」

しばらく沈黙が続いた。強くなり始める雨がうち鳴らす弾けるような水音だけが森を支配する。

バルト崩壊憚の中で、異形の王が溢した涙の湖か。つまり王

が今も湖に棲んでいて、異形の化け物故の理性のない暴力を振るうと言いたいのですね。馬鹿馬鹿しい。

ローグは付いていく旨を伝えようと口を開きかけた。だが、ミザリーの背後　彼女は顔を後ろに向けているため正確には前方に広がる景色を見て息を呑む。

深い緑が埋め尽くすその中で、あの飾りが飛び出ている。よく見るとそろそろと動いていた。じわじわと侵食するように。そして、顔の半分が幹からはみ出した。

赤い目。いや瞳。血の赤をした目がローグを見ていた。そしてあの笑み。落ち着いた目に、張り付いた三日月の笑み。フルフルズメイルの皮下で雨とは違う冷たい水滴が沸くのを彼は感じた。

ローグはミザリーの言う通り、儀礼には付き合わないことにした。山道を外れ、脇に広がる木々の隙間へと飛び込む。シャーリーが顔を出していた木を睨み付ければ、すでにそこにはいない代わりにローグと平行になるよう、彼女もまた山道を外れて木々の合間を縫うように走っていた。

ミザリーが何か叫んだが聞こえない。彼はミザリーからシャーリーを引き離すように走り続ける。

風切り音が耳を掠めた。続いて身近な木にクナイが突き刺さる。シャーリーの技術は大したものだった。暗殺者として素晴らしい技術だ。

横に目を逸らすとシャーリーは忽然と姿を消していた。　素晴らしい。だが、今はただの驚異だ。　素晴

突然雨と共に黒い塊が降ってきた。彼の前に立ち塞がるように、跪く。

「姫は渡さない……魔女はここで殺す」

シャーリーの片手には黒い刃が握られている。鴉の黒羽が連なったような骨の剣。艶消しの黒色も今は滴に濡れて輝いている。

彼女は騎士長のつもりだろうか。ローグを　ちよつとばかり赤い旅人を平凡な魔女だと誤認しているあたり、どうしようもないほど頭がイカれているようだ。彼は、そんな彼女に易々と命をくれてやるつもりはなかった。

シャーリーが間を詰める。このぬかるみでしつかり踏ん張れたのはナルガクルガの獣爪がこの劣悪な環境と上手く調和しているからなのだろう。

さて、思慮はもう出番なし。ローグはスラッシュアックスを背中から引き抜き、斧の形態のまま、刃の腹を叩きつけるように振った。

刃の腹を起こしての剣截は空気抵抗が大きいため、速度が出にくい。シャーリーはなんなくそれを急停止しながら後方にサマーソルトスピンしてかわした。とてつもない技術は普通の女性らしからぬが、その程度は場数を踏んだ狂人には造作もないようだ。

機構が変化する。両刃の刃が遠心力に逆らって柄に引き寄せられた。瞬く間に片刃の大剣に移行し、彼は振り切った勢いで体を一回転させると切っ先を地面に突き刺した。

宙返りをしてから再度勢いをつけるため、ローグがダイダロスを泥に突き刺した頃にはシャーリーは低姿勢で走り出していたがダイダロスが激しく震え始め、圧力機構の核となる瓶の内部が泡立った。

雨が剣斧を避けるように弾け、空気さえも熱を帯び始めた直後、泥は散弾のごとく爆発した。おびただしい汚泥が花火になってシャーリーを呑み込み、ダイダロスが振動させ解放された圧力自体が華

奢な体を宙に浮かせて吹き飛ばす。

「あうっ！」

力の行き先は太い幹へと導かれて、シャーリーは強かに背中を打ち付けた。泥がべちゃりと飛び散り、反動で勢いよくぬかるみに倒れ込む。

起き上がろうとしているらしいが、痙攣して何もできていない。

本来緩衝の要であるヘルムの内壁すら力の一部として衝撃が伝達され、彼女は頭も強打したらしく、ぐったりと動きを止めて気絶してしまったようだ。

雨がいつそう勢いを増し、彼女を汚した泥を流していく。

ローグはその場を後にする。

4・陰陽儀礼

山道へ戻って道なりに進むと急に下りになった。ただし緩やかな傾斜だ。今ローグがいる辺りは数々ある山の内の一つだが、まだ中腹に差し掛かったに過ぎない。見上げれば山頂はずっと高い位置で霞んでいる。未知なる地で、全く地理を知らないとは言え頂上ではないのに下りが続くとはおかしいものだと思ったが、ローグはミザリーが通ったとされるその道を無言で歩く。

この辺りはまだ森の姿を残している。ウルシではなくマングローブのヒルギに近い、泥に生える植物ゆえに呼吸法を進化させた、足頭類に似た根を持つ木であることが森を保つ要因となっているのだろう。

それも数年経てば脆く崩れ去るのかもしれない。だが、森は確かに息づいている。霧に負けず、劣悪なる幻想に生きている。

雨は勢いを弱め、霧雨に変わった。左右を占める森の郡列も坂道を下っていくに従って次第に開けていき、狭かった景色は曇天を臨む広い湖畔を晒した。

割れて空洞になった切り株を思わせる窪地の湖。控えめな霧雨が、漂うように水面を滑る。

湖の浅い所にミザリーはいた。腰まで水に浸かり、呆然と立ちすくんでいた。薄紫の蓮がちょうど彼女を抱くように囲っている。

睡蓮の花々は浮き世の美を結集した趣を醸していたが、湖そのものはまさに涙を流すべき時の感情を表した、黒く悲哀なる怠惰の様相だ。

彼女は湖の中心を見据えているようだった。ローグに背を向け、己の世界に閉じ籠っているかのように、ただ何も見ていない。特に何かをしている訳ではない分を見るに、たしかに儀礼とは程遠い。祈りでもしているのだろうか。異形の王へ向けた慰めの祈祷を捧げているとすれば、それは勘違いだ。たとえバルトの王が優れていたとしても、ヒトはヒトに過ぎず　神ではなくただの人間なのだから。

彼は岸辺の水へ足を浸した。沈む感覚がくるぶしまでじわじわと侵食してきた。

「立ち去りなさい」

ミザリーは相変わらず中空の虚無を見つめてローグなど眼中にない。だが彼は忠告に従わない。これで二度目だろうか　もはや、耳がないのですとも言わんばかりの図々しさ。

転機は突然やってきた。湖の中心が盛り上がり、水柱があがる。四方に散らばる濁水のヴェールを脱ぎ捨てるように一対の大翼が現れた。

霧雨が一時的なスコールになり、そのシャワーの中で黒光りする衣を纏ったガノトトスが鎌首をもたげて水上に出現した。湖畔を睨み付ける真珠眼は全くの慈悲もない。ただの悪意に満ちている。

異形魚と化した王。伝承の起源となった、恐れをも神の威光に変えた竜だ。王の変化した姿に相応しい、王冠のような　金属質の光沢の角を登頂部に冠している。

偶然か必然か現れたガノトトスに気圧されたのか　この場合ローグを心配しているからだろう　ミザリーは彼へとようやく意識

を向けた。

先ほど山道で立ち止まって警告したときのように首を捻って振り向く。眉尻を下げた切なげな目が媚びるようにローグを見る。

「あれはどういう訳かわたくしには攻撃しない。だから」

いまだ湖に座す水竜はヒレの翼を胸に引き寄せ、柔らかな喉を天に突き出すと、次の瞬間には顎が外れたと思えるほど開いた大口から無情の水流を解き放った。

細い槍のように鋭利で、螺旋の推進力を付与されたブレスはミザリーのすぐ横を通り　ローグの眼前まで瞬く間に迫った。

距離にして百メートルほどあったため、反射をもつてすればじゅうぶんの余裕を持ってかわせる。わずかな時の狭間でそう結論付け、彼は身を投げ、浅瀬に飛び込んで水流をかわした。

標的を貫くべきブレスは、彼がいた背後のヒルギにぶつかり、太い幹に風穴を開けた。雷鳴のような炸裂音が、木が瓦解するのに合わせて大きく鳴る。ブレスの余韻として跳ね返った水飛沫が二人にシャワーを浴びせた。

ガノトスが狙ったのは明らかにローグだ。射線の都合からすれば若干ミザリーのほうが近かったにも関わらず、まるで彼女を排除すべき範疇に含めなかった。

ローグはダイダロスを両刃斧の形態で構え、ミザリーの前に立った。

彼の足元にこつんと軽く固いものが当たる。腐りかけた肉が付着した人間の頭蓋が被るステイルヘルムが空っぽの眼で空を仰いでいる。物怖じはしない。十字を切る代わりに彼は湖の核へと踏み出した。

苦痛にも似たおぞましい嬌声が水面を小刻みに波打たせた。それが口火を切る宣誓だったのかガノトトスは頭から淀んだ海へ突っ込み、より激しい波を起こしながら水中へ姿をくらました。

こうなれば手も足もでない。しかし今は逃げ出すべきシーンではない。次に水上へ現れる時は、かの竜王が直々に裁きを下すときに他ならない。

濁った湖の水面下を揺らめくホログラムが高速で音も無しに蠢き、蓮の花々へ忍び寄る。奇襲を画策し隠れているつもりだとしても、あまりに巨大な存在感は気付かれることを見越しての威嚇の啓示にさえ思える。

背ビレが湖上を切り裂きつつローグに迫ることで、あくまで敵意は自分に剥き出しであることを改めて認識させられ、頭と思われる影が彼の足元深い足場のない暗闇から水面に出る直前まで迫ってきた。

ミザリーはこれまでその場を動かうとしなかったが、ガノトトスが岸边に迫るとわかった途端ドレスの裾を掴み上げ、巨軀なる質量に水面が盛り上がり始めた瞬間、浅瀬から飛び退いた。獣の後ろ脚を思わせる、踵が地面に付かない白く長い足を巧みに捌き、あろうことか人間には不可能な跳躍力を見せつけたのだ。

それを見越してかローグはダイダロスを横に水平に振り上げ、濁流を撒き散らしながら飛び出したガノトトスの、牙を剥き出しにした顔に刃を叩きつける。

重い剣戟が頬のエラにめり込み、突進の勢いを若干弱めて軌道を逸らした。だが、矢のごとく一直線に力を加えた強靱な体躯での突進は、鼻先を挫かれたくらいで衰えるものではなかった。

エラにダイダロスを縫い止めながらも、大蛇が這うように陸地へと突き進み、成り行きから巨大な翼が彼にぶち当たる。

「ごふっ」

鳩尾を深く強打したまま、足を伸ばした格好で彼の体はぐいと引つ張られた。水中の汚染度を物語る凄まじい滑りがあるヒレの大翼にも関わらず、細かな鱗はローグのメイルに食い込み、樹海の合間を這い進むガノトスは標的を無理矢理引き摺り回す。

抵抗しようにも武器は手離され、鳩尾に深く食い込む翼の可動部分が激痛をもたらす。

ぬかるんだ湿地ゆえに弱い張力の木々を薙ぎ倒しながら這い進み、いつの間にかダイダロスはエラから抜け落ち、無限の湿気により陸地での長時間の活動を得た水竜は突如進行を停止した。

それに伴ってローグは呪縛から解放され、代償としてぬかるみに突き飛ばされる。

筋肉から震えるような虚脱感。立ち上がるのにも一苦労だが無情にもローグの背中に鈍重な衝撃が加わり、叩きつけられた体は限りなく無反発な泥の定理すら無視し、彼は水飛沫を纏いバネのように跳ね上がった。

頭を天に近づけ直立した姿に雄々しく広げた翼、仰け反って曲がった首での狙撃体勢によりガノトスは縦横無尽にブレスを操る。宙に浮いたローグに追い討ちを掛けるように、即座に尾から頭までを一の字の姿勢に変え、低位置から掬い上げるブレスで打ち上げた。

はるか数十メートルも飛ばされたローグは シャーリーにそうしたように、ヒルギの幹に叩きつけられた。ずるずると、弱々しく崩れ落ちる。

「グフッ、亜種にしなければ、よかった」

しゃがれた声で思わず呟いた途端胃がひっくり返り、彼は朝食べたものを吐いた。水圧と極短期に集中した衝撃に内臓が潰されたのだ。それでも血を吐かなかったただけ最小限の被害と言えるのだろうか。

赤いフルフル装備の損傷が激しい。弾力と水気に富んだ稀白竜とは違ってその亜種はなぜか水に弱い。彼は湿地に訪れる上で重大な選択を誤ったのだ。Gクラス防具であることは不幸中の幸いである。しかし、仮に白いフルフルの衣を纏っていたとしても大して状況は変わらなかっただろう。魚竜王のブレスの恐るべきは性質ではなく高圧力であり、現在取り上げるべき点は丸腰なこと。それが何よりの問題なのだから。

ローグは体を細かく痙攣させながら辺りを見渡した。まだぼんやりと視界が霞んでいるが、ダイダロスから相当引き離されたのはわかった。

ガノトトスが外股でなおかつ大腿で走り寄ってきた。端から見れば滑稽な姿だが次々と木を薙ぎ倒す様は全く笑えない。

ローグは泥まみれであることを利用し、低姿勢で破壊者の脇を潜り抜けた。小さな目の欠点　あまり視力が良くない魚竜は彼を見過ごし、騒々しく突き進んでいく。ある種の賭けではあったが、とりあえず当たりだ。

幸いにもうつ伏せに倒された無数の木のカーペットがダイダロスへの道標となる。

そこまで遠くない場所で、ダイダロスは柄を泥に埋めて両刃を天に向けた形で放置されていた。刃の付け根に手を掛け引き抜く。泥が持ち手部分にこびりついている。軽く振ると汚らわしい音を立てて汚物のように滑り落ちた。

ギルドの使者がレベルを定めるとすれば、あのガノトトスはGク

ラスの超強力個体になることだろう。

何より、あの角がそうだ。

あれは銀火竜の両足だ。古くからこの湿地に隠れ棲んでいたのかもしれないが、湖の上空を通ったのが命を落とす原因になったのだろう。

成熟する手前の幼態といえどリオレウスは立派な王者だ。何より成熟する手前ということが、若い雄を争いに駆り出したのだ。

ガノトスから牽制をもらい、闘争本能から争い 縄張りの奪い合いを始めたのだろう。属性を尽く受け付けない銀の鱗で優勢に立っていたのに 火炎と水流のやり取りが不毛だったのか、直接殺しにかかった。毒爪で傷付け、少しでも早く水竜を仕留めに掛かったのが間違이었다。わざわざ空から離れ、水棲竜のテリトリーに 不利な状況を作った。

軍配はガノトスにあがる。爪は深く頭に食い込み、深い傷を負わせたのは間違いないがガノトスの逃走反射が引き起こす、身を隠す習性がリオレウスを水中へ引きずり込んだ。

しばらく 深く潜れば毒の痛みは消えると勘違いしている内に、頭を抉る爪の主がもがいているのに気づく。抜けないのだ。水中だから自由が利かなかったのもあったかもしれないが、何より幼態の火竜はまだ脚力が完全ではなかった。リオレイアだったらまだ訳が違ったかもしれないが とにかく、大空の覇者は海に墜ちた。

銀火竜が生き絶えてからも、依然として頭から竜が生えた姿は生活する上で迷惑極まりない。有機金属に近い物質が身体をコーティングしている銀火竜の性質ゆえ、腐るのも時間を要するのだが ついに、泳いでいる内に取れた。

水の抵抗をもつとも受ける、翼のある身体と足の付け根が離れ 今も頭蓋に突き刺さる毒の抜けた爪が、ちぎれて不格好な足を永遠に取れない王冠に思わしめるのだ。

これが現在有力な説だろう。理論付ければなんてことはない。結

局はただのモンスターであり、ただ生きているだけだ。

彼が心の奥底で迷信に怖じ気づいていたのは否めない。人の子であれば当然でもあった。だが、使命がある。ミッシヨンの障害は排除すべき。人類の歴史でこれは最も尊重される意思である。

ローグの思考を乱すようにガノトスに戻ってきた。相変わらず独特なトカゲ走りで倒木のカーペットを踏み締めている。

風船から空気が抜けるような音を噴出して両刃斧は片刃大剣に変わる。瓶の損傷はなし。狩りをすればいいだけ。

風切り音がした。ガノトスへの注意は途切れ、聴覚が鋭敏になる。これは気絶させた筈の彼女が放つ殺意の音色ではないか。

ローグは身を屈めながらヒルギの木々へ飛び込み、木の背に隠れた。直後にクナイが身近な木に突き刺さる。木陰から覗き見ると、倒木の道を挟んだ向かい側の木々の合間から漆黒の暗殺者が猛然と走って来ていた。

「ロオグウ！ 絶対に殺してやる！」

ああ。だから女性は苦手なんです。

忌々しい記憶が蘇った。数年前のとある小さな街。それはもう農作物に頼りきった田舎の街だ。ある教会で女性が教授を乞うたとき、子供が欲しいと言った。神の子が欲しいと。

ローグは、伴侶について説いた。生涯のパートナーが現れたとき、きっと御子を授かることでしょう。

女性は違う、違うと騒ぎ立てた。頭を左右に振り乱し、前髪が残像になって両目が黒く染まるほど。

私は神なのよ、神に相應しいのは同じ神だけ、二柱の神だけがジ

ーザスを産み出すことができるの。癩癩は他の巡礼者をひどく驚かせていた。

おお、ジーザス。神を崇めるために教会へ訪れているはずがとんだ勘違いを引き起こしています。

女性はシスターに引き止められながら、本堂の奥へ突き進もうとした。そのもえたぎるような双眸は壁に掛かった神の肖像画を映していた。

パイプオルガンが鳴り始めても、神よ、夫よと離ればなれの愛を演じた。荘厳な旋律に捧げられたソロパート。本当に自分がヴィーナスよろしく女神であると錯覚していた。おそらく、ローグが垣間見たのはほんの微妙な隙間だったのだろう。その程度すら片鱗だった。氷山の一角と言うべきか。その女性は、熱烈なる愛を抱いた狂信者だったのだ。

つまり、シャーリーは狂信者なのだ。節々の言動から垣間見えているのだから間違いない。

しかし今は肖像画から引き離されてただ叫ぶ程度のかわいいものじゃない。あるうことが、彼女の神に触れた罪は超大かつ許されざる行いらしい。そうならば罪償いは命を掛けなければならないらしい。現に今黒い刃を振りかざし 走るために振り子運動を繰り返す腕の動きが腹を突き上げるイメージトレーニングに見えなくもない 憎しみに歪んだ顔は彼しか見えていない。

弱りかけていた雨は天の邪鬼に勢いを増してきた。ガノトトスをバックにシャーリーが迫ってくる。木の陰と陰を渡るように森の奥へ逃げようにも、跳ねた泥と、雨に流れされ始めた泥の下に見え隠れするフルフルZメールの派手な色彩が道標になってしまふ。道案内のつもりでなくとも、死神を招いている。

目まぐるしく状況が変わる。さすがに彼女もガノトトスの存在に

意識を向けざるを得なくなっていた。彼女が追走する何倍もの速さで、心の臓を貫くべく巨塊が迫っているのだから当然だ。

シャーリーは突如として進路を曲げた。端から見れば磁石に吸い寄せられた砂鉄のようにも見てとれる。ナルガメイルはどこまでも黒いからなおさらだ。

一跳びで直角に曲折した効果はガノトトスにさほど意味を成さなかった。いくら視力が悪いと言っても、自然に磨かれ培われた感覚に従えば捕食者にとっての兎が跳ねたようなものである。尾をまると舵のように 面舵いっぱい！ まるで水中にいるような造作もない動きに、巨大な流線形の体軀は弧を描き、容易く木を巻き込みながらへし折り、大地を曲がりくねる。振動し倒れる木の葉に溜まった露が朝の洗面よろしく顔にかかる。

彼は一瞬躊躇う。完全とは言えないにしろ竜の怒りの矛先から外れた。代わりに、ローグを殺すと明言までした彼女は今や生死の境界が著しく弛んだ状態に立たされた。これはとんだラッキーだ、通常ならば。

凄まじい倒木の勢いによる雷鳴の模倣音が、じきに丸呑みされて長い咽道を通過する胃酸だらけの女性をイメージさせる。やがては白骨の骸骨へ変化し、それすら粉々の廃棄物へ姿を変えることだろう。それも容易に想像できる。

だが、それを本当に望んでいるのか肯定できずにいた。躊躇ったもう一つの理由は、心のどこかで彼女を恐れ、憎んでいるからに違いなかった。できれば消えてほしいと、黒く淀んだ感情による迷いを生んでいた。

そんなに離れていない場所から炸裂音が響いてくる。そしてあの音、圧縮された水流が空を切り裂くような ブレスの風切り。

ローグの足は水竜に切り開かれた森の通り道へ向かった。彼はこれに反故するつもりはないらしい。彼女は人間だ。決着を、引導を渡すのはガノトトスではなく人間に他ならない。いわば 魂

を浄化するのは、人間同士でないと不可能だ。

長い尾を揺らし、大翼をひきつらせる後ろ姿が戦慄を帰還させた。無意識に空っぽの胃袋に力が入る。次にあのプレスをくれば潰されて嘔吐どころでは済まされないかもしれない。

ダイダロスの斧刃が閃く。全くの無防備を極める尾ビレを抵抗なく切り裂いた。

同時に、ガノトトスの足元に黒い影がまとわりつく。一瞬影は形を成し、光を吸い込む黒のナイフを振るった。火花のような血が散っただけで次の瞬間ナルガメールの残像がガノトトスから離れる。二箇所同時に攻撃が加わったせいか、掠れた咳き込みの声をあげてガノトトスは体を回転させた。尾が木を尻ぎ払う。彼は自身を覆う影に倒れようとする木の存在を察知し後退する。

のけ反るように体を傾けるローグの前をシャーリーが駆け抜けた。凄まじいスピードは迅竜の眼光に似ている。

すでに後退するために体に力が加わっていて、まさしく命を心臓を投げ出した状態。彼は体が緊張に強張るのを感じた。

冷や汗が沸くよりも前に彼女は放射状にクナイを投げつける。ただし方向はローグとは真逆。ちょうどガノトトスが間抜け面を晒すところに刃の小雨が降りかかる。

いくつかは口腔へ吸い込まれ、一つは真珠を砕くごとく、小さな目に突き刺さった。黒と白の巨体が怯み、異物を取り払うように銀の王冠を被る頭を振り乱す。

すでにローグは動いていた。緩急のついた動き、というものだ。後ろへ退き背を反らせていたおかげで、ロデオの要領で前進への勢いを簡単に得られたのである。

前傾姿勢のまま、もがく顎の下へ突っ込みダイダロスをアッパースイングする。

人間にするのと同様、やはり全ての動物は顎が弱点のようで重いだけでなく鋭利な刃が付加された凶器による一撃はよく効いた。

顎を強制的に閉じられて下顎に打ち付けられた上顎は軽い脳震盪を起こし、ゆっくりと地滑りを起こした山肌のように崩れ落ちる。間髪入れずにシャーリーは飛び上がり、ノックダウンしたその頭に闇夜剣を叩きつける。両手握りで突き刺した剣は鱗を断ち、深々と柄までを隠した。ガノトトスは泥に伏しながらも、その一撃に、新鮮な魚がまな板で跳ねるように痙攣を起こしたのがわかった。

思わぬコンビネーションに驚かずにいられない。

狂気に駆られていることが幸となり、彼女の積極性を高めている。現状では相反する身だが、相性は決して悪くないようだ。

ガノトトスが起き上がった。スラッシュアックスの刃ではやはり限度があった。もしもハンマーだったなら顎は木っ端微塵に粉碎されてすでに絶命していたかもしれないが、さすが大自然の猛者といったところか。

シャーリーは剣を引き抜き、その場を離れる。再び起き上がった怒り心頭のガノトトスの咽奥から湯気のような息が立ち上る。体温の上昇に、黒く滑らかな鱗は光沢をなくしている。

だが、今状況は人間に傾いている。残念だが伝承はここで幕引きだ。

好機とばかりにダイダロスをふりあげた直後、胸に衝撃が走った。深紅の胸当てにクナイが生えている。理解が早いことを呪うべきだった。意識した瞬間激痛が身を支配した。

バカな。いや、やはり素晴らしい。いやいや、この程度は予測できたはず。たまたま息があったように思い込み、真実を取り零していたのは他ならぬ自分ではないか。彼女は全く何も感じず、ただ邪魔なファクターを取り除こうとしただけ。それでも飛竜を仕留めるには時間を浪すると判断したまでのだろう。

結局時期を早めただけ。それだけだった。

位置が位置なだけにローグはひどく取り乱していた。指を切って流血しているとき、指先が脈打つ感覚。それが胸に起こっていた。生涯決して遭遇しないであろう修羅場の惨劇の具体例がたった今その身に降りかかったのだ。防具は貫かれ、一点を突くことに長けた高殺傷力の武器は肌を突き破っている。

ダイダロスを取り落とし、声にならない声が漏れる。ガノトスはこれよりはるかに超大な不快感を味わったのだろう。鉄の冷たさは皆無であり、むしろ、たぎる血の熱さがじわじわと頭蓋を侵食し始めた。脈拍数が異常に上がっているのだろう。異物に対し、自然と手が伸びる。

ダメだ、“こういう”場合無闇に引き抜いてはならない。それこそ、風穴の空いた血の循環器が勢いよく火を吹くことになるぞ！
真っ赤な血の色をした火炎が胸から発射されるシーンを思い描くと、くらくらした。熱中症にのばせたような感覚。

早くも視界に変化が表れ始めた。雨は依然として強いが、幸いにも霧は晴れているというのに。“霧がかかったみたいだ。”
ガノトスの頭が持ち上がる。両翼が天を仰ぎ、長い首の皮下を“何か”が盛り上げ、徐々に口の方へせり上がり移動している。

さて、今度は嘔吐するほど溜まってませんよ。ああ、代わりに赤い吐瀉物を盛大にぶちまけそうですけど。

血と雨で水気を帯びた赤いメールは、次こそ風穴を空けることになる。むしろ一度耐えられたこと自体が奇跡だったのだ。奇跡は再び起きるか起きないか、それはもう決まっていた。最悪の結果が想定される。

氾濫のような水柱が大口から解き放たれた直後、プレスに掬い上

げられる感覚が彼の全身を支配した。

雲のような軽い感触。甘い香りが鼻につく。死とはやはり超常な状態へトランスすることなのかもしれない。雨がぴしゃりぴしゃりと体に鞭打つ。

「どうしてでしょう、気付けば助けてしまっていました」

耳鳴りがする。誰かの腕が肩に回されていた。体温は急激に下がり、なお出血の止まらない脆弱な体では俯くことしかできない。だが、視界に映るドレスの裾とその声は間違いなく幻ではなかった。

ローグは木の上に降り立った。ミザリーはその恐るべき跳躍力で男一人抱え、二つの脅威から数メートル離れた場所にまで退避してみせたのだ。

木がねじ倒される騒音がする。木の上からでも、ガノトスが作った倒れた木が敷き詰められたカーペットが見える。そしてそこに鎮座する王の姿も。

ローグは満身創痍では不可能な早さで枝から飛び降りた。木の間からガノトスが暴れている様子が見えるが、シャーリーの姿はない。それどころか、見慣れない何かがいる。シャーリーに劣らない、もしくはそれ以上に俊敏な“白い”影が竜の足元で跳ね回っていた。赤。いや、太陽の橙をしたプレートがガノトスの腹をえぐる。

噴水のように血が迸る。それこそローグの想像上の吐血など比にならない、圧倒的な噴血。

呆然としているローグにミザリーが追い付いた。彼女は肩を叩き、指で指し示す。その先にはダイダロスが落ちていて、寄り添うようにシャーリーが倒れ伏していた。

「大丈夫です。イオは戦術に長けています。彼女は気絶しているだけです」

これまでの彼の努力が死をもって幕引きするような事態にはならなかったようで、安堵を噛み締める。

「わたくしはあなたを信じることにします。彼女を殺さないでくれて、ありがとう」

ローグは頷く。ミッションはクリア。コンプリートといいいいしかし、新たに生まれたミッションをどうにかしなければならぬ。顔面蒼白ながらもダイダロスを手に取り、戦いに向かう。ミザリは止めようとしなかった。見殺しにしようと思ったのではない。彼が武器を拾い上げ、いざ異形の王に立ち向かわんとしたときには、伝承の中から抜け出した騎士長が陽炎を纏う大剣を手にし、ずたずたに切り裂かれて崩れ落ちるガノトトスをバツクにして二人へ悠々と歩み寄っていたからだ。

白い影、まさにそんな比喻が似合う純白の鎧。雨と血が合流して表面を伝う鎧は金属質でありながらなめらかだ。

古龍の大剣か。これは姫のナイト様に相応しいようです。

伝承に新たなページが加えられる。

嘆く異形の王は騎士によって天に召された。魔女の呪縛から解き放たれた王は、亡き妃の元へと辿り着くことでしょう。

5・放浪久遠

イオ・ベルナデーロ・マリアング。名は偽造名。本名はない。褐色の肌に際立つ白銀色の髪を持つ竜人。いずれも母からの遺伝によるもの。遺伝性疾患によるものではなく、あくまで血の継承による反映。人間年齢に換算すると二十歳。純血の竜人にしてはやや若い。母はイオを産んだ際に死亡し、父は彼が産まれてすぐ両足で立った瞬間死亡。理由は突然の飛竜の襲撃。建物は全壊、全焼。死者は村民全員。武器を取る間もなく黒狼鳥の群れ。正しくは争い途中の敵同士。の前に倒れた。仮に抵抗していたとしても、紫水晶の輝きを放つ堅牢な鎧の前に剣は真つ二つに折れ、跳ね返った刃に首を断たれるのは想像に難くない。

唯一助かったのは赤子でありながら野生の本能として“産まれた瞬間逃走が可能になること”を遺伝子にプログラミングされていた彼だけ。大きく砕けた瓦礫は偶然にも赤子を潰さなかった。

小さな容姿と褐色の肌が彼を闇に溶け込ませた。泣き声一つ挙げない無垢な心が存在を薄めた。文字通り産まれたままの姿の彼は衣擦れの音一つ立てずに駆けた。

それがローグに対し彼自身が説明した簡単な素性だった。要するに、彼は孤独だった。

ローグはイオの持つキングテスカブレイドの熱で傷を止血して包帯を巻き、ミザリーが己の指を噛み彼に血を飲ませている間、何も言えずにいた。竜の血が持つ微妙ながら確かな治癒力活性の噂があったようなないような、いや、それよりも、アーメン。イオに神のご加護を。これまでの孤独にも、これからの障壁にも。

それからというもの、シャーリーの嬉々としたスピーチに三人は

少々うんざりしていた。

場所は姫の住まう大樹の空洞。イオに担がれている、気絶していたシャーリーは深い森から大樹の里に帰還するその時、ようやく目を覚ました。ただし、ローグはトラップツールに付属していた縄で彼女を後ろ手に縛ったため、彼女は状況を把握していない状態で彼に飛び掛からんとして、そこでようやく無力だと悟った。

ミザリーとイオはいかにして足場のない浮遊する居住地へ帰るのか、ローグの疑問は尽きることはない泉のごとく難解を極めていた。が、彼らは谷の崖に向かうように歩を進めている。そのため、今まで見えなかった 見ようとしても霧に阻害されるばかりだった未知の部分を知ることになった。

谷の岸に架かった一本の根が、谷底からは見えなかった樹幹の亀裂にまで伸びていたことから ああ、道理でわからなかったわけだと一人納得した。

根はまるで橋のように平らで、何者かによりそれが誰なのかは、姫に従ずる者がいるのだから言わずもがな 整備されていた。暗いクレバスを通ると、小さな空間があった。祠のような、広い球状に開けた佇まいの、自然の流れに構築された洞穴だ。

本来根の隙間に当たる部分には土が積もり、土壌がすっかりとしている証に草原顔負けの草が生え渡っていることから、底抜けの心配はない。はるか上まで突き抜けた空洞からどんよりした空が垣間見える。

レンガ調の建物はこの空間にまで貫いていた。道理で固定材がなくてもいい訳だ。隙間なくぴったり嵌め込んでいるに違いない。巨人の存在がやや現実味を帯始める。ここにドアが備わっていることから、正面玄関なのだろう。ローグの実践した不法侵入が正規なものと思えるほど、正面ではない。それこそ樹の内側にひっそりと描かれた建物の絵だと言われれば こんな樹の内をくりぬいた鳥か獣の巣のような空間に、客をもてなす顔があると認めたくないとい

う意味で　　納得できる。

仄かな光を帯びた白い菌類が散らばる空間は陽光がなくとも明るかった。邸の前の草地に降ろされたシャーリーは不気味に微笑んでいた。あれほどの憎悪をたぎらせていたのに、今は飛びかかるところか微動だにせず彼らを見つめている。イオとミザリーの存在はやはり大きいようだ。

彼女曰く、魔女は死んでいないという。騎士が生きているのは　イオのことだ　　つまるところ魔女が最初から存在せず、呪い自体あり得なかったからなのだそうです。当然だ。いわれもない殺意から晴れて解放されたローグにとってなんとも嬉しいニュースである。それでも作家　　その他大勢無実の罪で殺された旅人は帰ってこない。

魔女がいないのなら、お伽噺は作り話だったと？

ローグは問う。彼女は頭を振り乱し、黒い前髪を残像に眼を黒く染めた。見れば見るほどの狂信者を彷彿とさせる。

違う、“魔女は存在するのよ。”

ただ、ここに来たのは偽者。弱い魔力だったから王にしか変化の呪いをかけられなかった。

彼女はガノトスという魚竜について何も知らないらしい。おそらく、銀火竜がガノトスに森の覇権を巡る戦いを仕掛けなければ、リオレウスの足が食い込み、ちぎれたりなんかしなければ、ここまでする進捗しなかっただろうに。

偶然が重なり、天文学にも等しい事象がこの地に集約されたからこそ、シャーリーの異常性は微々たるものではすまなくなった。いわば彼女を殺人に導いたのはこの霧の織り成す紛い物の奇跡だ。

薄明かりの空間に糸のような光の筋が落ちる。二倍、三倍と徐々に二乗されていくそれらは雨だ。大樹に空いた空洞から牙を剥き襲いかかる粒子。シャーリーは曇天を仰ぎ、肩を震わせて笑い始めた。

「魔女はいる！ 運命を奪う魔女！ 時を司り未来を奪う魔性！それが来るのよ！」

雨粒を飲むように口を開き、狂ったように笑い続けた。目が雨粒の冷たい衝撃に悲鳴を挙げようと、見開いた両瞼は灼熱の大河を細かくくねらす瞳を収めている。

訂正しよう、彼女はただの被害者ではない。自ら妄想に身を捧げ、狂うことを望んだ、希に見る異質な被害者だ。

イオがローグの肩に手を置く。石像のごとき不動の仏頂面が言葉なく語る。ミザリーがその背から顔を出し手招きの仕草をした。

機密に案内しましょう。

邸の内部は螺旋回廊になっていた。交互に積まれたレンガの壁に箱形にくり貫いたような穴が等間隔に空いていて、その窪みにはモダンな雰囲気醸す小さな蠟燭が置かれている。

さほど歩かない内に平らな小間に出る。そのまま回廊を突き進むための廊下が闇にひっそり伸びる傍ら、白塗りの小さな扉があった。穢れのない純白の塗料はミザリーのドレスを彷彿とさせる。いや、間違いないローグが不法侵入したあの鳥籠の部屋だ。

扉を開くと案の定そこはステンドグラスの下に広がる縦長の部屋だった。垂れ幕が豪華なベッドが目に見え込む。

ミザリーは素足のまま絨毯を踏みしめ、泥の色をした足跡をペイントしながらベッドに向かった。

徐に、彼女の手は皺のない真っさらなシーツを引き裂き始めた。文字通りシーツという個は失われ、個を形成していた因子という名の布切れは宙を漂う。羽毛が、墮落した鳥のように飛び散る。

彼女の手が止まる。シャーリーを思わせるヒステリーな状況の余韻が舞う中、暴力を振るっていた腕をベッドに空いたクレバスに優しく突っ込む。

秘密を隠す上で誰もが犯しがちな過ちである場所　ベッドの下

正確にはベッドの中から、彼女は箱を取り出した。灰白色

極めて白に近い黒、いや、燻る硝煙だろうか。なんとも禍々しい色をした、丸いオルゴール型の秘密箱。

「それが機密ですか？」ローグはやや落胆した声で言う。「ずいぶんかわいい秘密ですね」

静観していたイオが彼女へ近寄る。歩み寄る最中彼は白鋼の碗甲を外していた。小麦色の肌は傷ひとつない滑らかな鱗を連想させる。

「ある人物の出生記録が納められている」イオは言った。「国を統べる者の名が記されている」

ローグは唾を呑み込んだ。これは甚だしい。今どこかの国の玉座に君臨する内の誰かは不純な方法でのしあがったということですね。イオはローグの言いたいことなど、幾度も聞いたことがあるような理解の表情を浮かべる。

「ミーティアは記載こそされてないが、紛れなく王族の血を引く者。これに記されるはもう一人の姫」

彼はミザリーを愛称で呼ぶ。箱を胸に抱く彼女の表情は何一つ変わらない。イオは続ける。

「この箱の五つの穴は見えるか？」

ローグは半ば促されるままに箱を凝視した。蔓紋様と蓮の装飾が消え入りそうなほど薄く彫つてある。そして、真正面には掌型の窪みがあった。その中心に掠れた目の彫りがあり、不気味にローグを睨み付けている。丸い箱に沿って、親指部分と小指部分があり得ない方向に曲がつているように見える。その五つの指先に、確かに穴が空いていた。

「これを見たものは必ず掌を宛がう」イオは掌をした窪みに少し間を空けて手をかざした。あとほんの数センチで指が彫刻に当たりそうだ。ミザリーの頬はぴくりとひきつり、翠緑の視線が彼の腕に集中する。「するとこの瞳の中心から毒針が飛び出す」

イオは外した碗甲の袖部を彫りに押し当てた。掌の形をした彫りそのものが箱の内側に押し込まれるように動き　スイッチが入ったようだ　ふてぶてしい眼から短い針が飛び出た。よく見ると濃い紫色の液がわずかに潤う程度に滴っている。下劣な鳴き声をあげて狂うゲリヨスが思い浮かんだ。

「仕掛けはこれだけではない」

もしも多人数が箱を前にすれば、一人を犠牲に払うことになるもののからくりがわかってしまう。次の人物は毒味を終えて悠々自適の笑みを浮かべながら五つの穴に指を差し込むことだろう。

「この五つの穴の内、人差し指と薬指の穴はフェイク。ここにも針が仕掛けてある」

勝ち誇った笑みの人物像がローグの脳内で倒れた。もはや実力行使に入るしか手立てはない。

さすがにイオはこの仕掛けを見せることはできなかった。もしそ

うすれば呻きながら毒に蝕まれて息絶えることになる。

「この箱は見ての通り黒とも白とも形容し難い色をしているが、これはある五色の色彩を持つ甲殻を融解融合させたからだ」

用いた色は紫、黒、赤、青、白。それぞれ古龍が纏う、類をみな強度の殻を使った。霞龍オオナズチの接合中和にとんだ柔皮、鋼そのものの黒をしたクシャルダオラの最硬時期の甲殻、同古龍の脱皮直後に酸化を停止させた全き白。そして炎龍の雌雄の二色。

白と紫を多めに配分した結果、あらゆる刃や弾丸はたちどころに砕け散りいなされる最強のオルゴールが完成した。実力行使をしようなら、龍すら恐れる究極をぶつけなければならない。現時点で存在しない。

イオはローグまで寄り、その腕を掴んで箱を持つミザリーの前まで引き寄せた。

「開ける方法は簡単。私の親指とミィティアの中指、ローグの小指をそれぞれに差し込めばいい」

言うが早く、イオに掴まれた腕は箱へ動かされ、小指が差し込まれるように誘導される。同時にイオも碗甲を外しておいたほうの手で親指を差し込んでいた。ミザリーも同様に、華奢な中指を突っ込んでいる。

間を空けず箱の天面の蓋が勢いよく開いた。蓋はミザリーの鼻頭の寸前で止まった。睫をぱたぱたさせて瞬きをしている。さすがに驚かざるを得なかったようだ。

思いの他箱内部のスペースは底が浅かった。十中八九仕掛けに大部分を使っている。

出生記録。それと思われる羊皮紙が一枚、正方形に折り畳まれてそこにあつた。

「この仕掛けを解くのは本来不可能に近い。竜人の親指、半獣人の中指、人間の小指でなければギミックは反応しない」

それは大層な仕掛けですね。ローグは呟いた。イオは答える。

「正確には鉤爪、湾曲した爪、丸い指先。それぞれの指先の基礎体温を計測して仕掛けが反応する。先読みタイガー、見透しグレイス、岩削りベリグラが造り上げた究極の宝物庫」

ミザリーは指を引き抜き、羊皮紙を取る。二人も指を抜くと箱を凄惨極まるベッドに置いた。

あの三人が作ったというのも間違いじゃなさそうです。あれほどの天才はそうはいない。しかも三人の人種は異なっていた。だからこそ思い付いた、異色かつ未開を保ったパンドラの箱。いや、それにしても。

「ミザリーが半獣、とは……？」

「猫という生き物はご存知か？」

ローグは肩を竦めた。

「ドグマでロストテクノロジーが発掘されたのは、ご存じだろうか」

有害物質が非常に多く含まれた石板、脆く碎けやすい水晶、車輪の付いた鉄塊、弦の無いボウガン……。どれも価値のないものばかり。言い換えるなら、せつかくの素材が巧く使われていないものがほとんどだった。

中には無傷で発見された異様な箱形の物質もある。研究機関による実験では、手紙のサイズの挿入口があっても特に何かが起こる訳でもないと実証されていた。保存のための挿入口かと思いきや、数枚入るだけでたくさんの保存に適していない。古代人の残した物だとしても、あまりに不便なものだ。要するに、有効利用ないしは今後の参考になる物質はなかった。

「その中に、アイルーに極めて近い生き物の骨格があったそうだ」

イオが言うにはこればかりは大変興味深く、おそらくアイルーの祖先だと学者の中で定義付けられているらしい。

耳、眼、顔付きなどあらゆる体骨格が酷似しているが、アイルーのように二足歩行に適した下半身ではなかったようだ。ある学者はモンスターの一種だと考えすらしている。現在獣人種はれっきとしたモンスターと位置付けされているのに対し、骨格だけでは明確な性格が解明できない。アイルーの裏表激しい気性を省みれば普段は温厚であると考察されている。

なにせ、爪がないのだ。正確な理論に基づいた言い回しをするなら、普段見られないと言えはわかりやすい。

能ある鷹は爪を隠すという諺があるように、前肢の形状を見る限り自分の意思と筋肉収縮で、自在に凶器を出したり隠したりすることができるとい一つの見解がある。これはアイルーの手が進化する以前の形状だと考察される。

つまり、イオが言いたいのは、ミザリーは自在に爪を操れるということだ。尖った耳　これは今のところ竜人に見られる特徴だ。踵が地面に着かない足の形状も竜人のそれと同じだが、彼女の指先は爪の形に沿うように細く、若干盛り上がっている。おそらくその隆起した部分こそが爪が格納されている部位に当たるのだろう。とは言っても爪が隠れきっているわけではない。普段は人間のように

指の上に乗る形で露出している。それを自分の意思　力を込めたときなど、骨に信号が伝達された際にランポスよろしく鉤爪となつて表れるのだ。

はるか昔の生き物の特徴を受け継ぐミザリーは、その古代生物の遺伝子を備えていなくとも理論上獣人と呼ぶべき存在なのだろう。ただ、チャチャブーやアイルーのような小さな体ではない故に半獣人　エルフマンというカテゴリに属するのだという。

そして、機密箱になぜミザリーの指が必要なのか。それは穴の奥に細い針が通るほどのもう一つの小穴が空いており、そこを通してスイッチを入れなければ機構が作動しない造りだったからなのだ。それも鉤のように下方へ湾曲した形状でなくては届かない位置にスイッチが配置されている。イオの鋭い爪では届かず、ましてやローグの丸い指先では小穴を通ることさえできない。まさに彼女にしか不可能な芸当と呼べる仕掛け。

ミザリーは羊皮紙をローグに見せた。焦がした焼き印が紙面の上部で異彩を放つその下から、一家の家系図が記されていた。

ミザリーの母は竜人だった。なんの変哲のない、ただの旅人だった。

彼女は職がなく、明日の食事にありつけるかも不安な状況だったが、あるとき一つの噂を聞き付けた。それは、どんな身分、人種をも受け入れる桃源郷のような国の噂。竜も獣もわだかまりを持つことなく共存する夢のような国の話。

彼女はすぐにその地を目指した。

今まで、竜人だからと冷たい処遇にあつたことは少なくなかった。むしろほとんどが人種の違いからの冷蔑だった。竜人が人間と交流を始めたのはつい最近のことであり、能力といえば爪で引き裂き牙で噛み砕く野蛮なものとしか認識されていなかった。本当は違うの

に。体が違つてもちゃんと悲しみ、喜ぶ。ヒトとなんら変わらない地上の生き物なのに。

かすかな希望を抱いた彼女はその国についた途端、王の目に留まった。客人のリストに目を通し、実際に姿を見た瞬間彼の何かが爆発したらしい。王は求婚し、間もなく結婚した。それは彼女の想像を絶した世界。ただ平穩に暮らせればと願った漂流が、まさか女性としての幸せに辿り着くとは夢にも思わなかった。

竜人の生涯は長い。年を取り容姿が衰えるのも遅い。しかし王も同様に長かった。彼も竜人なのかもしれないが、それは御子を授かったときにわかった。王との間に設けた子は、身体の特徴こそ母親のほぼ全てを受け継いでいたが、赤子の手を初めて握ったときその小さな手に未知を垣間見た。獣の手だった。アイルーのそれと同じ、肉球のような色つきの掌。王は何も言わなかった。妃となった彼女も何も言わなかった。誰にでも秘密はある。だからこそその国にいるのだから。

しかし、幸せも長く続かなかった。

幾年が過ぎ、彼女が国に辿り着いてから数十年たった頃、ある集団が視察に訪れた。今で言うギルドナイトの格好をした人間の群れ。変化は一瞬だった。大虐殺が始まった。

人類の歴史は支配に塗りたくられている。今日ではだ**いぶ**穩和にこんにちことが運ばれるようになったが、当時は未知なる存在を恐れるあまり強硬手段に着手するのが人間の心だった。

ギルドナイトは王妃にはすぐに手出ししなかった。その程度配慮できたのは、少なくとも知能ある種としての理性という最後の砦が崩れていなかったから。しかし尖った耳と捕食者を彷彿とさせる竜眼を見た次の瞬間には凶刃が閃いた。

王は少しの間取り調べという名の品定めが行われた。結論は凶。そもそも勝手な立国であると告げる。それは建前であり、やはり牙と獣の目を持つ者は人間にとって仇を成す存在であると解釈され、

命を奪われる顛末に終わった。

「当時ギルドナイトを率いていたのは、紛れもなく竜人でした。あの血にまみれたような金色の眼を、忘れたことはありません」

なんとも矛盾した話。異種族を淘汰すべく招集されたナイトを率いるのは目的の異種族。結局、不法な立国やら人種やら関係ない。ただ暴力を振るい富を貪りたいだけ。愚かで救いようのない劣等種。それが人間。

そう言うミザリーの顔に憎悪が揺らめいている。両親が殺され、国を滅ぼされたにも関わらずなぜ彼女がまだ生きているのか理由はわからない。だが、たしかなことがある。

今はギルドマスターに君臨するその竜人にこの出生記録を渡してはならない。誰かもわからない名が記された紙切れを絶対に守りきらなくてはならない。それが今確認できる唯一の使命だ。

羊皮紙はイオの鎧の内側に隠すことになった。古龍の鎧はそう簡単に碎かれることはなく、彼の實力に並の刺客はひれ伏すことになるとの結論からそうなった。

彼らが旅支度を終えて玄関を出たときシャーリーの姿はなく、代わりにほどこかれた縄が捨て置かれていた。だが闇討ちはもうない。彼女は変わりつつあるはずだ。なにせ頼るべく存在は事実上死に、信仰の対象となる姫と騎士もこの地を去る。いずれ自らの犯した過ちに気づくだろう。

空は変わらずに曇り空を広げている。

雨が降り続く中、彼らは谷を出た。一刻の猶予もない。北のリフエウスまでおそらく一月ほどかかる。それまでにギルドの粗搜しの

手が伸びた街を通るかもしれない。この機密を守り通し、ミザリーが今日まで抱いてきた憎しみを無にするような事態にならないようにしなければならぬ。

それはローグにとって他人事かもしれない。実際に自分の危機が訪れなければ動こうとせず、献身的に他人に全てを捧げる人間はそうはいない。だが、咎負いサリーの使命は彼にとっての宿命に等しかった。仮にそのような命令がなくなるとも、神ならばきっとこの運命に廻り合わせるよう計らっただろう。彼はそう信じている。

ローグが一人で通った行きの道中より霧がいくらか薄らいでいる。その恩恵は、彼に、ある真実を伝えた。

「あれは？」

森の中、小さく開けた丘に石板が並んでいた。
イオが答える。

「墓だ。彼らがこの地に来たのは私達が樹に住まうようになってからずっと後のことだった。現在ではあの女性しか住んでいないが、この十年の間は衰弱死した者が大勢いた」

なるほど、アーメン。ローグは丘に向かって手を合わせた。

しかし、納得いかない部分がある。

老翁がいるではないか。シャリーだけの孤独の谷ではない。

霧が流れ始める。風の大流が谷を吹き抜けようと、ローグの脇をすり抜けて通っていく。ミザリーの髪はたなびき、木がざわめき叫ぶ。雨が傾き、何百もの矢となって目を突かんとする。彼は丘を見た。

老翁が立っていた。墓石の前で、微笑んでいるように見える。

それも束の間、バケツをひっくり返したような勢いの雨が唐突に降りかかり、彼の目は反射的に閉じられた。次に目を開けたとき老翁の姿は消えていた。メイルの皮下で雨とは違う冷たい流れを感じたのは、この地に来て二度目だった。

「少し待っていてください」

彼はそう言い、小高い丘を泥に足を取られ滑り落ちそうになりながらも駆け登った。鼓動が煩く鳴っている。化け物見たさの行動だった。

果たして読み取れたのは“故ティンプセンの墓”。それが全てだった。

道理で翁が谷を追い出そうとしたのかわかった。おそらく、孫娘の凶行を止めたかったのだ。愛しい孫が見るに絶えない闇に染まる姿に変わっていくのは、現世に残滓を留めるに十分だった。

ただ、犠牲を増やしたくないとした翁にとっての幸運は、まさか願いが叶えられようとは思ひもよらなかったことに違いない。

あの微笑みは、おそらく“もうじゅうぶん”なのだろう。

ローグは恐怖など微塵も感じていなかった。ただこの世界の未知なる領域を垣間見たことに感謝し、敬意を表していた。スピリチュアル・シーン。心霊体験と呼ばれるそれは見下した目で見られることが多い。だが、翁の思いに霊もクソもない。紛れのない愛が成した。いや、この霧が引き起こした“真実”の奇跡だ。

丘から見下ろすと、ヘルムを被り神話の十二柱の神のような面構えをしたイオと、頭と肩を覆うフードで雨をしのぐミザリーが見上げている様子が見えた。イオのほうは兜の神々しさかわからないが、ミザリーはゆるく微笑んでいた。

わたしはこれから姫を守らなくてはならない。いや、それは騎士の役目か。ならば、小間使いにでもなんにでもなろう。すでにサリーの召し使いも同然なのだから、お安いご用です。

彼らはただ、久遠なる世界を進んでいく。雨が歩みを妨げようと霧が行く手を眩まそうとも、晴れる日は必ず来るのだから。

5・放浪久遠（後書き）

曖昧だったことは後々別チャプターで説明しますので、未永くお待ちを。

* ライナーノーツ

An initiation chapter,
Divide the sea.

characters

「自由になりたいなら、まずは我慢すること」

《海割りローグ》

性別：男

年齢：不詳

容姿：髪を全て剃り上げた坊主頭。眉尻が緩く下がり、優しげな伏し目に青い瞳。

筋骨隆々。

赤いアルビノ装束は彼の信仰する宗教の指定服だとか。

詳細：コードネームしか判明していない旅人。

行く先々の宗教を観察しているらしい。

「籠の鳥が哭いているのなら、きっとあの空へ放してあげます」

《ミザリー・ティア・ルドリュース・コーウェン》

性別：女

年齢：不詳

容姿：濃い緑色の、腰まで届くロングウェーブヘア。
質素なホワイトドレスローブに身を包み、白いヴェールで顔を隠す。

絹のように白い肌に翠緑の竜眼。ピンクの唇から覗く、尖った牙が印象的。

詳細：獣人と竜人の血が流れる女性。

機密を所有しているために秘境へ匿われている。

ある大国の王と貧民の間に生まれた。

母親は竜人であり、当時は汚らしい種として蔑まれていたため
母娘共々処刑されることになったが、その際に身辺調査が行われ、
同時に王も素性を偽っていた半獣人^{エルフマン}であることが発覚し、彼女の系譜は歴史上から姿を消した。

「いえ、素敵なお名前です」

《シャリー・ティンプセン》

性別：女

年齢：二十一

容姿：肩にかかる程度の長さの黒いストレートヘア。
スタイルも良く、わりと美人。

詳細：集落の住人。
霧に紛れる暗殺者。

感情が急激に昂るとヒステリックな面が現れる。

今までに訪れた無知な旅人を見境なく手にかけてきた。

数年前まで祖父と暮らしていたが、今や彼女は孤独の身となっている。

「結果として地に堕ちようとも、空を知った記憶が貴女を輝かせる」

《イオ・ベルナデーロ・マリアング》

性別：男

年齢：不詳

容姿：褐色の肌に白銀の長髪。黄金色をした切れ長の竜眼。

蓮が花開いたように逆立った後頭部の癖毛が特徴の髪型。襟足が女性並みに長い。

190センチの長身。

全体的に細いように見えるが、皮の内は凄まじい密度の筋肉が張り巡らされている。

周囲の色の黒と白の度合いで何度でも脱皮する“生きた鎧”を纏う。

詳細：純血の竜人。

“姫を護る物語”の名を与えられた騎士。

かつてギルドに所属していた頃は変色する鎧の特異な性質や、陽炎の剣を異常なほど軽やかに振るうことから幻騎士と呼ばれていた。

please

*【霧の町】mist・ミスト

霧深い谷にひっそり佇む小さな集落。

元々は集団移住した人々が見つけた隠れ里。時が経つにつれ、劣悪な環境に耐えかねた住人は姿を消していった。

谷の中央に浮く大木は信仰の対象になっていた。

*【創世の大樹】Hory princess・ユグドラシエル・

model・樹海(MHF)

楕円形の谷の中央で、野晒しの根に支えられ宙に浮く巨大樹。

大樹の芯は空洞となっており、飛竜が入れるほど広い。

幹を張り付いた邸は霧に紛れて滅多に見えることはない。

呪文に嘆く美しき姫の権化した姿と伝わる。

*【濃霧深山】Phantom valley・バルト溪谷・・・

model・旧沼地(MH)

かつてバルト領と呼ばれていた、霧が立ち込める非常に広大な地帯の総称。

元々の激しい起伏に、いつからか年中降り続けるようになった雨が来訪者を嘲笑う。

ぬかるんだ湿地と常に視界を白に染める濃霧が狩猟を困難にする。

ここに訪れる場合、肌寒い反面高すぎる湿度は食品の劣化と体調の変化を著しく促すため、十分な注意が必要。

*【陰陽湖沼】Phantom valley・バルト溪谷
墮落を司る陰の地域。

伝記にのみ名を残すその地には、睡蓮が咲く大きな湖があるという。

かつては婚礼の儀を挙げる美しい窪地だったらしいが、今や見る影もない。

Next story...
A commando chapter,
Rock breaker.
coming soon.

1・ウェルカム・トゥ・ポートルーティン（前書き）

これより遊撃篇です。

1・ウェルカム・トゥ・ポートルーティン

西の風が止まない。岩間を吹き抜ける奔流は砂色のジュエルを纏い、魔性の歌を歌う。

砂を乗せた風が走り去る地で、彼らは真っ昼間から酒を煽っていた。

濁った空気が充満する汗臭い酒場では、大概の人の声は雑音というカテゴリに含まれているが、それらはまがりなりにも大きな響きとして反響する。

受付嬢のアイボリーが走り回る。両手をシーソーのようにして受け皿にビールと料理を乗せるブリーチエローの髪の彼女はクエストの受付はせず雑用に走る新米だ。明るい笑顔が狩りに疲れたハンター達を癒す。

載せているものが食物という点で同じテーブルがたくさんある中、あるテーブルで落ち着きのない様子の男　モルトウスは言った。

「また、ベリグラが掘ってるらしいよ」

彼の囲うテーブルには金色の酔いが少なくなったピアジョッキやモス肉のステーキが並んでいる。緑の葉のサラダは皆無だった。油分が多く、総摂取カロリーが著しく高まる肉のテーブルである。

「じゃあそいつのケツは血だらけだな」

小さく切ったステーキを口に運び、テーブルを囲う男達の一人が言った。皮肉混じりの汚い嘲笑がどこから沸くがすぐに喧騒に揉み消された。

話題のきつかけを作り出した男は顔をしかめて不機嫌を露にした。食卓くらい静粛な言葉選びをしてほしいものだが、これは恒例であって、言っただうにかなるものではない。ジョークはどこにでも存在する、人類の常なる味方。

「その可能性もなくはないけど、残念だが城の話だよ」

てめーは真面目な話が好きだな、と、また別の男が言った。受付嬢のはつらつとした声がどこか別のテーブルに向かって了解の旨を伝えている。

男達はハンターだった。その酒場はただの酔いどれ置き場ではなく、血で血を洗う修羅の場を往復する者が必ず足を運ぶ仕事の仲介場だ。

どんな時間でも往く者がいれば還る者もいる。そんな場所ではやはりさまざまな人が入れ替わる。男達はいくつ今しがたボレア砂漠の潜口竜を討伐し、大しておめでたい訳でもないのに祝勝会という建前の大人の楽しみを敢行していた。

「お宝探しにご苦労なこった」

中年のハンターはそう言いフラヒヤビールをぐいと飲む。それからスッカスカの貧乏だの狩りに行かない臆病者だの、男達は検討違いの憶測を語り始める。

四人組で狩りを終えた彼らはいつも同じメンバーでクエストに出

向いていた。四人のまとめ役であり、最初にその四人を集めたのは、まじめな話が好きなと皮肉を飛ばされたモルトウスだった。彼はリーダーに向いている訳ではない。孤独に弱く、集団心理に忠実な気弱な青年だった。強すぎる威光ではなく弱い存在感が、男達のボランティア精神に似たものを沸き立てるのだろう。世界の男性諸君に必要な真摯さを、酒浸りに陥り絶えずアルコールの吐息を吐く彼らが備えているか疑わしいところ。つまり結成のプロセスは誰もわからないが、とにかく未だにチームとして成立している。

彼らは増長していた。リーダー性のない人物が纏める組織の最たる例として、組員の精神は図々しく成長を遂げているのだ。ただしそれは狩猟においては邪魔なものではない。積極的に自らの意見を述べることができる性格は、いわば進んで攻撃性を高め、好都合に恐怖心を薄める。ハンターの必需品である。それを発展させる点においては、気弱なリーダーは良い働きをしていると言える。

だが、やはり欠点も存在する。気遣いや繊細さを弱体化させた彼らは、平気で野蛮性を剥き出す。どんなシチュエーションであろうと下品なフレーズを含んだジョークを思い付き、何の躊躇いもなく吐き出す。

そういった人間が集まる荒れくれの町の中では、もはやそれこそが正義でありセンスであった。だが、彼らはその愚鈍なる配慮心のせいで思いもよらない猛獣を引き寄せてしまうこともある。ましてや話題に挙げた人物が、今まさに彼らのテールを、高い目線から見下ろしていることなど、全く気づいてなかった。

モルトウスは手元に置かれたステーキが暗くなっているのに気付く、何者かの気配を感じ取った。思い付くのは頬を真っ赤にし目をとろけさせた、最終局面へ移行した飲んべえ。彼はこれから絡まれる疎さに、ため息を吐く思いで座ったまま後ろに首を捻る。

赤い。いや灼熱。太陽より赤く、黒い、マグマの色。なおかつ死の色はどうやら滑らかに研磨された金属のようだ。爪を通さないために厚く膨らんだ弾頭形の胸甲が、振り向く彼の頭上に被さるよう

に突き出していた。モルトウスはその防具が何からできているのか知っていた。砂漠にいる間は絶対に狩ることも 見ることも叶わない巨竜の鎧。

モルトウスがその存在に気づいてから、状況ははつきり変わった。耳が痛くなるほどに賑わう声のオーケストラが終幕していた。誰もが呼吸以外の活動を止め、“見る”という慰め なぜもつと早く気づかなかったのかと 自身に向ける叱咤に対する謝罪に囚われていた。

皆が視線を向ける最大の理由は、“誰がやってしまったのか”を確認したいからだ。何をやったのか、それは疎ましい人物がいたとして、陰口を当人の前で嬉々として喋ったことに他ならない。今回の場合、その陰口は聞かれてはならなかった。なぜならその人物は本来言葉による攻撃を受けるべきではなく、明らかに妬みのみからくる陰口だったからだ。その場合、男達には正当な弁解はできず、完全な敵意を抱かれてしまう。

剛直な人格の人間は例え自分が悪くても、しばしば逆上することがある。だが、今回に至っては逆上することを許されない存在に喧嘩を売ってしまった。つまりはるか格上の強者を妬んでいた。

強者に挑んだ前例がなかったため何が起こるか誰も知らなかった。それゆえ未知なる報復を回避しなければならず、そのためにひそひそと陰で嫉妬を発散せざるを得なかったのだが、どうやら裁きの時が来たようだった。砂漠を渡ってきた風が建物にぶつかり生じる、隙間風の揺れるような音が静寂に木霊する。

「悪口なら、もっと暗いところで言え」

モルトウスの背後から発せられたその声は至って平坦な響きを含んでいた。小刻みに震える喉の動きが、鈴虫の羽音のように声を強調した。

その男はヘルムを被っていなかった。しかし、違和感はない。男

の髪色はメイルの溶岩に似たオレンジだった。太陽より若干暗みのある粘土のような明るい色。髪染めでしか見ることはないそれは地毛であり、ここ西の砂漠の町ではベリグラと呼ばれる男のシンボルマークにもなっている。

静寂が続く。彼は大きな眼を細め、瞳孔を細く閉じかけた。哀れんでいるのだ。面と向かつては何も言えない男達を。

ベリグラは集会場を後にした。背を向けて初めて姿を表したハンター用の巨大な激槍は、隙を隠すように　いや、むしろ背中こそが虎の面だとも言うように、周りに圧力をかけていた。後ろ姿が出入口のアーチを潜り、その姿を消しても、しばらく酒場は静まっていた。モルトウスの仲間達の顔には珠のような冷や汗が浮かんでいた。誰かが　舌打ちした。それが引き金になって徐々にざわめき立ち、瞬く間にいつもの酒場に戻る。ただし、その会話の内容は皆一様にベリグラへの悪態がほとんどだった。

モルトウスは、席を立った。

ベリグラは異様に高い身長で、大通りを歩いていても目立っていた。歩きたびアグナメイルの間接部が擦れる音が上品な音を奏でる。

「ベリグラさん！」

受付嬢がベリグラの後ろから走ってきていた。アイボリーはミディアムレングスの髪を揺らし、額に汗を浮かべている。

ベリグラは立ち止まり、彼女を見る。アイボリーは彼に追い付き、屈んで両手を太股に当て、息を荒くしている。

「アイボリー。何の用だ？」

「はあはあ、いえー、特に用はないのですけどー、これから用事あるのですかとー、聞きたかったりしますー、はふう」

膝に手をついたままアイボリーはベリグラを見上げた。かなり高い位置に頭がある。彼女が初めて彼と話したとき、確か二百は越えていると聞いたことがあった。

「特にない」ベリグラはアイボリーに背を向ける。「はやく戻れ」

ようやく息を整えたアイボリーは素早くベリグラの前に移動して仁王立ちし、目をつり上げる。加えて微笑む。

「そうはいきませんよお！ この前一緒に食事しましょうって言ったらうんって言いましたからね！ 絶対言いましたからね！」

ベリグラはうんざりしていた。そもそもその約束も、急な用事に出向く直前彼女につかまり、頷くまでクエストの受諾書にサインしない、と半ば脅すように強迫され、仕方なく取り付けたものだった。別の受付嬢に判を貰おうとしてもベリグラの前という位置にすぐさま移動する彼女は、端から見れば鏡芸をする下らない役者だった。

当のベリグラは生返事だったため、そんなことがあったのかと首を傾げる有り様である。

今現在の彼の表情は、アイボリーに読まれた。彼女はメイドベスのタイトなラインで際立つ締まった腰に手を当て、ピンクのルージユが光る唇を突き出し、まるで子供が駄々をこねるように不服を表す。

「私の受付デビュー祝いと思ったたらきつと楽しいですよ！ 奮発してくれてもいいんですよ！」

ベリグラは走った。強引に時間を奪おうとする挙げ句金銭負担まで要求しているのだ。厄介な事この上ない。

ヘルム無しと言えども、長大なランスを背負い鎧を着込んだ体は重いはずだが、おそらく背丈に恥じない身体能力を有しているのだろう。あつという間に彼はアイボリーの手が届かない迄に加速した。初速でその状態だ、追いつける訳がなかった。

「ベリグラさんの嘘つきー！ バカー！」

特に用もないのに彼女の期待を無為にしてしまったことに、彼は後ろ髪引かれる思いで町の路地を走っていった。

彼は町の外れに住んでいた。町の出入口となる看板に程近い空心地に一軒家を構えている。“ウエルカム・トゥ・ポートルーティン！”と、丁寧な筆跡で綴られている看板は、“ファック”、“ゴートウヘル”等と物騒な言葉が書き殴られている。何回も見ている彼の目には、注目すべき要素のないものとしが映らなかった。

馬小屋の納屋と見間違えてしまう小汚ない煉瓦積み的小屋に、頭をぶつけないように入れば、流しとクローゼット程の大きさを誇る収納ボックス以外何もない空間が現れる。

彼はまず背負っていたグレイヴディガーを下ろし、横開きの収納ボックスに納める。次にアグナメールのアーム部とメールを脱ぎ、最後にフォールドとグリーブを取り、それらを部屋の片隅に投げ捨てた。

彼は基本的に外食店で食事を済ませる傾向にある。食器も何も不要であり、アイテムの点検すらまともに行わない。彼が自宅に戻るのには、それ即ち就寝のため。用事も何もない。彼は質素だった。

戸の鍵を掛け、インナー姿で、藁藁きを重ねただけのベッドならざるベッドに仰向けに寝転がり、目を閉じた。太陽はまだ空にいる。夕焼けの燃えるような色まで残りわずかの昼下がりに彼は眠った。

眠ったはずだった。

「　　ベ－リーグラーさ－んっ！」

明るいブリーチエローを思わせるソプラノがベリグラの耳に届いた。ただしそれだけだ。彼は動こうとはしなかった。すでに眠りへ落ちようとしていたのだ。

「や－く－そ－く－！」

アイボリーは戸を隔てたすぐ近くにいるようだった。まるで親に締め出された子のような、そこにいれば戸が開くと信じている無垢のような。

今度は、鉄の戸を叩く音が鳴り始めた。ガンガンガンと、握りこぶしを叩きつけている力強い音だ。音がするたび、まどろみの暗闇が広がる瞼内に炸裂した徹甲榴弾に近いシルエットがよぎる。本能的に報せている。眠れない。

ベリグラは苛立ちを抑えながら起き上がり、戸へ近づいた。

彼は引き戸の鍵を乱雑に開錠し、勢いよく引いた。その境界を開いた時に現れた姿から、彼女が何か大胆な事をしようとしていたのは明白で　アイボリーはショルダータックルを彼の胸にお見舞いした。もっとも、それ自体が目的ではなく鉄の戸への無意味な抵抗だったのだが　彼女にとって思わぬ幸となったのは、渾身の突進さえ軽くないなされ、抱き着く形として収束しもっとも自然な状態と状況で抱き合えたことだろう。

彼女はインナー姿の逞しい胸板に顔を押し付けるように雪崩れ込むが、彼は全く仰け反ることもなかった。それどころか押し返す勢いすらあった。ベリグラの脚は獣の後ろ足に酷似しており、常に足裏で踏ん張っているのに近い状態を維持しているため後方への衝撃を易々と抹消したのだ。

無意識に、そう、望まずとも反射的に彼女を抱き止めた。仮に、

いくら疎ましくともそれくらいは造作もなく当然だった。筋肉のクツションに顔を埋めたアイボリーは驚きながらもしっかりと状況を把握していた。汗の臭いを嗅ぎ、安いドラマのように頬を紅潮させた。他人から見れば　特にアイボリーに好意を寄せている男ならばがっかりしてしまう光景だったが、あくまで彼女一人のドラマである。ベリグラはその脚本の渦中にありながら、台詞を覚えていない素人男優のようだった。　遠回りなカップルの最初期は、このように同調しないのが当たり前なのだろう。

「ベベベベリグラさんまだ早いですよいきなりそんなそんな！」

彼は何も言わず華奢な肩を掴んで引き離れた。思わず柔らかいなと口走りそうになっていたが、面倒くさい解釈をすることは想像できる。喉まで出かかった言葉を呑み込み、いっぱしの女性らしい花の笑顔を浮かべる新米受付嬢を見てため息を吐いた。アイボリーは周りが見えていないのか、ため息を気にする素振りも見せず、自分の世界を展開して腰をくねらすだけだった。こういうタイプの女性はずくづく幸せであり、男としても満更でもない気持ちにならざるを得ない。ベリグラが世の男性諸君と違うとすれば、本心から迷惑と感じていることだろうか。

ただし、ついには折れてしまうのは一般男性らしくもあった。いくら嫉妬の目に慣れていようと、敵意を以て睨む大衆の視線はいい気持ちになるものではない。言い寄る女性を断ることもせず、ずるずると引き摺る現状こそが敵意を引き寄せる怠慢なのだ。

ベリグラはとっくの昔からわかっていた。ようやく踏ん切りをつけたように言った。

「じゃあ食事だけだぞ……」

その一言のためだけに耳を動かし、自分の世界から急速に帰って

きたアイボリーはいつそう笑顔を弾けさせて飛び跳ねた。都合のいいことがちゃんと聞こえるのは、男には振りきれない甘いしがみを持つ女性の、デフォルトと呼ぶべき性質によるものなのは間違いない。

ベリグラは重苦しい手付きでアグナメールを拾い始めた。ある種の決心をした思いとは裏腹なアイボリーの喜びように頭を抱えたい一心だった。

間もなく日は隠れきり、暗い藍の空が星をちりばめ始めた。

二人は小さなバーに来ていた。とても狭く、雷光虫のランプ一つが照らす安い宿の一室ほどの小部屋はカウンターでの立ち吞みを提供している。

スツールも用意されている。アイボリーは座り、ベリグラはショットを片手に立っていた。

メイドベスト姿の彼女は夜の居酒屋で一際異彩を放ち目立っている。当然ギルドの華の隣に立つ長身のハンターも注目を浴びる。髭面の中年や若者は、誰が彼女を“落とした”のか、カウンター向こうを向いたままの　アグナメールを着こなす彼の顔を見ようと躍起になる。そして運良く見ることができた者は驚き、ついには失念しながら手元の気晴らしを喉に流し込むのだ。

彼女と正面から向き合おうとするベリグラは、今までの拒絶の思いの外楽しい会話を続けた。会話の内容の大部分はアイボリー自身の波乱の就職記（自称である点から脚色は否めない）をベリグラが相槌をうちながら聞くというスタンスで進んでいた。ときには自身の狩猟の話や防具作りに躍起になった下積みの話、火山島への航海の苦労、砂漠で出逢った風翔龍の恐怖など、ジョークを交えつつ語る。アイボリーは真剣に聞き入り、話が収束した際には安心しているのか笑顔を咲かせる。彼女はいつになく幸せに笑っていた。少な

くとも集会場で振り撒くそれとは違っていた。万人に向けた仮面ではない素顔なのだ。ベリグラはそんな彼女に好意を抱きつつあった。

イヤンクツクのモモ串焼き、酒のつまみの炒め古代豆もほどほどに客の姿は減っていく。バーのマスターもグラスの洗浄と払拭に取り掛かり始め、壁掛け時計の針は廻るべき一日の時刻を終え、新たな日の時を示し始めたばかりだ。

ほどよく酔いも回っていた。シチュエーションの効果を除いたとしても、赤みを帯びた顔はドラマを産み出そうとしている。

口数も減り、アイボリーはそわそわし始めた。

「あの、ベリグラさん……」

氷の頭角をわずかに水面から出したグラスに八分ほど浸かったマツコリを覗き、どこか物憂げな声色でアイボリーは言った。

「ベリグラさんは、いま、好きな人はいるんですか……？」

ついに来たな、と彼は思った。兆候は感じずとも最初からあった。いわば逃走本能だ、兆候と対面することを恐れていた。彼は人を愛せなかった。経験ではない。体験だ。アイボリーもいずれわかる。アイルーやリオレウスのような駆動に長けた脚の構造を持ち、ヒトを萎縮させる獣の眼を持つ半端者を、愛だけで包み込めることはない。あるのは寄り添う中での経過で膨れ上がる疑いと恐怖だけだ。

「いる」

氷が崩れ、空虚な音がバーに小さく響いた。彼はアイボリーを見ない。アイボリーは彼を見た。彼は何かを見ているようで何も見て

いない。 その中に私はいない。

「もしかして、サリーっていう人ですか？」

思いがけない質問に彼はアイボリーを見ざるを得なかった。濃いイエローカラーに覆われたつむじが目に入る。彼女は照れ臭そうに鼻を嚙り、俯き、マツコリを一気に飲む。

「私、いろいろ知ってるんです。ほら、ギルドってたくさんハンターさんが集まりますし、ベリグラさんの噂なんて日常茶飯事なんですよ」

お城を掘ってるのも、その人の命令なんですよ？

なぜ十年以上前のことを彼女が知っているのか、ベリグラは噂の無神経さを呪う勢いでショットを喉に押し込んだ。溶けた氷で薄まった少量のアルコールは渴きを潤してはくれなかった。

「サリーは既婚者だ。子供もいる。俺に付け入る隙なんてない」
「つまり好きってことですね？」

彼はアイボリーに体を向け、見下した。必然とスツールに座る小さな看板娘も見上げるように視線を合わせる。上目遣いの深いブルーの瞳に波がうっている。ベリグラはため息を吐いた。

「彼女はな、俺の恩人だ。母親とっていい。だから誓って言うぞ。俺の意中にいるのは俺と同じ金色の眼をし、俺と同じ足をした女だ」

アイボリーはふいと顔を背け、カウンターに向き直った。彼は全く女心をわかっていなかった。目の前で、自分とは違う女性をましてや永遠に到達することの叶わない、竜人の名を告げられたの

だ。成り行きとは言えわざわざベリグラに母だと慕う女性の名を出させたのも 彼自身に噂を払拭させ、そして改めて異性について考えさせ、自分という候補を意識させたかったからだ。

だが、どうしようもない。眼の色を変えるなど、包囲磁石の針のとき瞳孔を開閉できるようにすることなどできようか。脚は？ 折ればいいのか？ できるはずがない。

アイボリーは立ち上がり、足早にバーを出た。ベリグラに責任はない。個人の趣向を問われる掟は世に存在しない。かといって、彼女の手を掴み止めないのはいけなかった。明日からの取り巻きの加速した反応が懸念される。

彼はバーを出た。

深夜のポートルティンは月の応援も虚しく暗かったが活気だけは空元気を貫いていた。ボレア大陸で夜も昼も関係ない場所と言えば、ア rilニアと並び真つ先に口から出る町名なのだから、もはや当然でもある。

彼は自宅に戻った。彼女の姿はない。時計半周分巻き戻した時のわめきようが懐かしく感じられる。

光を許さない部屋でクローゼットを開けば、燦し銀を放つグレイヴディガーがベリグラに語りかける。“心の友はオレだけだろバディ？”

オーケイ、行こうぜ相棒。掘削機槍を背負えば、やはりこれだとしつかり噛み合ったような実感が湧いた。

バーに行ったときには持たなかった、焰騎士の鉄仮面を思わせるヘルムを被り、彼は“ゴートウヘル”の看板を尻目にポートルティンを後にした。

ポートルティンはボレア北砂漠の西に位置する町。その北西にはかつてボレア砂漠が国だった頃の面影を残した城壁跡の一部がある。城壁跡の辺りから砂漠は姿を変え、森の緑をちりばめ始める。

国境と防壁を両立したその地帯は変異域と呼ばれ、歪な円形の砂漠
飯に砂で満たされた地域をブラックホールとすれば　その縁
を囲う役割を担っている。

名の通り変異域より外側は森林が広がるばかりの大樹海となつて
いる。変異域はポートルーティンから一キロメートルもない近場に
存在する。荒れくれの集まる町は廃墟といえど立派な鼠落としての城
壁に守られ、親しみがある。ただし、唯一損傷が激しいのもポートルーティンに近い西ボレア城壁。それゆえ、定期的に廃墟を踏み越えるモンスターが現れ、森へ行く。そして、森より出ずる。

ベリグラの使命は、西ボレア城壁に近づいたモンスターを片っ端から狩ることだ。出るにしろ往くにしろ、とにかく狩る。なにしろ近くには人間の住む場所がある。ハンターも多い。どのみち目星がつけられたのは明白だ。

青い月が森の上空を　非常に緩やかに、滑るように傾いている。
仄暗い色をたたえた廃墟の近くで泥が跳ねていた。派手に飛沫を散らす音も丸きこえだった。ベリグラは点々とある岩場の一つに身を隠し、様子を伺っているのだ。瞳孔が開ききり、夜目に慣れてきた頃だ。

藍色に染まつた姿は昼間の姿と結びつけるに難く、輪郭で種を判断する他なかった。

ドグマでロストテクノロジーが発掘され、古代書の研究が盛んになつてようやく浸透し始めた　ティー・レックスという古の生物と酷似した体型を有する　獣竜種こそが今まさに泥浴びをしているモンスター。広範囲の土を抉るよう発達した巨大な頭殻が印象的なボルボロスだ。小さな前肢は遠目から見ると存在を消したかのように見えなくなる。それを補うほど有り余るのが後ろ足であり、砂漠のダンパーと呼ばれる由縁にもなっている。その勢いとくればちやちな岩群など石ころのように蹴散らす。要注意だ。

ベリグラはランスを構え、ボルボロスが転がっている水溜まりへ

走った。それは手ぶらの常人が全速力で走る速度に近い。ボルボロスは物音を聞き付け、ベリグラと真正面から向き合った。

グレイヴディガーが唸る。

回転する槍身が亀甲を描く甲殻を削り飛ばし深々と体内を貫きながら筋肉繊維を引きちぎった。

腹を抉ったランスは一度引き抜かれ、回り込むようにステップを決めれば紅蓮の騎士は肩と脚の付け根の間を突き刺す。銅鑼を叩くような重い悲鳴が挙がった。グレイヴディガーの刺突点を軸にしてボルボロスの屈強な体がくの字に折れ曲がる。

夜の闇の中景色と同化した巨体は水飛沫をあげて悶え始める。あまりのランスの勢いに沼へ横倒れしたようだった。ベリグラは引き抜く都度回転方向を切り換え、できうる限りランスを早く抜けるよう機転を利かせている。その技法はボルボロスに時間を与えなかった。彼は暴れまわるダンパーの首へ乗り、高速回転するドリルの切っ先を下にして突き落とせば、土砂竜のシンボルである鼻腔兼冠はミキサー状態ヘレッツゴー。エルトライトコーティングの微細刃は馬鹿ほどでかい頭をバラバラのミンチ肉に変貌させ　言うまでもなくボルボロスの絶命の証になった。

「いい運動になった」

ランスを背負い、ベリグラは城壁へ向かった。

2・メン・イン・キャッスル

城壁にぶつかる砂塵は海のさざ波のようにしっとりした音を響かせていた。

天井から側壁にまで走る巨大な亀裂を通して、元々休憩室だった部屋に月明かりが差している。オペラ劇のワンシーンに使われてもおかしくない本格的な造りの城壁は、スポットライトを浴びる劇場の主役さながらの趣を醸していた。

城壁は空洞とそうじゃないブロックで構成されている。空洞とはつまり、領域外を観察するための監視室であり、そうじゃないブロックとは防壁としての構造に従順に設計されたレンガの集まり。つまり空の箱と余白の無い箱が交互に並び、円状に繋がったものが城壁。

ビスがすっかり錆び付き、蝶番が今にも外れそうな正面入り口の扉は、天井が崩落した部屋の凄惨な光景を筒抜けに見せつけている。荒れ果てた空っぽの部屋は砂が積もり、立て掛けられた軍用銃も風化し、押せば散り散りに碎けてしまうと思える放置具合だ。

ベリグラは敷居のようにして分厚く隣接する壁を通り越した城壁の部屋の一つ、書斎に入っていた。部屋と部屋を移動する際、わざわざ城壁の屋上に登り、梯子で降りなければならない。壁の耐久性を高めるために通路と言えども空間を作ることによしとしかかったのだろう。城壁の屋上は一つの橋のように繋がっており、歩いて一周することもできる（あまりおすすめるはできない）。

地上十メートルほどの高さを誇る城壁屋上は辺りを一望できる。

恐らく、地上からの監視と並行して高位置からの目線による地上とは違った確認も兼ねるために、回りくどい構成にしたのだとされる。

書斎は損傷も少なく、月光を部屋に招き入れるのは窓だけで、至って荒れ果てた様子もない。

その部屋は本棚が壁に隣接している形で置かれているだけで、他に何もなかった。筆記用デスクも椅子もない書斎は、誰かの手記を生み出すために作られたのかは疑わしい。

ただ、疑わしきはそれだけではない。本棚はあまりに奥行きのある構造であり、本を並べるには余裕がありすぎた。両面に本を収納できる図書館のものを片面を無下に扱っていることに何か企みを感じる。

ベリグラは何度も廃墟の部屋に足を運んでいる。初めて書斎を見つけたとき、ただ本棚しかない部屋で知識の数々が並ぶことは、そのものに意味はなく“そこにあること”を疑ってくださいと　　ここごとく訪れる人々に語りかけているようなものだった。

だが、反転する隠し扉を彷彿とさせる本棚は押してもびくともしなかった。　　隠し部屋のセオリーといえば回転扉だろう。そのときばかりはベリグラの男としてのロマンが悲鳴を挙げたに違いなかった。

部屋の壁にはわずかな溝が走っていた。本棚の底辺と天辺の延長線上に位置し、本棚の裏に入り込むようにレールが走っている。それが地下通路を塞ぐ蓋を滑らす機能だと気づいてから、彼は毎日のように砂漠の地下へ潜るようになった。　　スライドした本棚の下、大口を開け、暗い地下へ誘う階段からは、悠久の間忘れ去られて閉じ籠っていた空気が溢れ出していた。それはかび臭い、というのがぴったりの臭気だ。　　もっとも、二度目からの地下入りでその臭いは確認できなかった。

連絡通路として開発されたであろう地下通路はボレア北砂漠を囲う環状城壁と同じように横曲がりのゆるいカーブを描いている。

そこは砂と岩石で埋め尽くされていた。階段を降りきったところで多少のスペースはあったがほとんど行き止まりと言って差し支えない。

小さな岩石は取るに足らないもので、厄介なのは砂だった。軽く量を伴わなければ風に吹き飛ぶかよわい物質には違いのないのだが、如何せん量が多すぎる。スコップで掻き出しても　どこかに穴でも空いてるのか　掃いたそばから沸くように滲み出てくる。

ベリグラは回転するランスを使い、沸くよりも早く砂を掻き出すことにしている。泉の源泉を手のひらですくって飲み続け、枯渴させようとする無謀さに等しい行為。そう思えば挑戦すること自体時間を無駄にするだけとを感じるのが常だが、絶えず回転力を付加する先進技術による発掘作業は効果的だった。

螺旋は、きりもみしながらエネルギーを押し出し進む。回転するエネルギーは螺旋の先の物質を巻き込み、末尾へ吐き出す。取り込まれる物質が砂　それも大量の場合、排出される先は常に外側となつて螺旋の中には留まらない。

外側にあつた砂は、グレイヴディガーが吐き捨てた砂に押し出されて自然に通路を追い出される。ないしは、壁際へ追いやられる。砂もただ力になびくだけではなく、負けじと　いい迷惑なのだが

雪崩れ込んでくるが、ただ通路の中心のみ狙つて貫くことで人間が一人分通ることのできるわずかな空間が維持されるのだ。

いずこより侵入する砂の勢いが弱いことも発掘を続けられることの理由の一つかもしれない。地表では体を埋めることが容易な北ボレア砂漠には、柔らかく非常に決め細やかな砂海が広がっている。いくら螺旋の原理を利用しようが、溢れか砂の力は本来ならば一メートルすら進むことは叶わないはずなのだ。

海の底に風穴を開けたとすれば、排水口にとぐろをまく水流のように、海を海として維持していたものは飲み込まれていく。　仮

に地盤沈下やモンスターの潜行による振動で地下城壁の一部が破損していれば、そもそも地下へ通ずる隠し階段を解き放った時点で、地下空間は砂に埋もれた不可侵域としてベリグラに姿を現していたはずだ。これはいいニュースだ。見えていない奥の情報は、彼が思うより健全なのかもしれない。

そして、衝撃をふわりといなす砂漠での発掘が順調なのは、地下通路だからこそなのかもしれない。

人工物としての景観を取り戻しつつある地下通路を掘り進む内、彼は砂に土の面影を見た。いや、ただ固まった砂。ただし、そこが重要。進むにつれ、湿り気を帯び始めている。ランスから伝わる感触もそうだが、見れば明らかだった。粘土質に変化していた。泥というべきか。

雨水が地中を降りていく内に染み出た水という見解もできるが、雨がめつたに降らないボレア砂漠では論外。なおかつ損傷が少ないとくれば、これほど幸いなことはない。

おそらく地下通路は、砂漠より外の領域に通じている。雨水の例が唯一正論として利に叶うならば、その仮説が現在最有力だ。

木の根が地下水としてる過させた水気は、森の地下と城壁地下が繋がっているのなら、行き先がある限り染み込んでいく。この地下通路が非常脱出口として作られ、森のど真ん中に通じているのなら、通路を伝って水気は分散する。

乾いた砂に辿り着いたる過水は限りなく頼りない。だが、それでもじわじわと長い年月をかけ、地下通路内部のみを奥から浸食する。その証拠に、掘り進めば進むほど砂は濡れているのだ。

始めは、さらさらした砂の飛散ぶりに苛立ちを覚えるだけだったが、かれこれ一年だろうか。地下通路は十メートルほどではあるが、遺跡として埋もれる以前の姿を取り戻していた。床は僅かに濡れており、暗く翳った色の砂は重たく飛び散る。松明の明かりがそのせいで消えたこともある。

砂に水気を感じ始めたのは二週間ほど前。砂に重みが増してきたのは一週間前。さらに泥らしい質感を帯び始めたのは今日このとき。

グレイヴディガーが泥塗れた。

通路の脇に泥の山が出来上がっている。

ベリグラの手に疲れが蓄積する。

突然槍の先が行方を失った。前のめりになるほど前方へ力を傾けていたため、思わぬ変化に、ランスごと倒れ込んだ。回転する槍身がレンガの床に擦れて金属音を発している。

膜が破れるように砂が崩れていた。鍾乳洞の天井のような刺々しい姿の膜の裂け目から垣間見えるのは、何かゆらゆらと光る暗い光景。

彼は少し後方で作業を照らしていた松明を取りに起き上がり、ランスの回転を止め、砂の膜を踏み越えて境目へ進む。アグナグリーブが音を立てた。

水が床を浸している。足元から波紋が拡がり、炎が水面でいくつもの三日月を作り出していった。

火を掲げると、暗闇が照らされた。地下通路の形状としてゆるいカーブはそのままに、ある位置の壁で明かりが反射しない部分があった。

壁に穴が空いているようだった。

砂が固まっているのは 通路を塞いでいたのはそこまでだ。穴の空いた壁から砂が漏れていたのかといえばそうではない。もしそうなら穴を中心に砂が通路を満たすはずなのだ。だが問題の壁からは数メートル間隔が空いて砂が詰まっていた。これは、つまるところ何物かが意図的に書斎側から砂を流し、通行不可にしたようだ。穴の空いた壁を調べるのは保留して通り過ぎ、通路に沿って歩いていくと、何かがベリグラの行く手を阻んだ。

松明で照らすと、また砂だ。砂の壁のように、通路は遮断されていた。今まで掘ってきた壁と同じように、大量の砂で満たされているのだろう。

意図的に穴の空いた壁が隠されていたのだ。書斎のある部屋の地下からだけでなく、別のどこから降りる地下からも、砂で埋め尽くされた壁が立ちはだかるようになっていてに違いない。この穴の空いた壁を中心とした小さな空間には行けないようにされている。あたかも自然に埋もれたかのように。

さすがにもう一方の土砂を掘り進むのは気が退けた。いや、しかもよいのだろう。すでに隠された空間は暴かれている。壁に空いた穴の先を確かめるのが先決だった。ベリグラは歩き始めた。

円を描くだけの通路でイレギュラーとして存在する分岐点。円から外れるように延びるその道も、当初の設計通りに造られたようで、城壁地下と同じ構造だった。

水はこの道から流れており 水気などという一番弱い可能性ではなく、浅い川のように継続的な勢いをもって隠し通路を流れている。困ったのは長さだ。松明で照らした限りでは先が見えなかった。足元を流れる水はろ過水だとは考えにくい。一切の砂を通さないように造られた地下通路で水が漏れ出すとは思えない。というのも、通路の壁に濡れている痕跡はない。ただ床を水が流れているだけだ。それは人為的に、と言って差し支えない。

外部の漏水や漏砂を断絶する設計の上に造られた道を、誰かが後になって封鎖したくて 砂を固めるために流したのが自然だ。

現時点では、封鎖された通路の性質しかわからなかった。だが、こうとも言えると彼は考えていた。

「 開放できるように、あえて弱いレベルで封鎖した」

ベリグラは一人呟いた。まっすぐに延びる真四角の通路はエコーを作り出し、独り言を繰り返す。同時にどれほど長いのかも知らしめる。

今頃、地上では空が明るくなり始めているだろう。思えば、こうして砂漠の地下にいうのも珍しいものだとは彼は感慨深く思う。そもそも砂漠の町に腰を据えているのも気まぐれだった。

ただ“当時”はハンターの概念すら無く、ハンターと呼べる専門の玄人も少なかった。砂漠は依然としてなにも変わっていない。デイアブロスの強さもその頃から認知されており、ティガレックスも正式名は無かったものの“虎縞の轟竜”として恐れられていた（今も轟竜という異名が正式に決定している）。その頃から彼は目的などなくただ気ままに、彼の前に立つ障害だけを排除してきた。

つまりベリグラは一種の世話心で町にいることになる。それは本人も自覚しておらず、ポートルティンの人々はベリグラが町に住み始めた頃はまだ少年。いや、はるかに幼かったため、結果的に彼が町を守っていることに気づかず、“クエストを受けない”人間という先入観を持ったまま今に至っている。彼の他にもハンターがいることは確かだが、人々は何も知らなかった。気まぐれにせよ、結局は彼が砂漠に縛り付けられている理由を。

歩き続けて三十分ほど経っていた。ただ松明が消耗し、グリーブの摩擦音が規則性を持って鳴っているだけだ。

「サリーは今、どこにいるんだろう」

少し気をそらしたせい、彼は気づかなかった。暗いせいでもあるが、前方にようやく壁が現れ、盛大に顔面をぶつけてしまった。かがり火が扉を照らした。

扉は軽かった。暗闇のせいで全容を把握することはできないが、

扉自体に破損や老朽化の兆しはない。そういう意味では軽い手応えは嬉しい意外性だが、理由はそんなポジティブなものではなく、向こう側からの勢いの凄まじさによるものだった。

そうして啞然としたのも束の間。闇に慣れてなくてもわかる、かがり火を照り返すもの。まるで再会を待ち望んだ伴侶のように飛び込んだきたのは、音もついてこないほどに強力な瀑布と化した水流だった。

思わぬ展開に焦ったベリグラは転倒する寸前で通路脇へ、体ごと投げ出すように逃げ込み、かろうじて 嵐の日の川に運ばれる木屑の惨劇を回避する。楔から解き放たれた水流は余りある勢いで暗黒の中を流れていった。

遺跡か秘密基地だと思えたそこは、排水溝だった。おそらく森の湖の底に位置する。ガノトスが頭を突っ込んで流れ出てくるとは思えないが、このままだといずれ湖は干上がってしまうだろう。ただし、そう遠くない未来にボレア城壁の地下は水路と化することになるだろうけども。

いずれにしてもこの場所の存在理由は理解できない。

ただ止まらない流れを見る内、唐突に、荒れ狂う奔流が静まっていった。音の変化が特に顕著で、遠ざかる木霊のように勢いを無くしていく。

思わず二度見してしまうほど劇的に状況が変化している。流れ出す水量は刻一刻と変化し、衰えていく。今や入り口を塞ぐように溢れていた大量の水は、下流のごとき小さな川に縮小した。危険はもう去ったと結論づけた彼が松明で先の様子を伺おうにも、流れる水が反射していることしかわからなかった。ベリグラは先へ進んだ。

そこは円柱の形をした小空間だった。先ほどまで大量の水があっ

た名残として、壁が濡れている。

松明で中空に弧を描くように部屋を照らすと、四方の壁は近く、狭いことがわかる。

現在知りうる情報では　ロマネスクの様式を連ねた小さな空間は貯水部屋だったのだと、推測した。入り口から見て左右に、壁とは違った厚い石板が立て掛けられている。石板の底辺から反り返るように水飛沫が散っていることから　急激に水流が勢いを無くしたのは水の出所を塞ぎ止めたからなのだろう。この場所が地下だということ鑑みるところ、湖から引き入れている可能性が高い。この貯水空間を管理しているであろう人物が監視を怠けていれば、ベリグラは消息不明の溺死体になっていた（湖の規模にもよる）。

縦に奥行きのある空間の天井を見上げれば、螺旋階段が壁に沿ってベリグラの立つ底床まで続いていた。階段を上る姿をシミュレーションするように松明を動かしていくと、天井付近は本来の石の色をしていることがわかった。どれほどの水が貯えられていたかを知らしめる鈍色の壁に、色の境があった。

普段この空間はあまり使われないらしく、階段の先はなかった。地上とを繋ぐ出入口があるはずの場所に蓋をされているため、光が届かないのだろう。そうだとすれば、どんな方法で溢れる水を塞ぎ止めたのか、伺い知ろうにも思考が追い付かない。とにかくも、閉鎖された場所に違いはない。ベリグラは天井付近で蓋がされているのか否か　後者だとすれば非常に厄介なことこの上ない。

一抹の不安を抱いて環状階段の初段を踏み出したときだ。

重い摩擦音が彼の頭上から降ってきた。反射的に見上げると、柔らかな光が目差した。

肩から足首まで覆い隠す蒼黒色をしたローブを着た　ベリグラほどではないが非常に背の高い女性が天井付近から姿を見せた。もっとも、性別を判断する際に重要視される体格はゆったりしたロー

ブで完全に覆い隠されているため、彼は顔つきで断定しているに過ぎない。

ともあれ、女性であることは間違いなかった。水が抜かれた空間はやはり地下の貯水部屋だったようで、様子を見に来たといった体でおそろおそろ環状階段の最上段から姿を見せた後、女性特有の声で叫んで引っ込んだ。

彼女はしきりに、人ですと大声を張り上げている。ベリグラの耳は大きく、アイルーのそれに近い形と性質を持っている。形に違わず音を収集するのに長け、聴覚が鋭い。

その大声に含まれる声質から、第二次性徴を過ぎた女性の声色の模範という結論が導き出された。耳が良いことは彼にとってはお押し付けられたオプションでしかなかったが、皮肉にもオプションは役立っている。とは言うものの、現時点ではただ性別を区別しただけで大した収穫ではない。

図らずもエスオーエスを発信せざるを得なかったベリグラを見つけた出した女性は、蓋を開けたままだ。それが目的なのかもしれない早く出てきなさいと、無言の慈しみが込められているのだろう。

彼は階段を上り詰め、ようやくまともな光にありつけることに安堵する。松明は心細い。そんな彼をさらに温かくさせるように、地上からは喧騒が溢れている。ただし、ベリグラはそのすべてが快いものではないことを聞いた。

ついに時が来たんだ！

巫女様の言葉は真のようです！

では、やはりあれも本当なのか。

口々にそう言っているのがわかった。こつも騒がしいと、話題になっっている当人からすれば　顔を出しずらいと言うのが心の悲鳴だった。

ただし、彼が躊躇している間に迎えが来たようだった。

衣擦れの小気味良い音が床を這うように、地上に出る寸前で立ち止まったベリグラに近づいていた。同時に、地上で囁いていた人々の声が静まっている。彼は本能的に上位階級のリーダーが現れたことを悟った。それも、荒れたこの時代には珍しく　歩き方から察するに気高く、清純な人物。

歩みが止まった。なぜなのか、それはつまり目的地に辿り着いたことを意味する。彼はふと俯き、足元に影が落ちているのを理解した。先程まで包むように彼を照らしていた光が遮られているのは、すでに邂逅を余儀なくされていると煽り立てられているようなものだ。

ベリグラは見上げ、覗き込んでいる者の正体を見た。

柔らかい光は地上の全域から発せられていた。下から見ると、建物の中だということに気づくのに遅れる。それほど天井が高い空間だった。

彼を見下ろしているのは女性だった。ただし今回は声による識別を行っていないため、確証はない。　女性の傍らにはベリグラを発見した長身の彼女もいる。

彼は見下ろしてくる女性を見つめる内に違和感を見つけたが、どうにも言葉にできないようだった。

視線を合わせている内、上位階級とおぼしきその人物は口許を緩めて微笑み、彼から見ても　地中に生息する生物が顔を出す目線ということ　わかるように後ずさる。

「ベリグラさまですね。　ついてきてください」

言葉の意味よりも、違和感がいつそう強化されたことに彼は内心ひどく取り乱していた。顔と声が合致しなかったからだ。いや、正しくは合致しているが不自然。その場合は安易に決めつけることはない。　ベリグラが生きてきた中でも、低い声の女性や高い声

の男性は居たが、こうも変な感覚に捕らわれたのは初めてだった。そんな余計な事を考えていても頭は律儀に言葉を受け取って行動を開始していた。

地下を抜け出すための最後の一段を踏み出すと、そこは大聖堂だった。ゴシックとロマネスクを混同したような、立体的構造の空間。柔らかな光の正体は、数多く存在する柱に掲げられた灯火による、影を作らないほど大量な光の複合の産物。地上の天の川と言える大した光景だ。

彼が這い出てきた場所は大聖堂における教壇の位置であり、スライドされていた蓋は説教台だった。広がる空間いっぱい信者の椅子が並んでおり、黒いローブを着た人々が不安げにひしめいている。それどころか嫌悪感にすら見える。

先導する二人は並ぶとその身長差を浮き彫りにした。側近と思わしき彼女の背が高いことも理由だが、リーダー格の女性は平均身長よりやや低い小柄な姿。ベリグラの勝手な思い込みで長だと決めつけているようなものだが、それを含まずとも、本当に統率者なのか疑わしい。

二人は人々に会釈し、さつさと歩き始めた。付いてこいと言う意味なのだろう。そうでなくとも、ベリグラにはその選択以外の行動は思い当たらない。

集会場を離れ、無機質な鉄の匂いの充満する回廊を突き進む。道すがら、会話が投げ掛けられた。

「ぼくはメアル・イルムト・アルフェン。わざわざご足労だったね」

側近の単色のローブと違い、装飾が豪華な衣を見るからにやはり重要な立場にあると再認識できる小柄な長はメアルと名乗った。メアルは笑みを浮かべ、全面的に好意を示した。どうやら彼女（あるいは彼）は見知らぬ地に一人のベリグラに対し、友好的な立ち位置にいるようだ。

メアルは口火を切って喋り続けた。

ボレア城壁地下はトリリアリスと繋がった非常連絡路だということ。非常事態になればトリリアリス側から水を排出し、砂で固めた隠蔽の策を押し流すつもりだったこと。そういう取り決めに過去にベリグラの知人と決定していたこと。そして、近い内解放するつもりだったときに、ちょうどよくベリグラが現れたこと。

メアルはそれらを流暢に説明してみせた。すぐに話せるよう、今日までに心内で何度も反復していたのだろう。

回廊の突き当たりで塔の最下層と思われる広場に出た。螺旋階段が天まで続くほどに延びている。まさかと思った。彼はボルボロスの狩猟から掘削、そして長路の通過までに疲弊しきっていた。しかし二人は躊躇なしに段を上って行く。

「積もる話はたくさんありますが、今話したようにこの地帯は非常事態に陥ろうとしています」
「陥ろうとしている？」

中腹はまだ遠い。しかし確実に一段一段を踏む速度は早くなっている。わかりやすい焦燥の表れだ。

「ルーク・オブ・ワルキューラ 及び、タイクン・オブ・サブールの二者が、砂漠西へ近づくと星が示しています」

「なんだそいつらは」

「砂漠西には町がありますね？ 明日の正午から八つ時にかけて現れるでしょう。ベリグラさまはこの事実を知る者として撃退へ向かってください」

聞き慣れないフレーズを説明もなしに聞かされたベリグラは、メアルの話にいまいち実感が持てなかった。何の証拠もないただの言

葉で、明日の砂漠へ行けと言う。彼は面白くないジョークだと、ほくそ笑む。

それを察したようにメアルは振り向き止まる。

「父の占星術の話を忘れたのですか？　いえ、百柱夢の生き残りといえわかりますか？」

状況を把握できていないベリグラに対し、メアルは憤慨している。長身の側近は黙ったままだ。

ベリグラの言葉待つまでもなく　理解せずとも、すでに決定事項なのだろう。再び歩みを進める。

彼は百柱夢はへちゆうむというフレーズを聞き、なぜもつと早く危機感を取り戻さなかったのかを恥じた。歯軋りさえしていた。

二十年前、砂漠を襲った忌々しい大災害。彼はそれに立ちあつた第一人者でもあつた。

災害というのは自然現象ではなく、モンスターの出現　それも超大型かつ大多数が一拳に群れを成した特異現象のこと。当時の混乱が頭に過る。

登り行く間、壁に扉を張り付けた部屋はいくつもあつたにも関わらず構わずに進むところ、やはりメアルは権威としては上位にあり、目指す場所もそれに見合う位置にあるようだった。

ようやく上層に差し掛かった頃、六芒星が描かれた扉が見えた。道中幾つも通り過ぎた扉よりも一際大きなその扉は、言わずとも目的地であることを示しているようだ。

メアルが扉の前に立つより早くベリグラを発見した女性が素早く先回りし、道を開いた。

そこは、どこか錬金術師の部屋のようだった。真っ黒の壁には四方に巨大な窓が、壮大な森の様相とその先の砂漠を映している。

部屋は細々した骨や鉱石など用途不明の物体が散乱していた。取り分け目立つのは、散乱物に囲まれる中央台座で輝く水晶玉。煙のような光が渦を巻いている。

メアルは一目散に水晶へ駆け寄り、ベリグラを見据え、手をかざす。水晶に影が落ちる。

メアルは言った。

「あなたを占います」

3 ラン・トゥ・コマンド

占星術は、俗に言う予言の類いとして世間に浸透している。昨今はハンターの概念すらなかった旧時代に比べ人類の危機感も緩くなり、単純な生活にスリル以外の刺激を求め始めている。特に娯楽の類はめざましい伝染率を誇り、占星術もその例外ではない。

今や占いには多種多様な方法が普及しており、主に女性が好む運勢占いから伝承や口伝てで広がる迷信めいたものまでがその定義に含まれる。共通して、どちらも正確性のない自己暗示で構成されている。

だが、いくら当てずっぽうのいんちき商売として世間に認知されていようと、トリリアリースにおける占星術は生ぬるい似非商売とは別格の職人技と言えるだろう。

メアルは水晶から目を離し、薄明かりが漏れる窓の外を見つめた。雨が降らない地域ではよく星が見えた。

占星術には呼び名の通り星を使う。正しくは借りるというベキか。

夜空に煌めく全ての星々は暗黒の海から顔を出して世界を見ている。星には個々に光の強弱があり、最高明度を持つ存在は一等星と呼ばれ、以降は数の序列に従ってランクダウンしていく。当然星が見えなければ占い以前の問題だ。それゆえ雲は占星師の天敵と言えるだろう。ただボレア砂漠には雨雲が発生しない。雨を作るリズムは、草ひとつない乾いた海には存在しないのだ。森に隣接しているため、時折リズムが息を吹き返すこともあるが、砂漠の空は決まって晴れ渡っている。雲は海を渡り、別の大陸に集約される。もしくは森の上空の限られた範囲でのみ降雨を許される。そういった点で、

砂漠で占星術を行うことには利点がある。

日々星は生まれ、消滅することもある。いわば太陽と月のバトンタッチは星の産声。未知を歩んでいく赤子のようにその表情を変え、感情を示す。時には流星にもなり、月が嵌めるダイヤモンドリングすら星の範疇に収まる。星を占う術は人に当て嵌めた“星という可能性”を見出だすことではなく、文字通り星による選別を代弁すること。ただの占いと違うのは、人外存在を示唆することで絶対的支配力すら想起させられるということだろう。

一分も経たない内にメアルは夜空と水晶から意識を切り離し、どこか気の抜けた様子で息を吐いた。目を閉じると長い睫毛が際立った。占いの魅力に虜となった人には、水晶に対してただ無意味に佇むそれだけでその場しのぎの中毒性質にも似た期待を抱くが、ベリグラのように運勢を信じない側からすればまさに無意味であり無価値なものしか見えない。メアルは、ベリグラからは見えない水晶台の引き出しとおぼしき場所から紙を取り出した。今取り出すということも占いに関連しているのかもしれない。買い出しのメモに使うような粗末なものだが、それも計算か。いずれにせよ、彼は期待値は低いと思っている。

「聴こえました。貧狼星の第二幻語、三頭四始天言 “セクメド” の影、とのことです」

「お、おう。それで、どういう意味なんだ」

「僕たちの言葉に置き換えると“迷うべき隠者”という意味です。つまり……何らかの選択を強いられることになるのでしょうか」

メアルは水晶に布を被せてその場を離れた。ここまでだとありがちな占いと差異は見られない。どういった原理で物言わぬ無機物から言葉を得たのか、ベリグラは理解に苦しむ。

星による占いの結果を“聴こえる”と称するメアル曰く、星と水晶は密接にリンクしており星々が玉を照らすときに生じる虹彩があらかじめ決められた言葉を示し、連続して煌めくパターンで予言を導き出すと言う。つまり今回はセ、ク、メ、ドの四つの単語が輝きから抽出されたのだらう。彼らには彼らの世界があり、その世界は彼らにのみ開かれる異世界。ベリグラに理解できないのも至極当然だ。ただ、占星師と呼ばれる者すら完全に理解していることはなく世界に存在する森羅万象が暴かれつつある最中でも、星は未だ人智の及ばない領域下の存在であり、学者にとって衝突を避けられない“汲めども尽きせぬ泉”と何ら変わらない問題だということは確かだ。

占いに夢中になる者は占星術の的確な予知を奇跡だと言う。しかし占星師はそうだとは言わない。偶然でもなく、それは運命だと称する。占星師達は、なんらかの意図の下に発せられるメーデーのように必然的に捻り出された嘆きであり、暗黒の空からの警告だと認識している。どのような結果になろうと、星はただ伝えるのみで解決策は提示しないという。

ただ占いを行っただけで、すでにその場所に用はなかった。三人は部屋を出た。側近の女性が言った。

「今日はこれまでにしましょう。詳しいことは明日早朝にて」

彼女は客間を案内すると言い、一行は再び螺旋階段を降りるはめになる。憂鬱感の到来は避けられないと思いきや、メアルの側近の案内によると昇る途中にあった部屋がそれらしかった。

階段を降りながらベリグラは考えていた。未来を知れたら、などという戯れ言ほど忌むべきものはないと。未来を知って得るものは

なんなのか。それは自虐に他ならない。

間もなく恋人ができると聞けばそれなりに気分も高揚し、期待もしてしまうだろう。そして本当に恋人が現れたとして、果たして占いを感謝するのだろうか。その出逢いが災厄の発端だとしたらいや、そこまで深読みしているのならそもそも占い事には出ずまい。ただ、必然を未然に知ることでは悪影響が及ぶとは考えられないのだろうか。恋人が現れるのは自らの力であり、自然な流れだったのかもしれない。占いのお陰ではない。

そして、もしも災いの予言を突き付けられたとすればそれは避けられない自己嫌悪の始まりだ。ベリグラの場合、迷うべきシーンを連想したとき真っ先に挙がるのが命の選択。二つに一つを迷う未来を知ってしまうと、考える時間が多いほど苦痛は肥大する。未来の擬似固定だ。自己暗示の欠点は全てそこにある。ああすればこうなった。こうしたからあなつた。伴侶についてならまだしも、取捨選択を確定させられたのだから二つの内一つの破棄は避けられない。

ベリグラは妄想に囚われた自分のイかれた思想を振り払うべく頭を振った。振り乱れたのは髪の毛だけ。占いは安易なものであるがゆえに、時として性質を相転移してしまう。もう彼はダメだ。今この瞬間すでに“未来を考えないようにするか常に意識するか”を迷っている。それは重大なミツシヨンであり、最も回避すべき状態だった。

量にして一階分と形容できる段を下り、ベッドが首を長くして待っている部屋に着く。

「明日はぼくが起こしに行きますから、ごゆっくりお休みください」

側近の女性は、メアルに対し動揺を示しながら「私が行きます」と言う。メアルは聖母を思わせる安らかな微笑みを浮かべ、自分の

意思を貫く旨を伝える。この問答からも、やはりいくらか階級が上位であることを伺える。窓のない塔で松明に照らされるメアルの笑顔が、暗い鉄の満ちたような空気を柔らかなものへ塗り替える。実際、塔全体は葬儀場の香にも似た辛気臭い雰囲気と臭気に満ちている。その笑顔だけで、覆しがたい負のオーラが取り払われたかのごとく思えるほど、それだけメアルは魅力的だった。もともと、アイボリーも含め外面的な魅力は大して重要ではない。外面の華々しさを利用してそれらしい詐欺を、いわゆる、“当たる占いやつてます！”という謳い文句の小芝居を平気で常習する者だっているのだから、簡単に心を許してはいけない。さらに言えば、メアルの予言自体疑わしい。結局はただ空を見て水晶を見て、それらしい雰囲気を作っただけだ。そんな小芝居に付き合っているだけマシなものだ。半ば自分を慰めるように、ベリグラはそう信じたい一心で否定の可能性を心中模索していた。

彼に用意された個室は、本来なら多数の人間に使われるべき空間の余白を持っていた。つまりベリグラは贅沢にも集会部屋を貸し切った。

メアルらは簡単な食事の貯蔵場所を教えてすぐに立ち去った。部屋の左右の壁は無数の蠟燭が火を灯し、ここでも雷光虫が飛び交う草野原の様相を醸している。

早速彼は背負っているグレイヴディガーのメンテナンスに取り掛かった。もともと、現状では整備工具はなく、取り換え用の微細刃となるエルトライト鉱石など一片の欠片も見当たらない。

アグナメールを着ていることだけがハンターであることが幸いだった。どれだけ無神経だったとしてもアイテムポーチは呼吸の如く必ず付き纏う。

エルトライト鉱石の粉末を練り込んだ加工済み砥石で槍身を磨くと、万全とは言えないもののずいぶん切れ味が取り戻された。砂を削ったことによって回転部にいくらか累積してはいたが、試運転

を試みるに稼動に支障はなかった。

一段落し、メールを脱いだ所で、未来の予測についての不安が帰ってきた。

不安の出所は変わっていた。取捨選択については今や不動の要塞として脳髓に居座っているが、どの命を選択しなければならないのかを考える段階にまでシフトアップしていた。

くすんだ黄色の髪と明るい声が甦る。

ベリグラは頭を振る。彼女が場所を間違えるはずがない。ギルド集会場の雑務から飛び出し、銀色に輝く太陽と金色の砂に身を焦がすはずはない。

厄介な占いだった。ベリグラのように、実体と記憶から物事を見る側からすれば、未来永劫手を出さない代物だから。それが一般の反応だ。彼こそが模範囚であり、未来に囚われた囚人なのだ。

蠟燭の火が揺らいだ。窓はない。そもそもこの塔や聖堂には、占い部屋を除けば外界との境界が設けられていない。だが、気にすることはなかった。その辺りから彼の眠気は急速に促進され、自覚もないまま眠った。

蠟が溶けていく。

緩やかに沈み行く夕陽を思わせる明かりの沈下。

暁は近い。

赤い星が白い天蓋で疎らに輝いている。

ベリグラは草木のない平らな大地に立っている。メールはない。インナーを着ている様子もなく、裸である際に肌に感じる外気の鋭さを容易く理解できるにも関わらず　ただ自分の体を薄い幕が覆っている感覚。

彼は夢を見ていた。自覚はない。夢を見ていることに気づけず、

このことは起きたあとには忘れているだろう。

一瞬の間に星が大地に近づき、巨大化したかのように見える。平
行して、地平線の辺りや彼のすぐ傍にまで 人影がちらと現れる
と、黒いシルエットのそれはあちこちに停滞して、ベリグラの回り
を徘徊し始めた。

自覚はないとはいえ、夢の世界で彼は漠然とした孤独感を感じた。
人の形をした影達は皆、女性の姿を彷彿させる。それらも、衣装
を纏った上での出現ではなく彼と同じように膜を被っただけの裸体
なのだ。

彼はぼんやりとした虚無感に任せて人影を見つめていた。自分が
自分でもなく、他人が他人でもない。日陰の中から明るい部分を覗
く感覚。そこでようやく夢を見ていることをなんとなく実感する。
人影が減り、群衆に近いそれらはいつの間にか一つに集約されてい
た。

彼は、恐るべき実態を目の当たりにする。

女性らしき人影は全身真っ黒に塗り潰したような姿だったが、今
ははっきりした表情や部位が見えるようになっていた。

知っている顔。

彼は思わず叫んだ。

「サリー？ サリーなのか！？」

眩い金色の髪が純金の質感を以てして煌めいている。艶かしい曲
線を描く体型を 局部こそ未だまっさらな膜を張り付けたに過ぎ
ないが、ギリギリのヌードだ 意識しなければ男性とも見て取れ
る短い髪は水中を漂う海藻のように不規則に揺れている。

そして青い目。雲を掻き消し澄み渡った空を凝縮したような色彩。
全てを見下ろす主たる色。

人影は何かを放った。口が開き、断続的に形状を変えている。

いい？ ベリグラ。あなたの人生はあなたのモノよ。他の誰が決めることでもないし、あなたが知っていることでもない。ベリグラ。あなたが人生を手取るのよ。真っ白なあなたがパレットを持って、好きな絵を描くのよ。でも変な絵は描いちゃダメよ。わかった？

ベリグラ。それとね。

ベリグラ。

「……ベリグラさま！ 起きて下さいっ！」

全ては闇の海溝へ落ち、彼の目の前に広がっていた白い世界は跡形もなくなつた。赤い星々の煌めきの美しさの代わりに、ベッドサイドから身を乗り出して覗き込んでくるメアルの姿が映し出されるが、代わりにはならない。禍々しくもあり神々しくもある虚夢の幻想と現実の違和感たるや、顕著な気落ちの一途をたどるのみだ。

明かりが完全に落ちきつた部屋は薄暗く、ぼんやりとした輪郭は頼りないものだったが、その端麗な顔つきは紛れもなく昨夜ベリグラを凶気の世界へ誘った張本人のものだ。その者は暁の要素を全く含まない無機質な闇の時間を朝だと言う。ただ、宣告された状況を受け入れるにはあまりに要素が足りなかった。窓がない部屋はさながら独房でもあり、広さこそが救いではあるが、窓が無い点を踏まえればそれ以下の水準だった。ベリグラが覚醒を理解するには説得力を欠きすぎた状況と言える。

「もう、朝か。まだ眠いな」

「え？」

目を閉じ、メアルに背を向けると彼は再び微睡みへ駆け出す。脳はまだ朝を理解していない。これは至極当然でありながらひどく身

勝手な睡眠不足だ。いわば、睡眠の偽造だろう。それも好意ある計らいが引き起こした裏目の。しかし、それは眠るための理由の一割に過ぎない。やはり夢の続きが知りたかった。浮遊する金色の藻が頭から離れない。夢とは言え、その人の姿を見たのはずいぶんと久しぶりだった。昼下がりの青い空が詰まった瞳を、ベリグラは反芻するように瞼の裏で思い返す。

部屋の暗さと盲目の感覚から、白い世界の欠片すら失われた。夢の続きの閲覧が不可能であることは理解している。それでもすがり付きたかったのに、振りきられるように暗闇は覆い被さる。彼は完全に目が覚めていた。

目が覚めているのに眠いとは矛盾した領域の理不尽だが、事実そうなのだ。“目は覚めたが眠い、イコール眠い”。つまりは怠慢。人としての弱さ、それに従順なことは場合によっては致命的なミスとなる。ベリグラにおける唯一の汚点と言えるだろう。ただし、想定される“場合”に比べれば、今は幾分か時間的余裕はある。

少し迷ったように息を呑み、見兼ねたメアルの華奢な腕がベリグラの剥き出しの肩を揺する。タンクトップタイプのインナーからさらけ出された隆々たる筋肉は鋼のごとく堅牢で剛堅。メアルの非力な力では傷ひとつさえ付きやしない鉄壁の狸寝入り。

筋肉の要塞は不屈き者を発見し　脊髄反射と呼ばれる代物が、メアルの腕を掴むべく、眠気すら無視した正当防衛として彼の太い腕を動かした。

「誰だ？　もう俺は眠ってる」

細く白い手首を握る力は武器を手取るように猛々しい。

寝言なのかまだ起きている状態での小言なのか、判別に難い。常識的に考えれば眠るにはあり得ない速度である。メアルは彼の目を見る。閉じかけた瞼の下で開いた瞳孔がベリグラの要求を代弁して

いた。

「……あのですね。早急に支度を整えていただかなければ、ポートル・ティンが消し飛びますよ」

呆れぎみの声色をベリグラが聞き取れないはずはなかったが、よほど眠いのか微動だにしないままだった。普段の彼ならば、いや、誰でも、体感的に睡眠不足といえ充分な睡眠は取れているのだから、この程度の生理現象を耐えることは容易なはずだった。

メアルに向き直るように寝返りをうつと剛直な双碗が突然空を切り、黒いローブの端を掴んだ。

唐突が具現したそれに困惑するより早く、凄まじい勢いでメアルの体がベッドに引き寄せられる。予想だにしない展開だった。腹いせに、一方的な憤りを乗せて殴られるほうがまだ予想圏内だ。

一瞬の内に大きく変わったメアルの位置。まるで抱き枕だった。仰向けに横たわるベリグラの上に同じく仰向けに抱かれる。両腕をホールドされ、さながら手錠のように逃げることさえ許されない。メアルはしばらく瞬きをするだけで、状況を理解できなかった。一瞬目を閉じ、再び視界を自由の元に解き放とうとも、ただ暗闇に包まれた天井がそこにあるだけだ。

対してベリグラの意識は冷や水を浴びたかのようにはつきりと研ぎ澄まされていった。微睡みかけた眼も、興奮状態のイランクツクの耳のように完全に見開かれた。

彼の両腕が拘束するメアルの華奢な体をローブ越しに感じ、天地がひっくり返った感覚としてメッセージを受け取っていた。そう、まさに入れ替わった。認識が反転した。声色による判別が疑問を生んだその正体がわかったからだ。

細い二の腕には確かな骨の角と呼べる突出が存在している。ベリグラの腹に密着した背中も溶け始めた氷を思わせる未熟な柔らかさ。固いようで柔らかくもある、極めて脆い崩れかけの泥の城。

胸元に当たる後頭部で紺色の髪が乱れ敷かれている。椿の花の香がほのかに漂ってきた。ベリグラは呟いた。

「男だったのか」

小さな発見はささやかな興味としては優秀だがそれ以上の昇華を成さない。ベリグラは眠りの初速をラストスパートにまで移行する。メアルという抱き枕を抱いたまま。彼にとって荷物を抱えてのランニングは造作もないようだ。

顔を真っ赤にしたメアルは怒りから来る羞恥心に体を小刻みに震わせる。

「ベリグラさま、冗談が過ぎます……」

メアルは勘違いしている。そもそも、ベリグラの思考は冴えている。冗談を言うような気分でもなく、ただ真剣に眠ろうと粉骨碎身を貫く所存なのだ。それはつまり、意識とは切り離された領域での行動だと言うこと。彼はベリグラの寝相が悪いということに気づかなかった。いや、寝起きが悪い。覚醒直後のエスピナスよろしく、夢遊感に素直なのだ。

側近の女性スティラが部屋へ入ってきた。

メアルに付き添って部屋の外までついてきたはいが、いかんせん近い未来砂漠の救世主と成りうる男の目覚めが長引いている。ベリグラ自身は気づくはずもないが、彼はメアルと一悶着する間時間にして十分以上、うめきながらベッドでもぞもぞと蠢いていた。そして彼女が見たのは仕える主が、なぜか抱えられた姿。明かりの落ちた部屋で二人が重なるシルエットは、曖昧な見方だからこそはつきりと見えないからこそ、男女がまぐわうそれに近いものと捉えることになった。もはや理解は存在しなかった。

「メアル様にそんなご趣味があつたなんて」

そう呟くや、集会に使われるほどの規模を持つ部屋の入り口からベッドの元まで、微妙な空気を孕んだ小声は瞬く間に彼の耳へダイブし、一層の羞恥を誘うに至らしめた。荒れくれからしてみれば“そいつのケツは血だらけだな”が現実として実現していると言いたくなる状況なのだから、恥ずかしくて当たり前だ。せめてもの救いは目撃と誤解の虜と化したのが女性でありたつた一人なこと。

瞬間的にホールドされた体に力が入るが、ベリグラの眠りは、たとえ偽りであろうとも妨害者の逃亡を許さない。

貧弱であり、それに付き従うように白い指が逞しい手の甲を掴まむ。爪が肌に食い込み、感覚が配置された表皮を圧迫して血の気を集合させる。閉じていた瞼が徐に開いた。眠りへのロングランを邪魔された無言の彼が言いたいことは目に現れている。“びっくりしたじゃないか”。その割りには大した挙動を見せず、そして視線は緩やかにメアルの後頭部へ移る。ベリグラからすればメアルをアイルーかモス程度にしか見ていない。気にするはずはなかった。

一つだけ大きな動きがあるとすれば、痺れを切らしたメアルの反撃について拘束が緩んだことだろう。ベリグラは急ぐ様子も取り乱す様子もなく、メアルを脇にこぼしながらゆっくりと寝返りをうつ。

メアルはため息を吐く。吐かざるを得ない。ハンターの生活リズムと占星師のそれには大きな差異があつた。大きすぎる亀裂だ。交わらない平行線とも言える。

基本的に個々の自由によって行動を許されるハンターのシステムは、ベリグラのような反応を起こすことこそ通例であり、掟でもある。まして、ポートルーティンの事情とえば 仮に狩猟が本業でなくとも、とにかくその筋に関わる お抱えのハンター数が八割を越えている。

海のへそ 地図上でほぼ中心に星を射つ大陸の中枢でその威厳

を示す、巨大かつ緊急事態の多い街ミナガルデなどで見られる古龍襲撃もお伽噺のように笑い飛ばされるポートルーティンにおいて、占星師の規則正しい輪廻の生活は皆無だ。

昨夜からの酒が入っていることも、危機感の欠如に貢献している。ベリグラにとってそれは悪ではなく、貢献と呼ぶに易い先入観だ。

血の気が引くほどに冷めた気分だったステイラも、時間の経過に従い別の意味で青ざめるに至った。とんだ誤解だ。それでいてこうも和解に至る道の短いことは稀にもない。主こそが被害者であり、むしろ同情を向けるに相応しい。

彼女はローブのポケットから小瓶を取り出した。占いを生業とする彼にはなく、彼女の役割からすれば携行必須の無用の長物。少なくとも今必要なことがあり得ない事態であり、緊急事態だ。メアルは意気消沈しながら部屋を後にし、ステイラは側近として処理を続投する。彼女の意思はとてつもない規模にまで膨らんでいた。それは一種の過保護で、呆れを通り越した静かな怒りだ。

世間ではクーラードリンクと呼ばれる 昆虫の体液と氷晶を調合した、体内外問わず冷感を促す液を、猫のように背中を丸める怠慢の体現者に浴びせかけた。その際の彼女の表情とくれば、クーラードリンク顔負けの凄みを含んだ無情の蔑みが込められていたのだから恐ろしい。 浅い地層の粘土色をした髪の毛がしつとりと水気を含み、汗以外の水分に出会ったことのない布団が濡れて重さを増す。ベリグラは微動だにしなかった。鈍感という言葉すらお手上げのようだった。彼女は側近という役目を放棄し、諦めた。部屋の外で主従関係の二人が合流し、アイコンタクトする。螺旋階段の塔という湿気たコンサートホールの元、歌唱に例えれば心許ないデュエットだが、満場一致。メアルは言う。

「馬車の用意を。ワルキユーラ、サプールの情報についても守護星

師団に手配を」

現守護星師団長スティラに下った号令はポートルティンから来た呑気な男と違い、迅速に行われる。ベリグラが伸びをしながら起きる頃には準備は整うだろう。

まだ太陽は昇らなかった。

外では優しい光が塔を撫で始めている、薄暗い城の朝。

彼は人姿の皆無な長い螺旋階段をゆつくりと降りて聖堂に向かっていた。朝礼は終わり、人の姿は少ない。

人々はどんな生活をしているのか、その欠片とも見当たらない。一種の治療院なのだろうか。外界で“ヘマをした”人々を窓の無い城で“治療”する。只でさえ異常なる思考回路をショートさせた病人の頭が、さらにおかしくなっていく様が見える。

絡み合う百合のステンドグラスをバックにマリア像が対になった中央の教壇前で、小柄なリーダーと長身の従者が仁王立ちしていた。スティラの背には、長大かつきらびやかなエメラルド色の装飾が成されたランスが彼女の頭の後ろから生えているような形で聳えている。頭は濃いエメラルドのリオレイアの甲殻片が額で輝く、修道女が被る顎紐の無いウィンプルのような頭巾で髪の毛を全て覆い隠していた。

「おはようございます。ご機嫌いかがでしょうか」

ベリグラが二人に近づくや、声色に低音をふんだんに含めて怒気をアピールした挨拶を浴びせかけたのはスティラだ。

「……おはよう」

「砂漠への到達時間およそ二十分。ボレア城壁から件の二者の出現推測域まで一時間」

「まだまだあるな」

「あくまで推測なので、危機感を持ってください」

彼は黙った。 やれやれ。 お堅い。 そんなんじゃモテないぞ。

最下層に位置していたペースは今や上がり調子だ。自分で考えていた暴言が 図らずも誰かの受け売りということに気づくや否や、金色の鎧を着た男の姿が脳裏に過る。ベリグラは一瞬でその偶像をイメージ上でのランスで貫き捨てた。 “うざい奴を思い出すとは、頭がおかしいぜ”。

メアルが遠慮がちに咳払いする。

「……では、今朝の最高位明星占術の結果を報告します」

暁間際の黄緑色の空に散らばる星にも占星師達は輝きを求め、星もそれに応じる。

過去の統計から、夜の星よりも明け方の消え入りそうな光の方が、正確なメッセージを授けるらしいと判明していた。消え入る、すなわち死に至る直前に真価を発揮するというのは人間に似ている。

「昨夜話した通り、現在砂漠へ現れる星将はワルキューラとサブールに間違いありません。どちらも砂漠西へ向かっているのも、確定でしょう」

明星とやらはどうやら將軍と呼称されるモンスターを派遣するようだ。ベリグラは気が滅入るという言葉の意味を実感し、頭を掻きむしる。

星という名の彼らは例外なく 絶対君主に忠実な家来のごとく

助力を授けた。毎日二度行つ占星術は、もはや現在存命する全人口の数値の何百倍にまでその履歴を膨らませていて、一度として狂いを産み出さなかった。だからとは言えないが、ベリグラがその信頼ある実績を知らないことは哀れでもあり、同時に必要ない迷いを強いられていると錯覚していることこそが悪だ。

星将名、ルーク・オブ・ワルキューラ。“舞台裏に潜む者”。星将名、タイクン・オブ・サブール。“葬儀を始める者”。

仰々しい異名を持つ両者は星将と呼ばれ、詳細こそ判明していないが、砂漠に生息するモンスターということに間違いなかった。占星術の唯一の欠点は映像がないこと。言葉では姿まで伝えることはできない。例え何百の単語を並べようと、一見しての色彩や勇猛な姿に勝るものはない。

その弊害を一心に受けたために、肝心の姿を確認することができない。どれだけ机上の知識を蓄えようと、実際に鉢合わせになるまで実態がわからない。砂漠で、もしかするとベリグラはそれらに遭遇したことがあるかもしれない。現状、それすら照合しようがなく、全くの未知と認識せざるを得ない。

「ワルキューラに至つては舞台裏の名の通り、擬態に似た潜伏能力がありそうです。さしずめ、砂に潜る飛竜のことでしょう」

どこか曖昧で、抽象的な、実体のない霊体について考察するようにメアルは言った。

「砂に潜る？　だとしたらドスガレオスか、ハプルボッカ……いや、ディアブロスもあり得る」

「うーん。そういう名称なのでしたら、そうなのでしょう」

「おい、モンスターの名前を知らないのか？」

メアルは頷いた。さも正義はここにありとでも叫んでいるように平然と。

ヴルガトリ・ルリアリスことトリリアリースの住人は皆、外界の知識に疎い。だが、交流を前提とする商業においては他国に仕方なく供給できるほど卓越している。その点を除けば自己完結が成立したコロニーと呼んでも差し支えない。ただ狩猟に手を出すことがない。正しくはその必要がない。その都市ではいちいち飛竜を代表とするモンスターの名を記憶する意味がないのだ。

「私の推測ではハプルボツカではないかと」

今度は平然とモンスターの名前が飛び出た。それがリオレイアのウィンプルヘルムを被る彼女の言葉であることは、なんらおかしい事ではない。

同じ空間で過ごす二人の違いは 所属する、いや、生業とするといったほうが正しい 役柄で、大きな差がある。守護星師団は唯一狩猟に通じ、ポートルーティンの荒れくれと同じ気質を備えているといっても過言ではない。聖母の祈りの下で息をしながら、最もその加護から離れた存在。しかしそれは咎だとされない。野蛮だと蔑み、遠ざけようと試みても人の意思とは関係のない時間に生きるのがモンスターだ。武器を捨て三大欲求のみ忠実にこなし、どれほど和平の旗を掲げようが、人外が存在からすれば餌が何の抵抗もなしに立ち尽くしているのと変わりない。まだアプトノスのほうが知的な生物とも思える。

すでにその問題 つまり、いかにして人間が生存競争に打ち勝つかについての過程は通りすぎていた。だから守護星師団という洒落た名目の野蛮が設立されている。

星将名には規則性があると、頭に付く単語によって導かれた結果の内容がある程度解明できると、スティラは言う。

ルークを冠するは、液体にしる固い岩盤にしる砂にしる、何かしら潜行能力に秀でたモンスターに当てはまる。タイクンを冠するは四足歩行を主とする飛竜種。ティガレックスのような太古の形態を維持したワイバーンから派生進化した、大地での駆動に長けた種を“始める者”、イコール原始から現在にまで進化を始めた創始者として通常飛竜と区別する。そして、星将の名を冠したモンスターはどの個体も、既存のそれらとは別格で 明らかに異質な力を有するという。ただしリオレウスが水の弾を吐くという常軌を根本から覆す説ではなく、より強力で巨大な火炎を撒く、といったベクトルに向いた差異。

ベリグラが口にしたように、二者には候補がいくつかある。潜行の代名詞として挙げたそれぞれのモンスターの 生息域に順応した生態からすれば、候補全てが極低温の冷気を苦手とすることが予想される。仮に、タイクン・オブ・サブルーがティガレックスを指しているとすれば読みは外れる。しかし、火炎などが持つ自然界最強のエネルギーに頼った属性相性を気にしないベリグラには何の損得はない。葬儀を始めるといふ訳からして、どのモンスターが現れてもおかしくない。

憶測はより飛躍する迷いを産む。太陽の翼を備えた鷹の神セクメドの落とす影が大きな翳りをかざすように。

「相手がなんにせよ、俺とあんただけじゃ負け戦だぜ」

肩を竦めるベリグラに、ふふんと鼻を鳴らして「どうかしら」と余裕を見せるステイラ。

ステイラがいくらランスの扱いに長けていようと敵は強大であるう二体のモンスター。ベリグラは、彼女の未知の戦闘能力を期待値として含めても今回の狩りは難しいものだと考えている。

「まあ、ご心配なく。すでに上位クエストとしてポートルーティン

に依頼書が出回っているはず。サブールはともかく、ワルキユーラは百柱夢の古株ですから、目を付けられていること請け合いです。」

もしかしたらGクラスかも、とステイラは言葉を付け足す。

モンスターにも力の序列があり、古参のモンスターほど位が高い人間であればそのルールが通用しないケースがある。だが自然界では、より長くを生き今までハンターを撃退して生き長らえた種は当然強い。

星将とは大袈裟な渾名ではなく、星が将と認識するほどの生命であり、それ自体が　その事実こそが百柱夢をその名に相応しく至らしめる要因となっている。

時が来たようで　身を焦がす恋のように熱い砂漠への　出発は近い。

砂漠へ派遣されるのは、現時点ではステイラとベリグラの二人だけだった。ポートルティンのハンターがすでに出撃している可能性はあるが、なにせ彼らは気まぐれの体現者。戦力に数えることはできない。場合によっては　どれだけの確率かは計り知れないものの　皆別の地方へ出向くという最悪の奇跡も起こりうるから。最悪といえば、荒れくれどもが皆酔い潰れて武器の柄ではなくバスルームの蛇口を握る可能性もある。そんな可能性をベリグラに抱かせるほど、西の砂漠の町はだらしく頼りない。

不安五割、強敵への妙な躍動四割、占いの結果に対する“迷い”が一分。馬車を使うと言い渡され案内される道中のベリグラの心境だ。ハプルボツカなるモンスターが古株だと聞いて、以前に遭遇したことがあったかどうか思い出せずにいる。ベリグラが記憶する限り、二十年前は名前を聞くだけで戦慄するモンスター以外百柱夢には数えられていなかった。ディアブ羅斯は然り、クシャルダオラや

ティガレックスが正面切つての主役だった。おそらく、二十年の間に力を付けたのだらう。今や、新たな種が名乗りを上げ人間を脅かす代表格に認定されている。それはハンターの業界と似ている。角竜等大型モンスターを百戦錬磨の大剣使いとすれば、ハブルボッカやドスガレオス等比較的中級モンスターが円熟していく様は片手剣を巧みに操る新星の玄人の出現と呼べる。それは歓迎すべきか賛否両論といったところだ。根っからのハンターは星将とされるモンスター増加を歓迎する。命を賭けて睨み合う瞬間に身を焦がす輩は少なくない。

ベリグラはいい迷惑だと思う。現実、モンスターが力を付けている現状とは　ハンターが衰えているサインの代替と言うべき事態でもある。

果たして玄人と呼ばれるハンターは本当の恐怖と合間見えたことがあるのだろうか。なんなら一度も経験せずにハンターを続けてみるのも名案だ。だが恐怖は存在する。人智を越えたそれが現れる予兆こそベリグラの不安の正体であり、似非玄人ハンターの知るよしもない現実。

連絡通路を通り、間もなく低い天井が開けてドーム型の広間に出た。馬舎だ。何十頭もの馬が犇めく。

ほのかな蒼に輝く毛並みの馬は、見ただけで相当の手間と愛を受けて育つたのだと分かる。まさにトリリアリースの蒼。メアルの藍の髪と同じ、水の都市のシンボルカラー。次いで純白の布地に身を包んだ馬車があつた。砂に打たれた布地には引つ掻いたような傷が無数にあつた。

明かりひとつない、家畜を囲うにはあまりに暗い空間で、ベリグラとステイラは馬車に乗り込む。ランスを扱う二人が武器を床に下ろすと二つずつの盾と槍が荷室の半分を占拠した。二人という人選は正しいかもしれない。

御者が叫ぶ。声が闇を切り裂いた。光の筋が差し込む。荷室の窓からでもわかる光の侵略。御者側の格子から突き刺さる光の強さに万人の目は眩むだろう。ベリグラは光に包まれる感覚を久しいと形容する。ようやく日の目を、暖かい日溜まりにありつけるとも。わずか一日暗い城に籠っただけで、凄まじい中毒性だ。悪い意味でも。

馬車が動き始めた。彼の考えるところの“治療院”をあつさり出発した。が、建物はどこにもなかった。今馬車が走り抜けてきたのは、まるで人外がはびこる洞窟だと言うように、ただの岩山が背後にそびえているだけ。

つまり、ヴルガトリ・ルリアリスは山だった。巨岩山だった。それが馬車の卸口から見たベリグラの感想。

湖から突き出た荒々しい岩の根元付近で巨大な扉が閉ざされているのを尻目に、馬車は森へ進む。

「通りで暗いわけだ。まさか岩山の中に秘密基地を作るとは」
「オアシスと呼べる水源で、私達が利を得ながら身を隠すにはこうするしかありませんから」

世間から隔離された都市は臆病な人間の巣窟らしい。ベリグラは大して驚きはしなかった。利口とさえ思う。少なくとも、ただ家を並べる町よりはいい。何倍も。

生い茂る森は鳥の囀りすらなかった。道中アプトノスがしきりに辺りを見渡し姿が見られた。どうやら百柱夢は本当に再来するらしい。

トリリアリスは森の中でも砂漠に近い位置だったようだ。ベリグラが地下を通った距離と照らし合わせても納得できる早さで砂漠へ着いた。もっとも、ただの入りに過ぎない。陽炎が手招きする世界の真髄は中枢にある。

「神の加護を」

御者の祈りを挨拶に崩れかけた城壁のアーチで降ろされたベリグラは、森の合間へ潜り込んでいった馬車を少しの間見つめた。行く手には広がる砂海。真後ろに控える樹海とは色の変化が著しい。城壁を変異域と名付けた者は己に素直だ。誰が見てもそう名付けずにはいられない。

「さて、どの辺りだろうな」

彼はステイラに問うも、やはり考えあぐねる。広すぎる砂漠。突如唸り声が空から降ってきた。見上げて反応する二人へ、太陽を背に腕を振りかぶりながら琥珀の塊が急降下してきた。高空より飛来する暴力を、ベリグラは歯車のような大盾をかざして防ごうと無謀に勤しみ、ステイラは走って回避を試みる。

ちょうどステイラが頭から砂に突っ込むようにしてダイビングジャンプを決め込んだとき、獲物へ向けた強襲を敢行する捕食者は、砂の原を掻き乱す竜巻のごとき回転を着地と同時に披露する。言うまでもなく砂埃が勢いよく吹き上がり、砂のつぶてが城壁に褐色の波を打ちつけるように舞い飛ぶ。

かくして、タイクン・オブ・サブルこと褐色の氷牙竜、ベリオロス亜種は開戦の火蓋を切って落とす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8159r/>

ネームレス・メッセージ

2011年11月17日21時17分発行